

比 丘 尼 原 北 遺 跡

(第2・3次発掘調査)

平成13・14年度県営圃場整備事業
本地区に先立の緊急発掘調査報告書

2005.3

長野県原村教育委員会

比^び丘^く尼^{にっ}原^{ばら}北^{きた}遺^い跡^{せき}

(第2・3次発掘調査)

平成13・14年度県営圃場整備事業柏
木地区に先立つ緊急発掘調査報告書

2005. 3

長野県原村教育委員会



遺跡全景 東上空から



小豎穴4

上 遺物出土狀態 下 全景

序

このたび平成13・14年度に実施した比丘尼原北遺跡第2・3次発掘調査報告書を刊行することになりました。

発掘調査は、県営圃場整備事業柏木地区に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けた原村教育委員会が実施したものであります。

比丘尼原北遺跡の保護につきましては、以前から注意され保護に役立つ目的で長野県教育委員会が平成7年度に分布調査を、10年度に試掘調査を行い、平安時代の集落址であることは判ってきていましたが、発掘調査では住居址14軒などをはじめ多くの遺物の発見がありました。関係各位のご協力により全容が把握できたものであります。

発見した集落址は、尾根の南斜面に展開するものであり、当地方では発見例の少ない墓墳が伴っていました。平安時代の集落を研究する上において貴重な資料を提示することができたものと思っています。

このたびの発掘調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 田中正治郎氏の多大のご助力と作業員の皆様のご苦勞により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程で、お世話をいただいた皆様にたいし厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

例 言

- 1 本報告は、「平成13・14年度県営圃場整備事業柏木地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する比丘尼原北遺跡の第2次・第3次緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受けた原村教育委員会が、第2次緊急発掘調査は平成13年9月1日から12月21日、第3次緊急発掘調査は平成14年5月1日から8月23日にかけて実施した。
整理作業は平成14年1月4日から11日、平成14年8月26日から15年3月20日、平成16年※月※日から17年※月※日まで行った。
- 3 現場の発掘作業における記録は稲垣佳子・小林智子・小林りえ・坂本ちづる・田中正治郎、写真撮影は田中・平出一治が行った。
- 4 基準杭の設置と遺構測量の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。
- 5 図面・写真の整理は小林りえ・坂本・津金たか子・平出、遺物の整理は上島淑枝・小林明美・小林智子・小林りえ・小松弘・坂本ちづる・清水正進・田中初一・津金・武藤雄六が行った。
- 6 土器の拓影は小林りえ・坂本・津金・平林とし美が行い、土器・石器・鉄製品の実測は株式会社シン技術コンサルに委託し、土器の一部を平林が行った。
- 7 執筆は田中の記録をもとにⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ-2・3、Ⅴを平出、Ⅳ-1は平林が行った
- 8 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係資料は、比丘尼原北遺跡8の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、ご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序

例 言

目 次

図版目次

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	調査組織	2
3	発掘調査の経過（調査日誌抄）	3
II	遺跡の位置と環境	5
III	調査の方法	8
1	調査方法と土層	8
2	調査の概要	13
IV	遺構と遺物	14
1	縄文時代	14
(1)	小竪穴	14
	小竪穴 6	14
(2)	遺構外出土遺物	15
	土器	15
	石器	20
2	平安時代	21
(1)	竪穴住居址	21
	第 1 号竪穴住居址	21
	第 2 号竪穴住居址	21
	第 3 号竪穴住居址	26
	第 4 号竪穴住居址	27
	第 5 号竪穴住居址	27
	第 6 号竪穴住居址	33
	第 7 号竪穴住居址	36
	第 8 号竪穴住居址	36
	第 9 号竪穴住居址	38
	第 10 号竪穴住居址	41
	第 11 号竪穴住居址	43
	第 12 号竪穴住居址	46
	第 13 号竪穴住居址	49
	第 14 号竪穴住居址	52
(2)	掘建柱建物址	57

第1号掘建柱建物址	57
(3)小竪穴	57
小竪穴3	57
(4)遺構外出土遺物	58
3 近現代・時代不詳	58
(1)小竪穴	58
小竪穴4	58
小竪穴5	60
(2)タメ址	60
タメ址1	60
(3)暗渠排水	60
暗渠排水1・2	60
V まとめ	61
報告書抄録	

図版目次

第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—比丘尼原北—八ヶ岳ライン）	1
第2図 比丘尼原北遺跡と付近の遺跡	6
第3図 発掘調査範囲図・地形図	9
第4図 遺構配置図	11
第5図 小竪穴4・6出土土器拓影	14
第6図 遺構外出土土器拓影	16
第7図 遺構外出土土器拓影	17
第8図 遺構外出土石器実測図	18
第9図 遺構外出土石器実測図	19
第10図 第1号竪穴住居址実測図	22
第11図 第1～3号竪穴住居址出土土器実測図	23
第12図 第2号竪穴住居址実測図	24
第13図 第3号竪穴住居址実測図	25
第14図 第4号竪穴住居址実測図	26
第15図 第5号竪穴住居址実測図	28
第16図 第6号竪穴住居址実測図	29
第17図 第4～6号竪穴住居址出土土器・鉄製品実測図	31
第18図 第6号竪穴住居址出土土器実測図	32
第19図 第6号竪穴住居址出土土器実測図	33
第20図 第7号竪穴住居址実測図	34
第21図 第7号竪穴住居址出土土器・石器実測図	35

第22図	第8号竪穴住居址実測図	37
第23図	第9号竪穴住居址実測図	38
第24図	第8・9号竪穴住居址出土土器実測図	39
第25図	第9・10号竪穴住居址出土土器・鉄製品実測図	40
第26図	第10号竪穴住居址実測図	42
第27図	第11号竪穴住居址実測図	44
第28図	第11号竪穴住居址出土土器・鉄製品実測図	45
第29図	第12号竪穴住居址実測図	47
第30図	第12号竪穴住居址出土土器・鉄製品実測図	49
第31図	第13号竪穴住居址実測図	50
第32図	第13・14号竪穴住居址出土土器実測図	51
第33図	第14号竪穴住居址実測図	53
第34図	第1号掘建柱建物址実測図	55
第35図	小竪穴3・4・5実測図	58
第36図	小竪穴3・遺構外出土土器・鉄製品実測図	59

表 目 次

表1	比丘尼原北遺跡と付近の遺跡一覧表	7
表2	遺構一覧表	63
表3	遺物一覧表	63
	土器	63
	石器	71
	鉄製品	71
	鉄滓	72

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

農業者の高齢化、後継者の減少は原村でも例外ではない。このため労働効率の面から機械化は必要なことで、さらに機械化のためには耕地整備は不可欠なことである。こうした考えのもとに圃場整備事業は進められてきた。「県営圃場整備事業原村西部地区」は平成5年度から実施されてきたが、事業名が「県営圃場整備事業柏木地区」に変わりはしたが継続している。

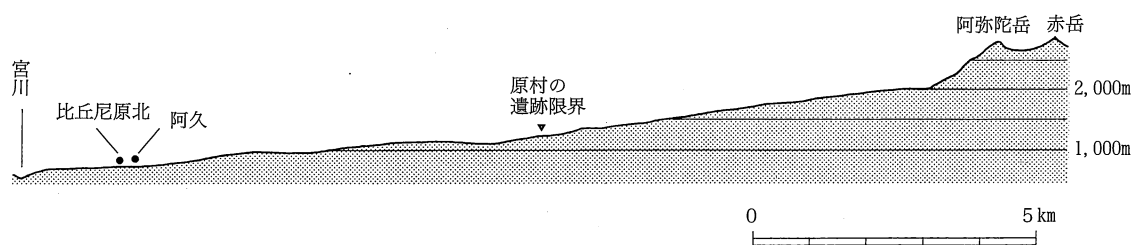
県営圃場整備事業原村西部地区においては、工事に先立ち多くの遺跡を記録保存してきたが、たまたま平成13・14年度工事予定地域内に、比丘尼原北遺跡（原村遺跡番号 8）が立地していたことから、その保護については平成12年11月8日に行なわれた「平成13年度県営圃場整備事業柏木地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化財・生涯学習課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

遺跡は本来現状のまま保存していくのが最も望ましいことであり、以前から柏木・菖蒲沢地区内における遺跡保護については注意され、長野県教育委員会は平成7年度に原村柏木・菖蒲沢地区の分布調査を実施し、その一つである比丘尼原北遺跡からは、黒曜石の剥片と平安時代の土器破片が採集されたことで、当地方における日溜り地形に展開する平安時代の典型的な集落遺跡であることが考えられるようになり、平成9年度には試掘調査（第1次発掘調査）を行い、わずかな調査であったが住居址2軒の埋没が認められ平安時代の集落遺跡であることが明らかにされた。

遺跡の保護も大事であるが、原村における農業の将来を考えると後継者の減少と高齢化も例外ではなく、労働効率の面からは機械化は必要なことであり、さらに機械化のための耕地整備は不可欠なことで、農業者からの強い要望の中で圃場整備事業は進められており、次善の策として「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、平成13年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることもできた。

その後も協議を重ねるが、県営圃場整備事業柏木地区に先立ちすでに緊急発掘調査を進めていた比丘尼原遺跡で、縄文時代中期初頭から中葉の集落跡が露呈しており、協議段階で考えていたより大規模なものであり、調査期間の延長を余儀なくされた。日程が押されてきた平成13年9月に比丘尼原北遺跡の発掘調査に着手したが、表土剥ぎを終えた時点ですでに凍結がみられるようになり、寒さの厳しい当地方においては冬期間における発掘調査は無理なことであり、関係機関と協議を行い住居址など遺構の調査は平成14年度に変更した。

したがって、平成13年12月3日に行われた「平成14年度県営圃場整備事業柏木地区にかかわる埋蔵文



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川一比丘尼原北一八ヶ岳ライン）

化財保護協議」では調査日程等の確認を行っている。

発掘調査は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受け、平成13年度実施の第2次緊急発掘調査は9月1日から12月21日、平成14年度実施の第2次緊急発掘調査は5月1日から8月23日にわたり原村教育委員会が実施した。

2 調査組織

比丘尼原遺跡第2次・比丘尼原北遺跡第2次発掘調査団名簿（平成13年度）

事務局 原村教育委員会

教育長 大館 宏（～平成13年7月22日）

津金 喜勝（平成13年7月23日～）

学校教育課長 小林 銹晃

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美

調査団 団長 大館 宏（～平成13年7月22日）

津金 喜勝（平成13年7月23日～）

調査担当者 田中正治郎

調査員 平出 一治 平林とし美

調査参加者 発掘調査 稲垣 佳子 久根 種則 小池 英男 小池 美秋

小島久美子 小島 政雄 小林 智子 小林 りえ 小松 弘

五味計佐雄 坂本ちづる 篠原 治郎 清水 正進 新村 力

高橋 儀男 田中 耕平 田中 初一 西沢 寛人 福田 幸宗

藤原 正春 宮坂今朝寿 渡部 静香

比丘尼原北遺跡第3次発掘調査団名簿（平成14年度）

事務局 原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

学校教育課長 小林 銹晃

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美

調査団 団長 津金 喜勝

調査担当者 平出 一治

調査員 田中正治郎 平林とし美 武藤 雄六

調査参加者 発掘作業 稲垣 佳子 小池 英男 小池 美秋 小島久美子

小島 節子 小島 政雄 小林 明美 小林 権八 小林 智子

小林 りえ 小松 弘 五味計佐雄 坂本ちづる 清水 正進

新村 力 高橋 儀男 田中 耕平 田中 進 田中 初一

津金たか子 中田 英子 西沢 寛人 平出 善久 藤原 正春

宮坂今朝寿 百瀬 昌美

整理作業 上島 淑枝 小林 智子 小林 りえ 坂本ちづる

比丘尼原北遺跡第3次発掘調査団名簿（平成16年度）

事務局 原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

学校教育課長 佐貫 正憲

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美

調査団 団長 津金 喜勝

調査担当者 平出 一治

調査員 田中正治郎 平林とし美 武藤 雄六

調査参加者 整理作業 鎌倉 光弥 小島久美子 小林 りえ 坂本ちづる

津金たか子 和田孝幸

3 発掘調査の経過（調査日誌抄）

平成13年度 第2次発掘調査

平成13年9月1日 発掘準備をはじめめる。

10月4日 範囲確認のためトレンチの掘削を重機ではじめる。

12日 トレンチ内の精査で住居址の落ち込みとカマド石を確認する。

16日 遺物の出土範囲がほぼ明らかになり、表土剥ぎを重機ではじめる。

11月9日 人力で遺構の検出作業をはじめ、住居址の落ち込みを数軒確認する。

10月4日にトレンチ掘りで確認した住居址を便宜的に第1号住居址と呼び、東から第10号住居址までを付すが、凍結がみられるようになり、寒さの厳しい当地方では冬期間における発掘調査は無理なことであり、関係機関と調査延期の協議をはじめめる。

12月7日 住居址の調査は平成14年度に変更されたが、検出した遺構を凍結から保護するため重機による埋め戻しをはじめめる。

21日 遺構を検出した範囲の埋め戻しを終え、調査を終了する。

平成14年度 第3次発掘調査

平成14年5月1日 発掘準備をはじめめる。

9日 凍結防止に昨年埋めもどした土の除去を重機ではじめる。

13日 テントの設営。遺構の検出作業をはじめめる。

14日 第1・2号住居址検出写真撮影。

15日 第3・4・5号住居址検出写真撮影。

20日 第6・7号住居址検出写真撮影。

21日 小竪穴検出写真撮影。緑釉陶器破片出土。

22日 第1号住居址・小竪穴3の精査をはじめめる。

24日 第1号住居址土層図作成。小竪穴3の完掘写真撮影。

27日 作付けの関係で、平成13年度に範囲の確認ができなかった水田と対象地区西でトレ

- ンチの掘削を重機ではじめる。
- 28日 第2・3号住居址の精査をはじめめる。
- 29日 第4・5・6号住居址の精査をはじめめる。
- 30日 第7号住居址の精査をはじめめる。
- 31日 第9号住居址・小竪穴4・ロームマウンドの検出写真撮影。
- 6月3日 対象地区西のトレンチ調査で住居址の埋没を確認し、重機で表土剥ぎ、遺構の検出作業をはじめめる。第8号住居址検出写真撮影。第9号住居址の精査をはじめめる。
- 4日 第10号住居址の精査をはじめめる。
- 5日 第8号住居址の精査をはじめめる。
- 10日 第11号住居址の精査をはじめめる。
- 11日 第12・13号住居址の精査をはじめめる。
- 12日 遺構の実測をはじめめる。
- 21日 第2・3・5号住居址の土層実測をはじめめる。
- 24日 第6・7・9・13号住居址の土層実測を行い、第1号住居址の土層ベルトの取りはずしをはじめめる。
- 28日 第1・2・3号住居址遺物出土状況の写真撮影。第6・9・11号住居址の土層ベルトの取りはずしをはじめめる。
- 7月2日 第1・2・3号住居址遺物出土状況の実測をはじめめる。第6・7号住居址の土層ベルトの取りはずしをはじめめる。第7・8号住居址・小竪穴4遺物出土状況写真撮影。
- 3日 第6・9・13号住居址遺物出土状況、第2・3号住居址全景写真撮影。
- 4日 第10号住居址遺物出土状況、第1号住居址全景写真撮影。第6・7号住居址・小竪穴3の実測をはじめめる。
- 5日 第8号住居址全景写真撮影。第9・13号住居址の実測をはじめめる。
- 9日 第11号住居址遺物出土状況・小竪穴4全景写真撮影。第8号住居址の実測をはじめめる。
- 10日 第14号住居址の精査をはじめめる。
- 11日 第9・13号住居址全景写真撮影。第10・11号住居址の実測をはじめめる。
- 12日 第4・5号住居址の実測をはじめめる。
- 18日 第4・5・11号住居址全景写真撮影。第1号掘建柱建物址の精査をはじめめる。
- 19日 第1号掘建柱建物址全景写真撮影。
- 22日 変更が生じた尾根上の道路予定地の表土剥ぎを重機ではじめる。第14号住居址遺物出土状況の写真撮影。
- 23日 第14号住居址の実測をはじめめる。
- 24日 第14号住居址全景写真撮影。
- 25日 第12号住居址遺物出土状況全景写真撮影、実測をはじめめる。
- 30日 小竪穴5全景写真撮影。
- 31日 第12号住居址全景写真撮影。
- 8月5日 第10号住居址全景写真撮影。第2・3・6・11号住居址カマド精査・実測をはじめめる。
- 6日 第1・4・5・7・8・9・13・14号住居址カマド精査・実測をはじめめる。
- 12日 ラジコンヘリによる測量写真撮影を行う。

20日 カマドの断割りによる記録をはじめ。

23日 片付けを行い現場作業は終了する。

9月11日 変更が生じた尾根上の道路部分の表土剥ぎに立会う。遺物・遺構の発見はない。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

比丘尼原北遺跡（原村遺跡番号 8）は、長野県諏訪郡原村柏木区北西の茅野市との境界付近に位置する。このあたりは当地方に特有な東西に細長くのびる大小様々の尾根がみられ、それらの尾根上から南斜面には第2図と表1に示したように、縄文時代中期を中心とする遺跡が数多く埋蔵されている。それらの遺跡は、県営圃場整備事業をはじめとする諸々の開発事業ですでに消滅したものも多いが、事前の緊急発掘調査では、数多い土器や石器をはじめ縄文時代と平安時代の住居址や小竪穴などを発見している。

第2図と表1に示した中から集落遺跡をあげると、縄文時代と平安時代が複合する第2図1の家裏遺跡、9の比丘尼原遺跡、11の阿久遺跡（国史跡）、12の前沢遺跡、13の長峰遺跡、15の程久保遺跡、20の前尾根遺跡、22の清水遺跡、24の恩膳遺跡、25の裏尾根遺跡、42の居沢尾根遺跡、46の宿尻遺跡、49の大石遺跡、55の中尾根遺跡、56の家前尾根遺跡、101の白ヶ原南遺跡の16遺跡、縄文時代は10の柏木南遺跡、19の南平遺跡、21の上居沢尾根遺跡、50の山の神遺跡、51の姥ヶ原遺跡、53の雁頭沢遺跡、57の久保地尾根遺跡、97の塩水遺跡の8遺跡、平安時代は14の裏長峰遺跡、23の恩膳西遺跡、47のヲシキ遺跡、95の土井平遺跡、99の中尾根頭遺跡の5遺跡を数え、原村の中でもその密度は極めて高く、縄文時代中期と平安時代の大規模遺跡群が形成されていることは確かな地域である。

遺跡が立地する尾根筋は、比丘尼原北遺跡の西方500mほど先でフォッサマグナの西縁である糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。

本遺跡は、八ヶ岳から流下する三ヶ村堰と前沢川にはさまれた尾根上から南斜面に立地するが、尾根幅はそれほど広いものではなく当地方で一般的にみられるものである。南斜面は、南に広がる水田造成時に土取りが行われたためか、傾斜がきつくなる箇所も一部で見られたが、総体的には緩やかであり、いわゆる日だまり地形が形成されている。北斜面は古い水田造成時に削平され切り立つ箇所もみられ、また、県営圃場整備事業丸山地区（茅野市）の工事で削平されているが、工事以前における北斜面は南斜面よりも傾斜がきつかったように記憶している。

発掘調査の対象地は、尾根の最大幅を有する先端部付近の尾根上から南斜面で、北側に接する尾根上から北斜面の一部は、すでに県営圃場整備事業丸山地区（茅野市）の工事で削平されている。したがって本地域だけが以前の地形を残している状態であったが、地目は尾根上が普通畑・桑畑および山林で、桑畑は桑の木は大きく林状である。南斜面は普通畑と水田であるが、前記したように水田造成時に土取りが行われたためか、普通畑の中にはロームを耕作土にしている箇所もみられた。標高は880m前後を測り、原村のなかでは低標高に位置する遺跡の一つである。

これらの尾根筋は西方500mほど先でフォッサマグナの西縁である糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。

本遺跡の発見はそれほど古いものではなく、昭和48年度に諏訪清陵高等学校地歴部考古班が実施した分布調査で、縄文時代早期の押型文土器破片と平安時代の土師器破片を採集したことにはじまる。

表1 比丘尼原北遺跡と付近の遺跡一覧表

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
1	家裏	○				◎	○			◎			茅野市地籍に展開 昭和59年度発掘調査	
2	大久保前									○			昭和54年消滅	
3	向尾根	○				○							昭和54年度発掘調査 消滅	
4	横道下	○				○				○	○		昭和54年度発掘調査 消滅	
8	比丘尼原北		○	○						◎			平成10・13・14年度発掘調査	
9	比丘尼原					◎				◎		○	平成8・13年度発掘調査 消滅	
10	柏木南	○				○	◎			○			昭和51・平成14年度発掘調査	
11	阿久		○	◎	◎	○				◎	○		国史跡 昭和50・51・52・53・平成5・7・11・12・13年度発掘調査	
12	前沢					○	◎			◎		○	昭和55・61・平成10・11年度発掘調査	
13	長峰		○			◎	○	○		◎		○	平成3年度発掘調査 消滅	
14	裏長峰	○	○			○				◎			平成4年度発掘調査 消滅	
15	程久保		○			◎				◎		○	平成4・5年度発掘調査 消滅	
17	白ヶ原		○	○		◎				○			昭和53・平成10年度発掘調査	
18	前尾根西					○								
19	南平		○			◎					○		平成9年度発掘調査 消滅	
20	前尾根					○	◎	◎		◎	○	○	昭和44・52・53・59・平成9・15年度発掘調査	
21	上居沢尾根					◎	○			○	○		平成4年度発掘調査	
22	清水		○	○		◎	○			◎	○		平成8年度発掘調査 消滅	
23	恩膳西	○	○			◎				◎	○		昭和62・平成5・6年度発掘調査	
24	恩膳		○			◎	◎			○			昭和62年度発掘調査	
25	裏尾根		○			◎				◎			平成8・10年度発掘調査	
26	家下					○				○		○	昭和59・平成9・12・13年度発掘調査	
27	關盧沢					○				○	○		昭和62・平成9年度発掘調査	
28	宮平									○	○		村史跡	
29	向尾根					○	○			○		○	昭和50・54年度発掘調査	
30	南尾根					○				○				
31	中尾根									○				
42	居沢尾根	○	○	○		◎	○			◎			昭和50・51・52・56・平成6・11・12年度発掘調査	
43	中阿久					○							昭和51年度発掘調査	
44	原山					◎				○				
45	広原日向	○				○	○			○			昭和58年度発掘調査	
46	宿尻	○	○			◎	○			◎			平成5・6年度発掘調査 消滅	
47	ヲシキ		○	○		○				◎		○	昭和51・平成10・11年度発掘調査	
48	榆の木					◎				○				
49	大石	○	○	◎	◎					◎		○	昭和50・平成9・10・13年度発掘調査	
50	山の神					◎	◎			○			昭和54・平成13年度発掘調査	
51	姥ヶ原					○	◎						昭和63・平成元・15年度発掘調査	
52	水掛平					○	○			○	○		平成7・8年度発掘調査	
53	雁頭沢					◎				○		○	昭和54・57・63・平成4・5・9・10・13・15年度発掘調査	
54	宮ノ下		○			○				○	○	○	昭和57・58年度発掘調査	
55	中尾根					○	◎	○		◎		○	平成6年度発掘調査	
56	家前尾根					◎	◎			◎		○	平成6年度発掘調査	
57	久保地尾根					◎							昭和5・平成6・7・8・13・14年度発掘調査	
61	番飼場					○				○			昭和50年消滅	
78	弓振日向	○				◎							平成7・8年度発掘調査	
93	大石西		○	○						○			平成2年度発掘調査	
94	下原山					○							茅野市地籍に展開 平成4年度発掘調査	
95	茂佐久保					○								
97	土井平									◎			平成4年度発掘調査 消滅	
98	塩水					○							平成14年度発掘調査	
99	白ヶ原西						○			○			平成10年度発掘調査 消滅	
99	中尾根頭					○				◎			平成10年度発掘調査	
101	白ヶ原南		○			◎	○			◎			平成10・11年度発掘調査 消滅	

その報告では「長峰A遺跡」と呼称し、縄文時代中期の遺跡の多い当地方において早期の土器破片の発見に注目している。

昭和54年度に長野県教育委員会が実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」でも縄文時代の土器破片と平安時代の土師器破片を発見し、遺跡名を「比丘尼原北遺跡」に改めている。この変更は、村内には同一遺跡を別々の遺跡名で呼んでいたものがあり、混乱していた遺跡を整理するために行い、その後は、一貫して原村遺跡番号8 比丘尼原北遺跡で、『原村誌 上巻』に記載したように「(8) 比丘尼原北遺跡」とか「比丘尼原北遺跡(原村遺跡番号8)」と表記している。

急激に開発が進む平成7年度に長野県教育委員会は、遺跡保護に役立てる目的で「農場基盤整備事業に係る茅野市・原村の分布調査」を実施し、黒曜石と平安時代の土師器と灰釉陶器の破片を発見している。その報告書で「平安時代の遺構が広範囲に散漫に分布する集落跡の可能性が高く、遺跡の範囲が拡大する可能性がある。」とし、平成10年度に試掘調査を実施し、平安時代後期の竪穴住居址2軒を確認している。

Ⅲ 調査方法

1 調査方法と土層

平成13年度 第2次発掘調査

発掘調査の対象は、第3図 発掘調査範囲図・地形図に示した県営圃場整備事業原村柏木地区に係る比丘尼原北遺跡である。しかし、遺跡の範囲についてはいまだ不明瞭な点が多く、その対象範囲は明確にできない状態であった。たまたま西側の外縁部は対象地域外に広がっていることが明らかのため、東側外縁部の確認からはじめた。傾斜(南北)方向に軸を合わせたトレンチ発掘を行い遺物の有無、遺構の埋没状況の確認に努めたが、長野県教育委員会が平成7年と平成10年の2カ年にわたって実施した分布調査の成果、当地方における遺跡立地を考慮する中で試みたものである。

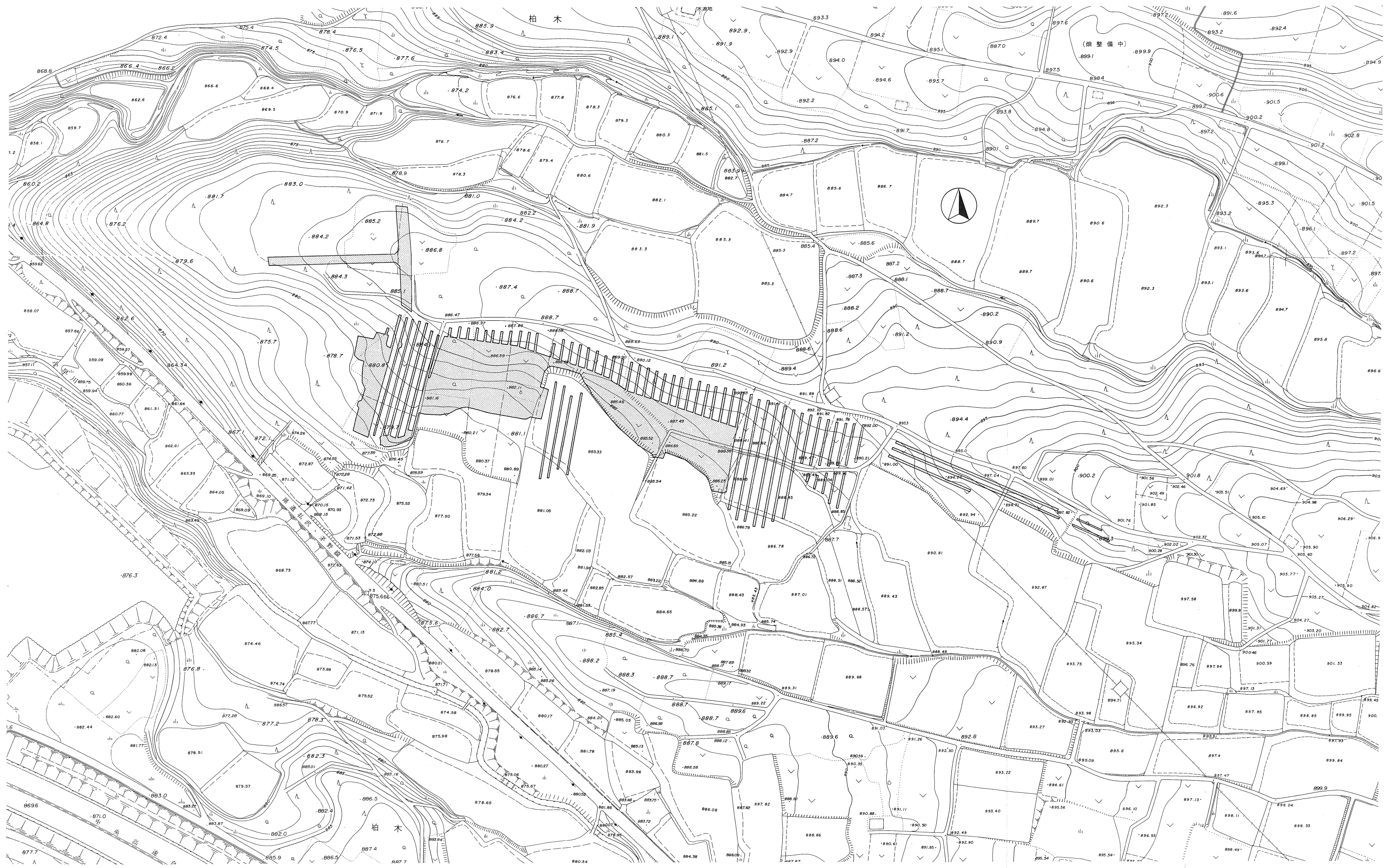
トレンチの掘削は重機で行ったが、トレンチの巾はバケツ巾である1.2mとした。引き続き人力でトレンチ内の精査を行い、遺物の有無と遺構の埋没状況の把握を行った。竪穴住居址の埋没が明らかになった時点で表土剥ぎをはじめたが、当地方における平安時代遺跡の性格もあり遺物の出土は極めて少なく、不明瞭な箇所が多くみられ、トレンチ掘りと表土剥ぎを繰り返す中で面的調査範囲を決定した。遺構の検出は人力で行い、遺物は10×10mのグリッドを設定し取り上げ、遺構が明らかになったものは遺構毎に取り上げた。

作物の関係で未調査部分もあったが、表土剥ぎがほぼ終了した時にはすでに冬期間に入り、凍結がみられるようになった。検出した竪穴住居址は10軒を数えており、寒さの厳しい当地方では冬期間の発掘調査は無理なことであり、関係機関と調査延期の協議を行い、遺構の精査は平成14年度に変更された。凍結で遺構が破壊されることは容易に考えられることあり、保護のため重機で埋め戻しを行い平成13年度の調査を終了した。

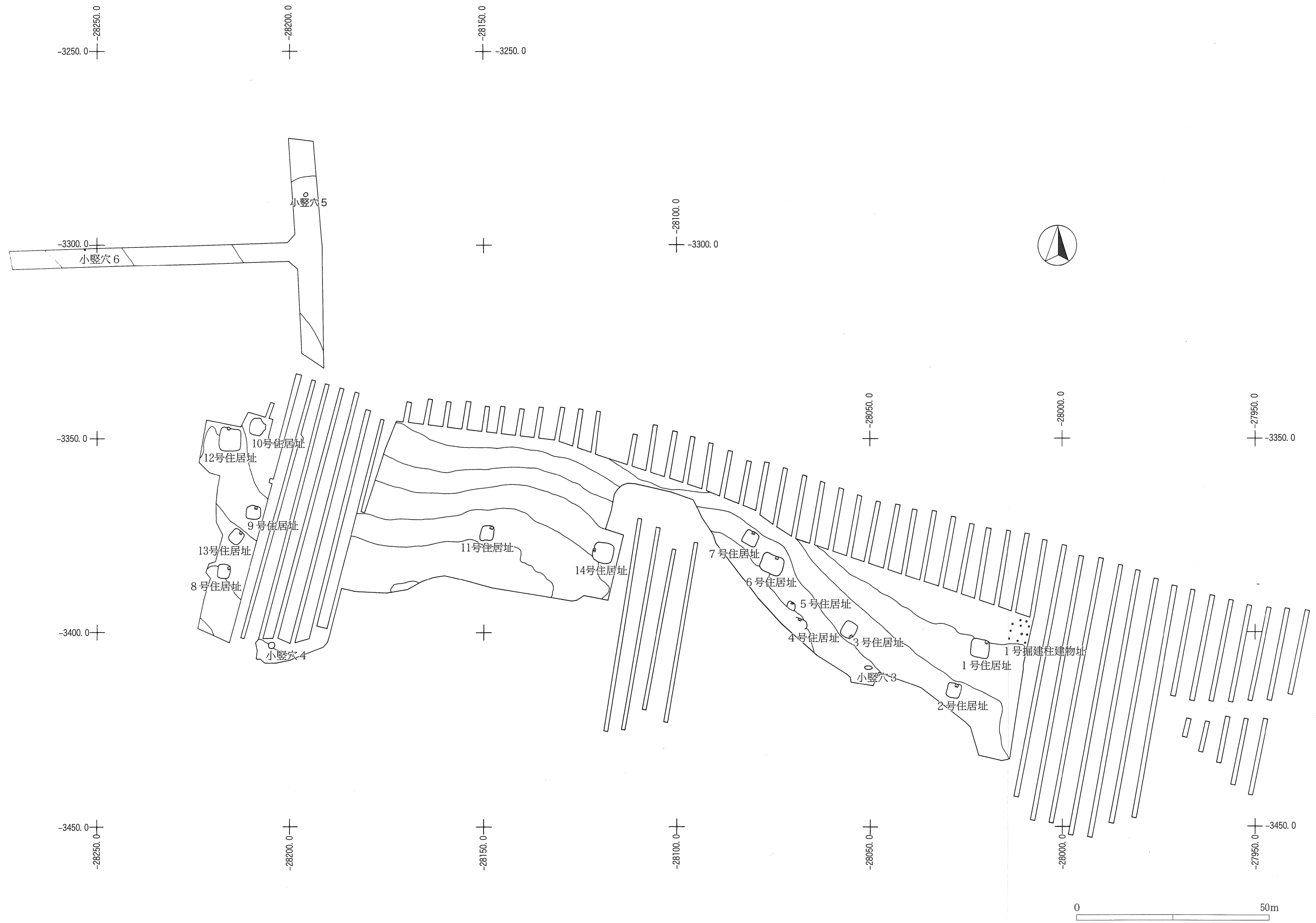
調査面積は10,990㎡である。

平成14年度 第3次発掘調査

平成13年度調査で住居址の埋没を確認した範囲については、凍結による遺構破壊防止のため埋め戻し



第3図 発掘調査範囲図・地形図 (1:2,000)



第4图 遺構配置图 (1:1,000)

をしたためその土の除去を重機で行い、引き続き人力で遺構の検出と精査を進めた。

作付けの関係で平成13年度に着手できなかった水田と普通畑については、前年度同様に重機でトレンチの掘削、人力でトレンチ内の精査を行い、新たに遺構が確認できた範囲は重機による表土を剥ぎ、遺構の検出と精査を行った。

調査は原則として層位別に行い、遺構の検出面はローム層の上面ないしは地山の礫面としたが、黒色土中に構築された住居址もみられ、その個所については遺構が確認できた面とした。なお、黒色土中に構築された住居址については、精査終了後に地山に達するトレンチ調査を行い、下層に埋没する遺構の有無の確認を行ったが新たな発見はなかった。

竪穴住居址の調査は、サブトレンチによる状況確認を行い、基本的に直交する土層観察ベルトを設定し、埋土の観察と記録を行い。実測は、国家座標第Ⅷ系に合わせた基準杭を設置し、それに従った測量基準杭を打設して行った。地形測量と遺構実測の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。

平安時代の住居址を検出した南斜面は普通畑であるが、土層は、斜面上方は流失が著しかったようで黒色土の堆積はほとんどみられない状況で、地山のロームが露出している部分も多く、ロームやローム混じりの褐色土を耕作土にしている。

下方の大部分は比較的安定した堆積状況で、黒褐色土からロームまでの基本的な土層がみられた。谷部に近くなると黒褐色土の下層に真黒色土の堆積がみられ、握り拳大から人頭大の礫が包含されていた。調査面積は7,126.47㎡である。

2 調査の概要

発見した遺構は、第4図 遺構配置図に示した通り竪穴住居址14軒、掘建柱建物址1棟、小竪穴4基、タメ址1基、暗渠排水2基である。

発見した竪穴住居址14軒と掘建柱建物址1棟は平安時代である。小竪穴は4基で、縄文時代と平安時代がそれぞれ1基、遺物の出土はあるが時期決定ができなかった1基、伴出遺物が皆無の1基は時代不詳とした。なお、縄文時代の小竪穴は、同一個体の土器破片（破片総数54点）が狭い範囲に集中し、何らかの施設内に埋められていたものと思われた。しかし、黒色土中のことであり落ち込みを確認するまでに至らなかったが、本報告では便宜的に小竪穴と呼んでおきたい。平安時代の小竪穴は遺物の出土状態から墓壙である。タメ址と暗渠排水からも帰属時期を示す遺物は出土しなかったが、近世ないしは現代であろう。

小竪穴は検出順に番号を付したが、精査の結果、後世の攪乱と判明した小竪穴1と2は欠番とした。したがって、縄文時代が小竪穴6、平安時代が小竪穴3、時代不詳が小竪穴4・5である。

発見した遺構は次ぎの通りである。

縄文時代	小竪穴	1基
平安時代	竪穴住居址	14軒
	掘建柱建物址	1棟
	小竪穴	1基（墓壙）
時代不詳	小竪穴	2基
近・現代	タメ址	1基
	暗渠排水	2基

IV 遺構と遺物

1 縄文時代

(1)小竪穴

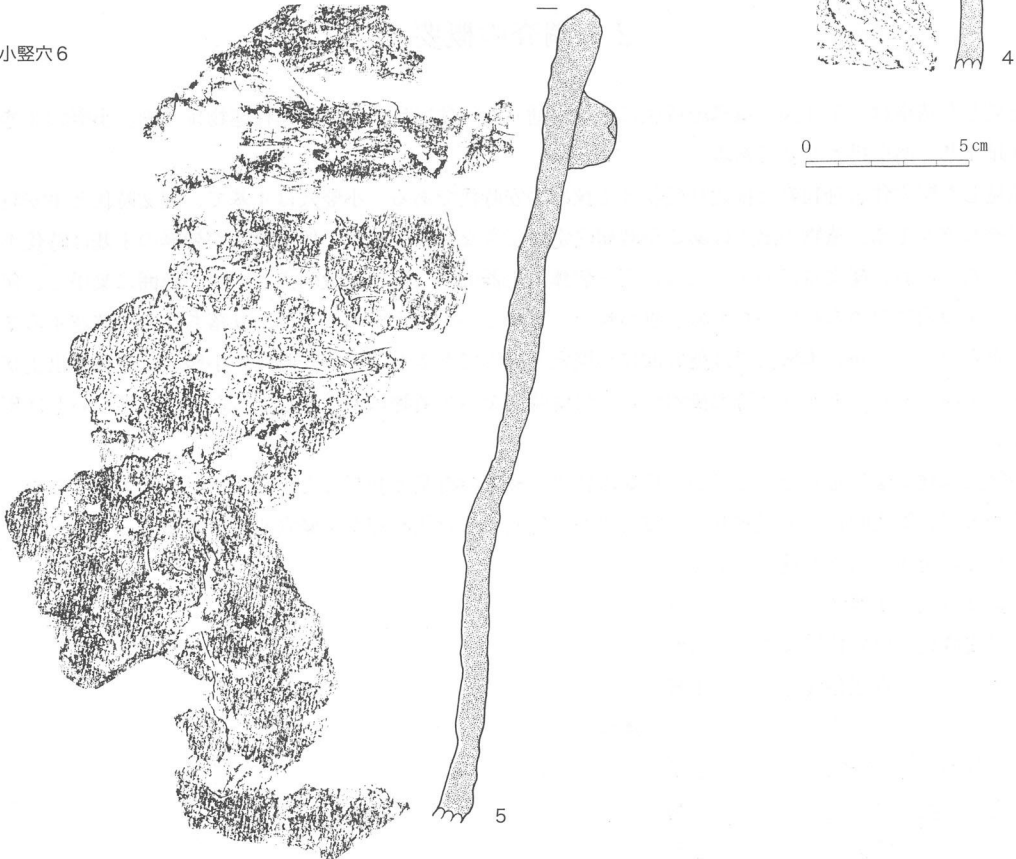
小竪穴6 (第5図、写真44)

調査地の北西外れの新設道路部分で検出した。縄文時代前期初頭の土器がソフトローム上に集中していた。同個体の土器で破損後に生じたような磨耗はみられず、単に置かれたような状況とは思えない状

小竪穴4



小竪穴6



第5図 小竪穴4・6出土土器拓影(1:2)

態で、何らかの遺構に伴っていた可能性が高く、周辺の精査を繰り返し行い遺構の検出に努めたが、落ち込めを検出するまでには至らなかった。

遺物の出土状態は、単に遺構外遺物として片付けることができるものではなく、黒色土に構築されていた何らかの施設に伴っていたことは容易に考えられるもので、ここでは便宜的に小竪穴出土土器として報告しておきたい。

検出面でまとまって出土した前期初頭の土器である。すべて同固体の土器破片で54点発見した。接合は15点で他は2～4点接合するものが若干あったのみである。

無文で口縁部に籐状の太い粘土紐を貼り付け、その上に斜め交互に大きな刻み目を付けている。胎土には多量の繊維を含み白砂粒も目立ち、内外面とも荒れてざらざら・ぼこぼこしている。図示した器面の上半部は黒褐色の暗い色調で、所々に煤の付着が観察できる。下半部は明るい黄褐色で色調の差が著しい。

この土器は、富士見町の坂平遺跡「坂平遺跡 八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址」で出土し、下吉井式期の在り系土器と位置付けている土器の一群と類似している。

(2)遺構外出土遺物

発見した遺物は早期から中期初頭を中心とした土器片127点・石器158点と数は少ない。

縄文時代竪穴住居址の発見は無かったが小竪穴を1基発見した。遺物はまばらに遺跡全体から出土しているが、特に第11号住居址出土付近の半径30m以内に多く見られた。

土器（第6・7図）

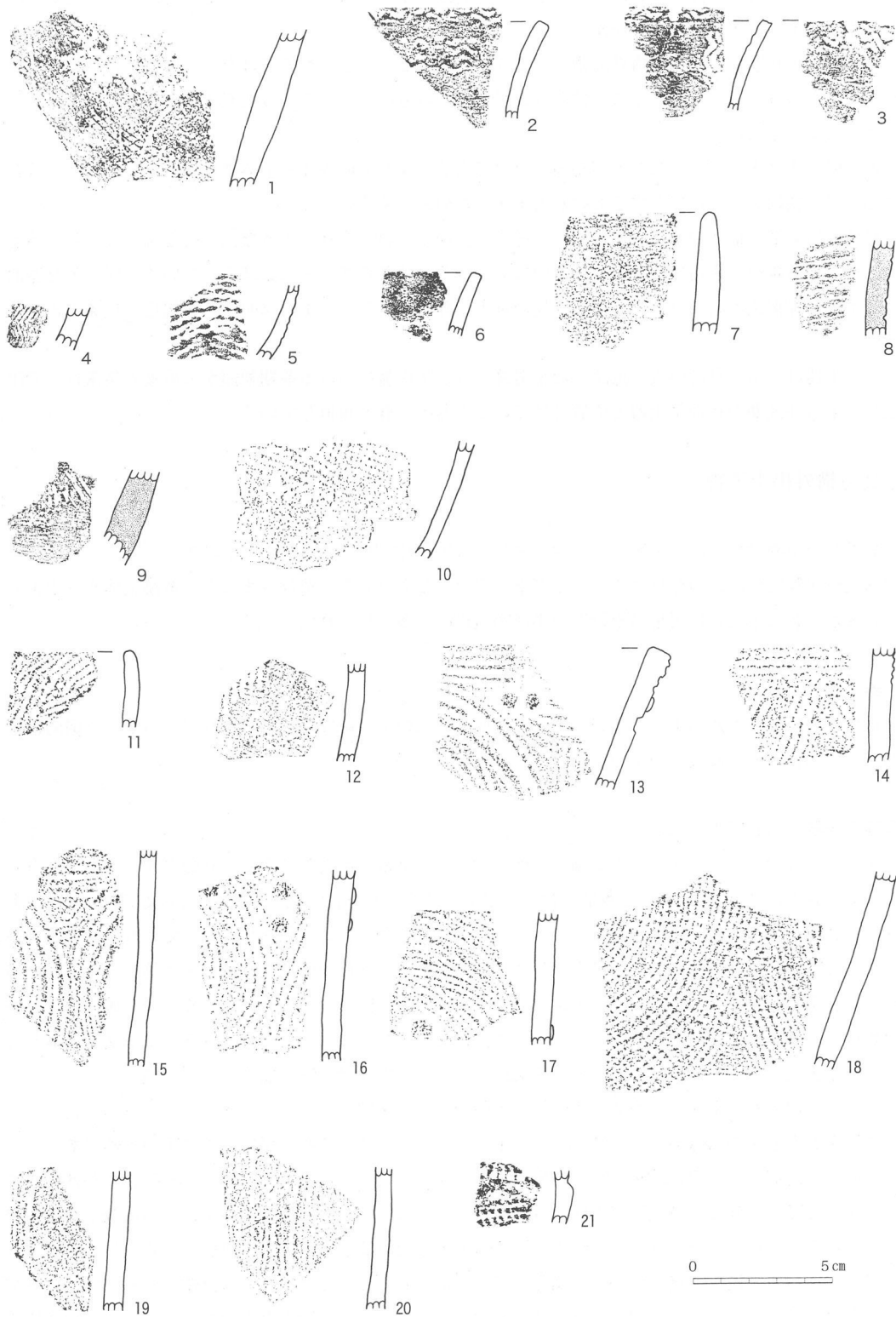
遺構外からは67点が出土した。この中には後期や晩期の土器破片も数点含まれているが、圧倒的に早期から中期初頭の土器破片が多い。

早期の土器（第6図1～10）

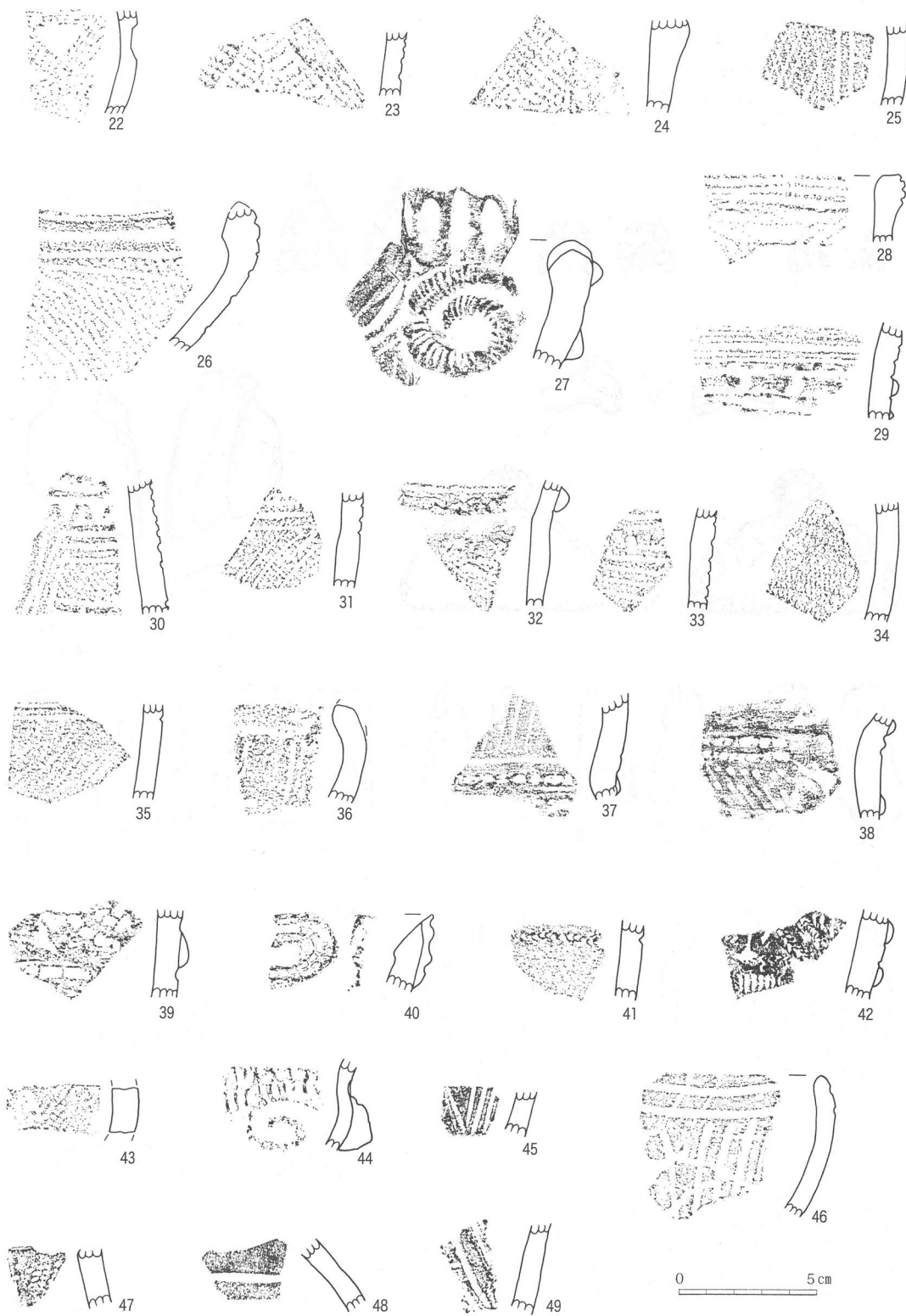
1～5は押型土器である。1は細かい格子目文で縦位密接施文しており、立野タイプの特徴を有している。胎土には金雲母・石英を多量に含み、器壁の厚さも0.8cmと分厚い。2は山形文で口縁部と口唇部に、3山1単位で横位帯状施文している。胎土に黒鉛を含み、青灰色を呈し薄手で比較的緻密で硬い。また、口縁部には炭化物の付着が目立つ。3も器面に2山1単位の山形文で縦位帯状施文を、内面に横位帯状施文をしている。胎土に白粒子含み薄手で硬い。4は山形文で陽文部が狭く浅い。破片が小さいため施文構成がはっきりしないが、おそらく縦位密接施文していると思われる。5は山形文を意識したような楕円文で横位密接施文している。底部に近い部分で内面は丁寧に成形し緻密で硬い。

6～10は中葉から末葉の土器で、比較的大きい破片のみを図示した。

6・7とも無文の口縁部で、6は胎土に若干の金雲母と石英を含む、平口縁の薄手の土器である。7は直径0.5cmほどの石粒を多く含み内外面ともざらざらして、色調は黒く暗い。8はわずかに外反しており深鉢の頸部部分で、横走沈線の間貝殻復縁を施文している。白粒子を多量に含み繊維も若干だが含んでいる。これは神奈川県戸田遺跡の下層から出土した土器を標識とする戸田下層式と思われる。9は絡条体圧痕文で傾きや無文部から推測して胴下半部の破片であろう。微量の繊維を含み内面は荒れているが焼きは硬くしまっている。10は前期黒浜期の土器とは縄目・胎土とも異なる、胴下半部の破片で縄文が横位施文され無文体を伴う。



第6圖 遺構外出土土器拓影（1：2）

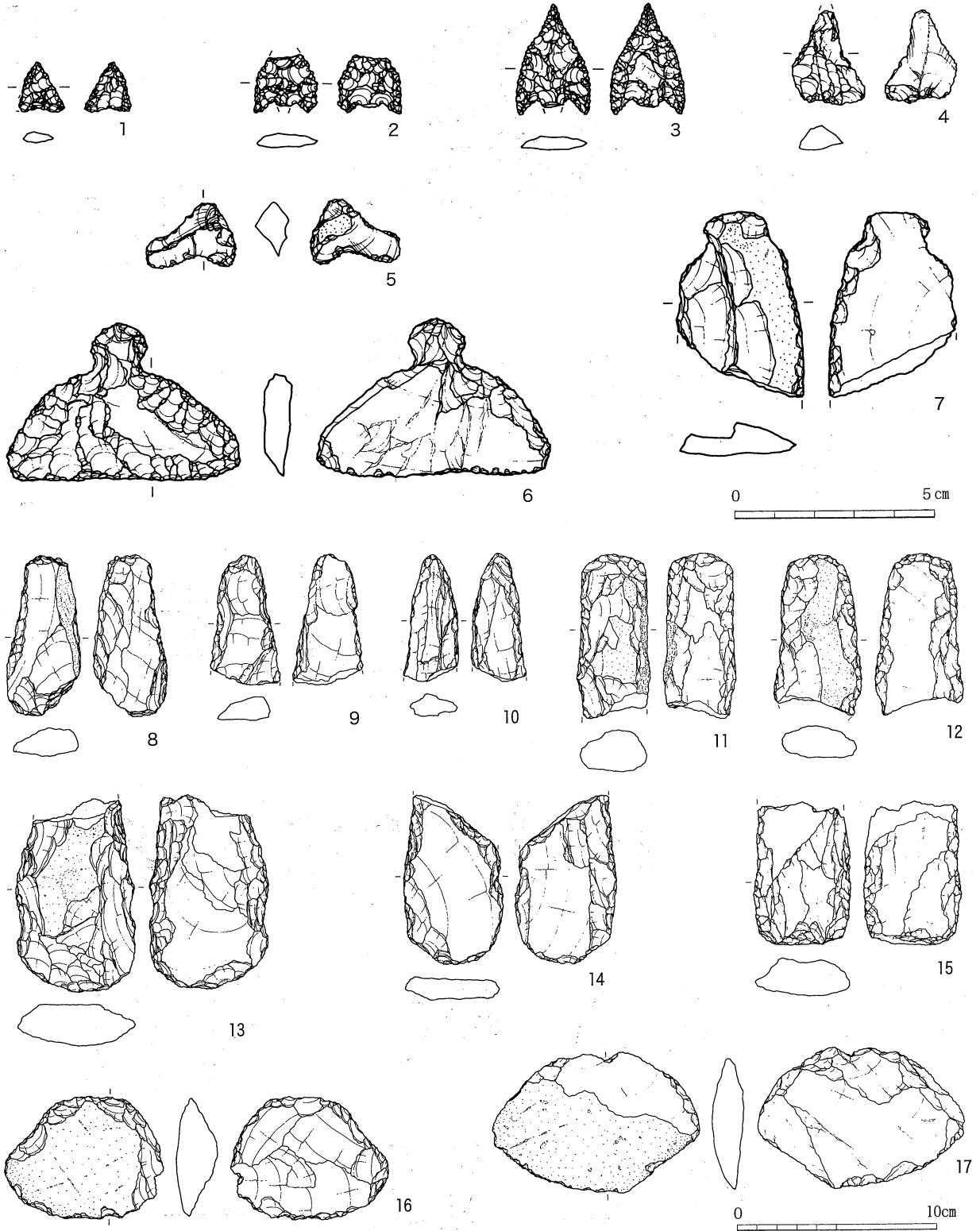


第7图 遺構外出土土器拓影(1:2)

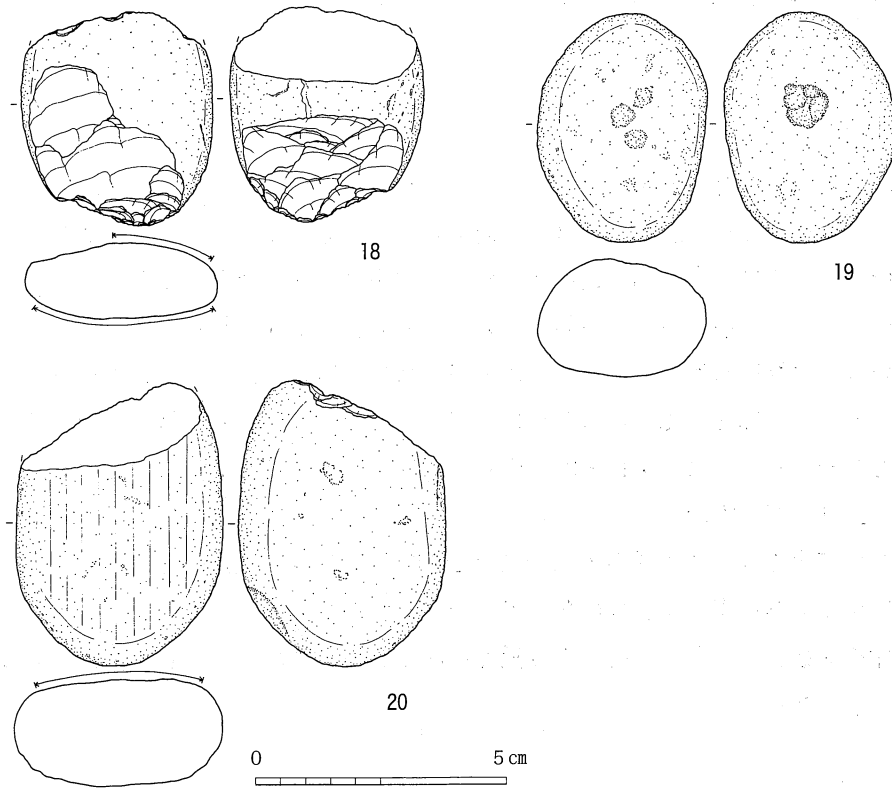
前期の土器 (第6図11~21)

出土した前期土器破片のうち諸磯C式土器に平行するものが中心である。

11・12は縄文を地文とし、金雲母・白粒砂を含んでいる。11は内面、12は外面を丁寧な磨きにより仕上げている。



第8図 遺構外出土石器実測図 1~7 (2:3) 8~17 (1:3)



第9図 遺構外出土石器実測図(1:3)

13~21は諸磯C式土器に平行する土器破片で、口縁がラッパ状に開く大型の深鉢破片である。金雲母・石英を多量に含み、ざらついている。いずれも沈線文と円弧文の組み合わせにより器面を飾っている。13・16・17はボタン状貼付文を2個ずつセットで配している。文様構成からみて、19・20は胴下半部のものであろう。結節状浮線文を配する18・21がある。

中期の土器 (第7図22~45)

中期初頭の土器破片が中心で、初頭以外の出土土器破片はおおかた図示した。

22~24は籠畑式土器で本稿では中期初頭の土器と把握したい。いずれも結節状浮線文を有し、22は石英を多量に含み内面は横方向の丁寧な磨きで整形され、三角印刻文が配される。23・24とも底部が張り出した深鉢の波状口縁部破片であろうか。内面は丁寧な縦方向の磨きが観察される。

25~35は九兵尾根Ⅱ式の土器破片。地文に縄文を多様する縄文系の土器(26・27・32・34・35)と半截竹管による沈線文系の土器(25・28~31・33)がある。いずれも胎土に多量の金雲母を含んでいる。27は口縁部で4山一単位の突起文を4単位持つ波状口縁となろう。29は横位に粘土紐を貼り、その上を半截竹管により間隔をあけて突いてある。26・35にはわずかであるが煤の付着が見られる。

36~40は猪沢式の土器破片。36~38の内面は丁寧に磨かれ、四角押引文が施文されている。また、胎土・焼成からも同一個体の可能性が強い。39の色調は黒褐色のためか、胎土の白砂粒がやけに目立つ。横帯する楕円区画文を持つ深鉢胴部の破片である。40は四角押引文が施文され、内外面とも丁寧に成形し緻密で硬い。浅鉢の破片と推察するが定かでない。

41・42は新道式の土器破片。41は三角形押引文を有し、内面はざらざらしている。42は隆帯で三角形に区画し、爪形文と三角形押引文で粘土紐を押さえている。三角形の区画の中には印刻による三叉文が配されており、焼成は良好である。

43は幅1.6cmの粘土の帯を積み上げた状態の所から破損している。時期は明確でないが色調は黄褐色で焼きは堅くしまっている。

石器 (第8・9図)

遺構外からは、表3 遺物一覧表 石器に示したように剥片を含め158点出土した。

第8図1～5の5点は黒曜石製で、1は凹基無茎鏃の完形品、2・3は凹基有茎鏃で、2は先端と茎を3は茎を欠損する。4は石鏃の加工途中と思われるが明確な機種判別ができない。5はスクレーパーである。6はチャート製の小形石匙で刃部は片刃の完形品。7は輝緑凝灰岩製の縦形石匙で先端を欠損する。8～15の8点は打製石斧で、8～10・13・15は結晶片岩製、11は輝緑凝灰岩製で12・14は硬砂岩製で、8～12の5点は刃部を、13～15の3点は基部を欠損するもので完形品はない。16・17の2点は硬砂岩製の横刃形石器である。第9図18・20は磨石で、18は砂岩製で20は安山岩製であるが、2点とも破損がみられる。19は凹石で安山岩製である。

図示することはできなかったが黒曜石の剥片は111点を数えたが、調査範囲内で縄文時代の住居址を発見するまでに至っておらず、住居址の発見できなかった遺跡としてはやや多いようである。したがってこれらの剥片を廃棄した人たちの居住地は近くにあるものと思われ、未調査部分である尾根先端部の可能性は高いようである。

2 平安時代

竪穴住居址の記述で調整床としたものは、地山とは異なる土で床面を構築したものである。このような床面を張り床と記述する傾向も見られるが、張り床も貼り床も言葉に出すと同じである。従来使われてきた貼床は、遺構の重複関係で古い遺構上に構築した床面を指す用語であり、下層に古い遺構の存在しない床面を区別するために用いた。

(1) 竪穴住居址

第1号竪穴住居址（第10・11図、写真10～12）

調査地の北東外れで検出したが、平成13年度に実施したトレンチ調査の段階で、東壁とカマド石の一部を確認した竪穴住居址である。ソフトロームに均質の黒褐色土が落ち込んでいたため検出は容易であった。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ローム粒・炭化物・焼土をほとんど含まない均質な黒褐色土の単層としたが、少ない中でもローム粒は壁際に目立つ傾向にあり、基本的にはレンズ状の堆積を示すものであり、自然埋没と考えたい。

平面形は、476×470cmの隅丸方形を呈する。壁はソフトロームを掘り込んでいたが一般的なもので、傾斜地に構築されているため壁の高さに違いがみられた。高さは北東隅で49cm、北西隅で32cm、南東隅で10cm、南西隅で10cmを計る。

床面はロームで、北寄りから中央にかけて硬い調整床の施された部分もみられたが、総体的には軟弱である。周溝は、東壁と南壁の一部を除き存在している。柱穴は、壁柱穴と思われるピットが東壁にP2とP3の2基、南壁にP4の1基がある。特に南壁のP4の内部に、地山に含まれる人頭大の円礫が残っていたが、割った痕跡が一部で認められた。なお、このP4は2重に掘られた状態で、一旦掘り込んだピットを埋め戻したのち新たなピットを掘り込んである。内部に残る礫を割っていること、掘り直しからみてP4はどうしてもこの位置に必用なものであったようである。住居中央で検出した径46cm、深さ44cmの柱穴状のP5は明らかに埋め戻されたもので柱穴とは異なり、性格を示す遺物は出土しなかったが、地鎮にかかわるものと考えたい。以上のように支柱穴と考えられるピットの検出はなく、どのようにして上屋を支えたか判然としない。

カマドは、石組み粘土カマドで北壁の北東コーナー寄りに構築されていた。両袖と天井石の一部が残り、本遺跡の中では遺存状態のよかった一つである。煙道部と基部壁際はロームの地山を掘り込むことで形作り、両袖は平板石を八の字状に埋め立て、その上に柱状石を渡し、煙道部は平板石と柱状石で覆っている。火床に支脚石はなく、また、取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。東脇にいわゆる灰溜めと呼ばれるそれほど深くないピットP1を伴っている。

カマド周辺以外に礫の散乱はほとんど無く、住居址内は整然としていた。

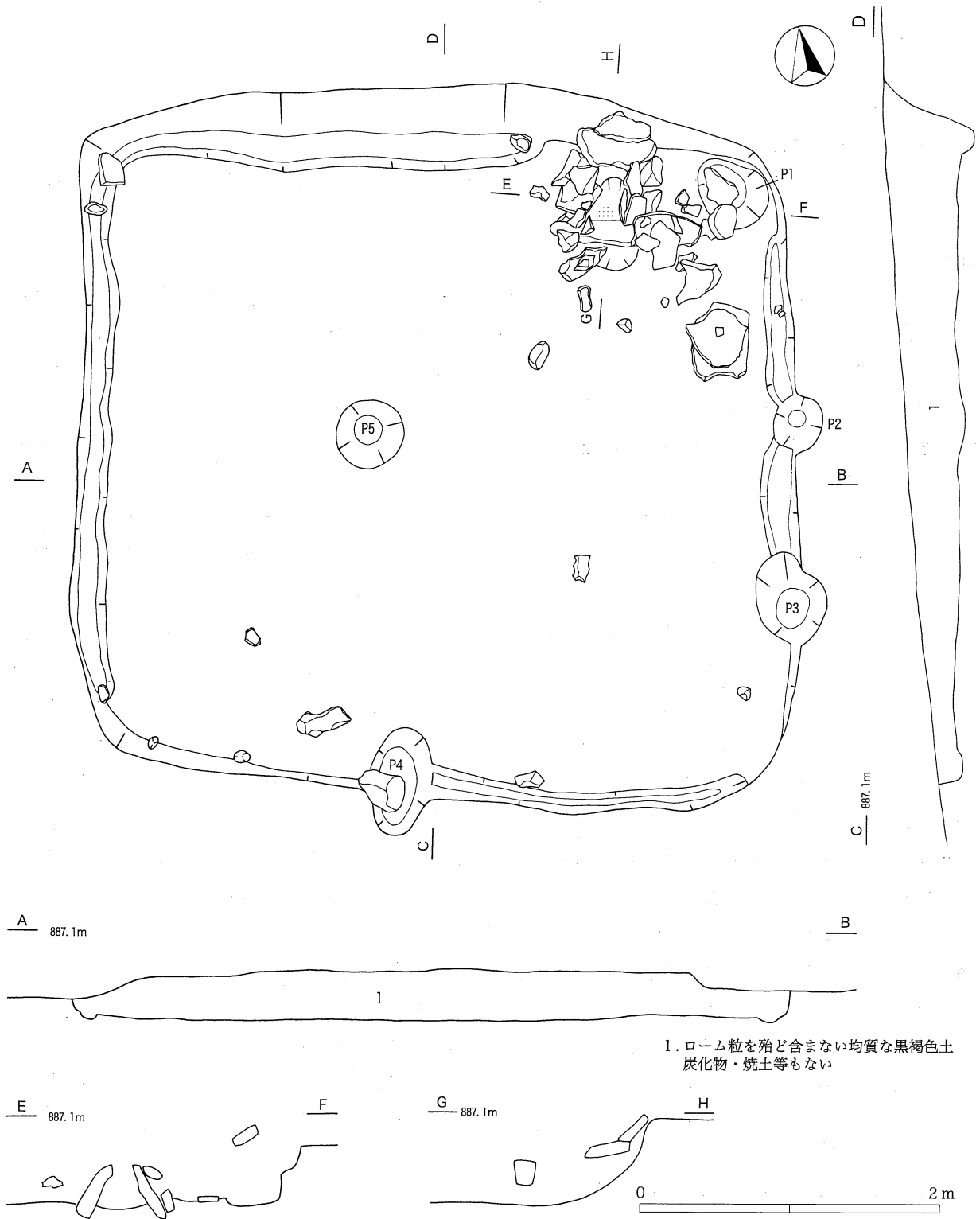
遺物は少ないが土師器と灰釉陶器がある。第11図1は土師器杯の底部で磨耗が著しい。2は比較的浅い灰釉陶器碗である。図示できなかったが土師器杯・碗の破片86点、灰釉陶器皿・碗の破片9点がある。

第2号竪穴住居址（第12・11図、写真13・14）

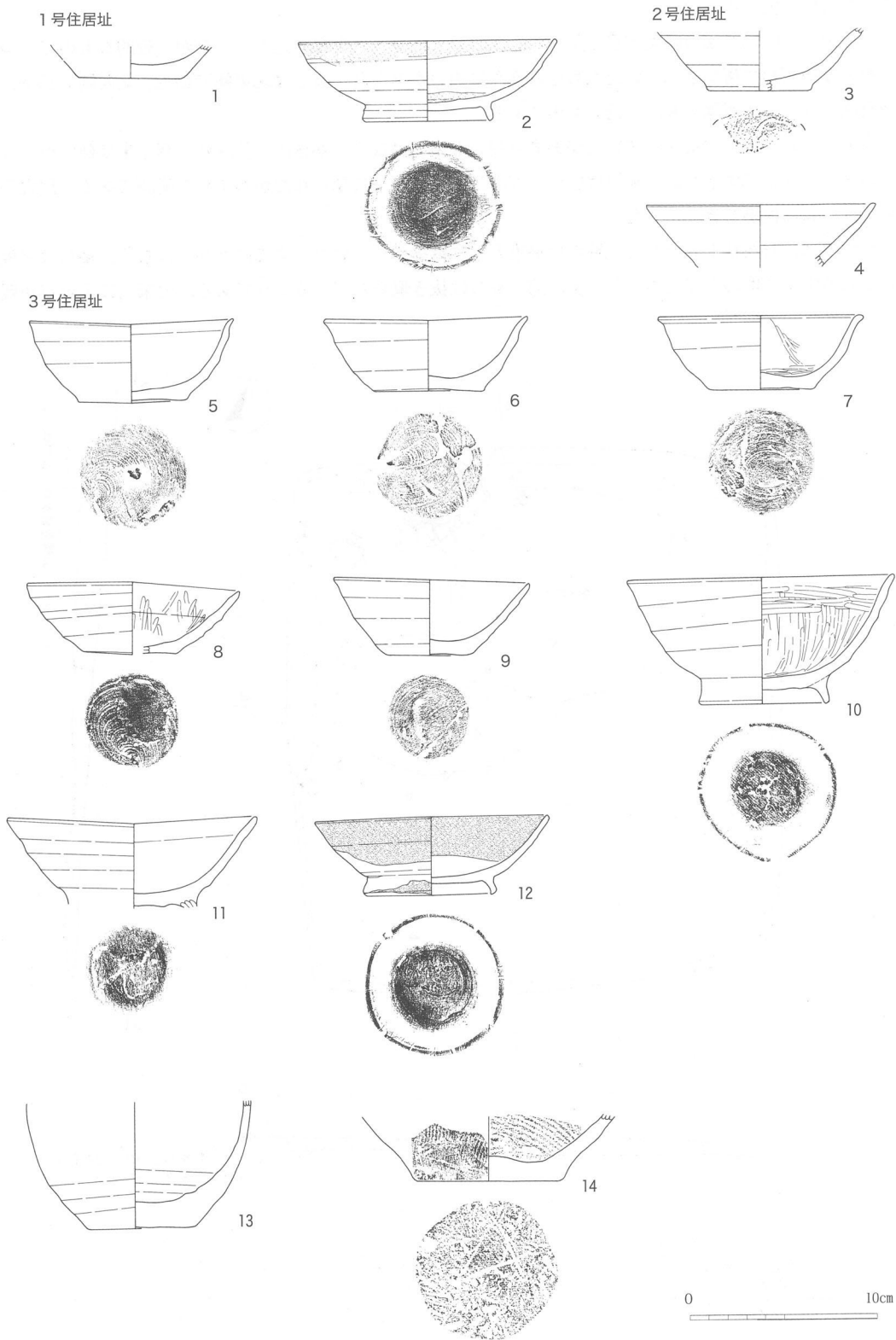
第1号竪穴住居址の南方で検出した。ソフトロームに均質の褐色土が落ち込んでいたため検出は容易であった。住居址の北寄りでタメ址と重複していたが、タメ址がすっぽりと住居址内に入り住居床面を

掘り込んでいる。したがって、この重複関係は、タメ址が新しく本址が古いことになる。タメ址から帰属時期を示すような遺物の出土はなかったが、その形態および構築手法から近～現代と思われる。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。重複するタメ址埋土とわずかに認められた攪乱土以外は色調の変化に乏しく、ローム粒の包含量で1層と2層に分けた状態であるが、レンズ状の堆積を示す



第10図 第1号竪穴住居址実測図 (1:40)



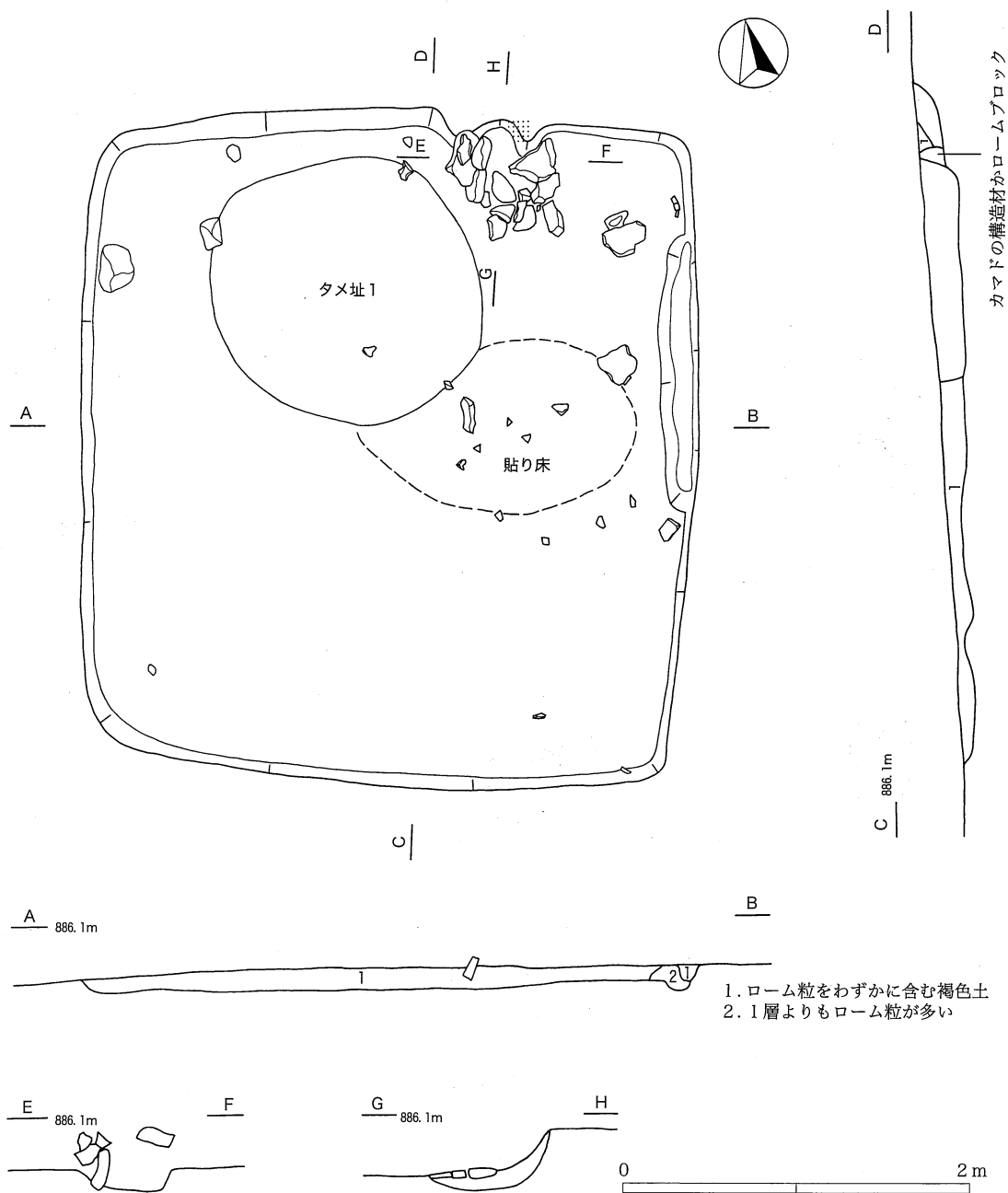
第11图 第1~3号竖穴住居址出土土器实测图(1:3)

もので自然埋没と考えたい。

平面形は356×391cmの隅丸方形を呈する。壁はソフトロームを掘り込んでいたが一般的なもので、ゆるやかな斜面地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、高さは北東隅で15cm、北西隅で15cm、南東隅で5cm、南西隅で8cmと低いものである。

床面は、ロームで構築されていたがあまり硬いものではなく、部分的に施された調整床は硬いが、近～現代のタメ址で破壊された範囲は広い。周溝は、東壁直下に見られたがわずかな範囲である。柱穴等のピット類は検出できなかった。

カマドは、石組粘土カマドで北壁の中央東寄りに構築されていた。すでに天井石はなく、袖石は平板石を八の字状に埋め立ててあるが、焚口部のものは抜き取られているようである。火床上に平板石が残

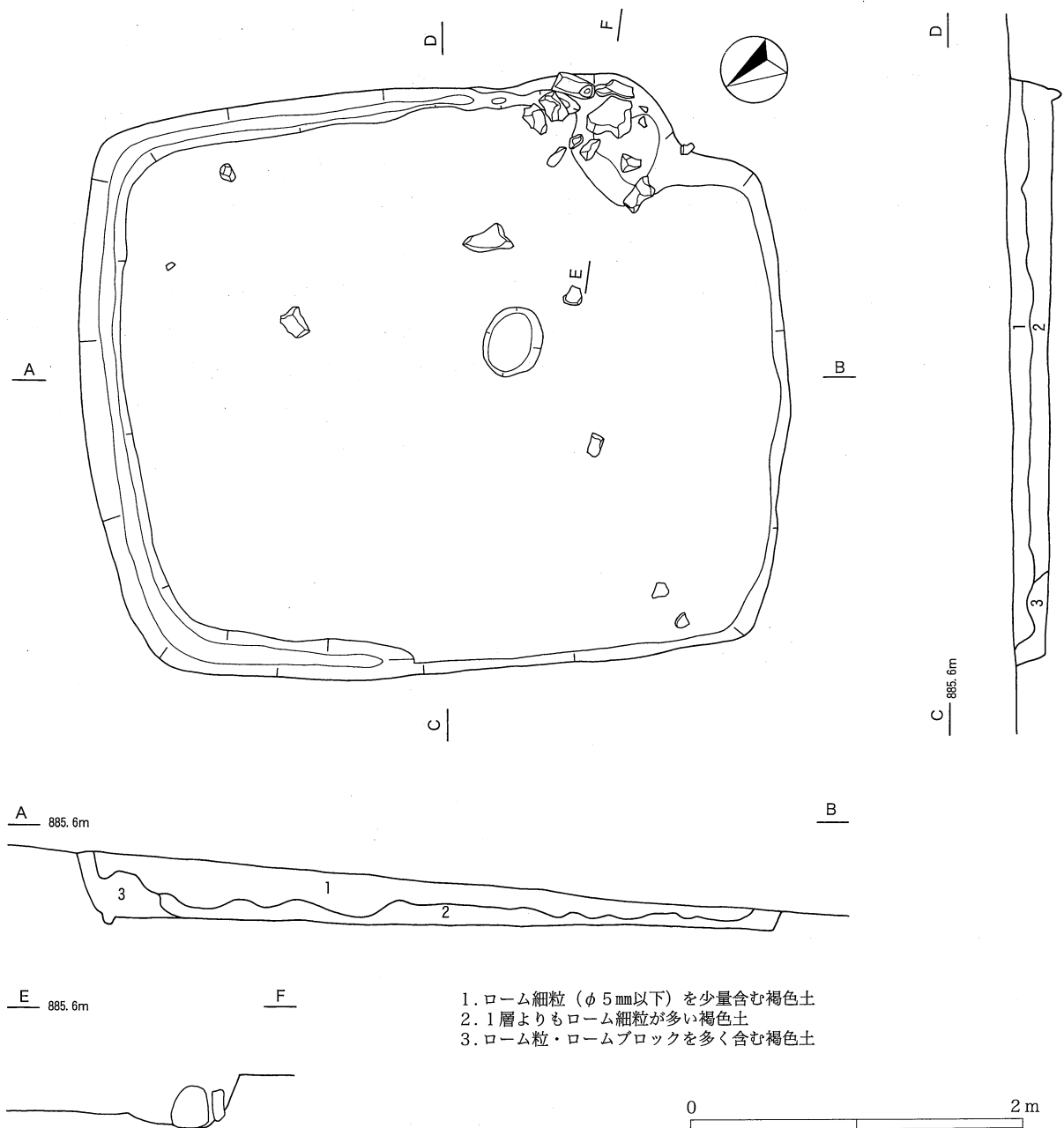


第12図 第2号竪穴住居址実測図(1:40)

されていたが、天井石が落ち込んだものとは思えないし、袖石が倒れたとも思えない状態であり、人為的な行為を見て取ることができる。火床に支脚石はなく、また取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。

礫は、カマド周辺と東壁下でわずかにみられただけで、カマド天井石のような大きなものはなく、本址の天井石は持ち出されてしまったようである。住居内は第1号住居址同様に整然とし、廃棄にあたってあたかも片付けが行われたことを思わせるものである。

遺物は少ないが土師器と灰釉陶器がある。第11図3と4の2点は破片から図示した土師器坏である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片9点、灰釉陶器碗の破片1点がある。



第13図 第3号竪穴住居址実測図 (1:40)

第3号竪穴住居址（第13・11図、写真15・16）

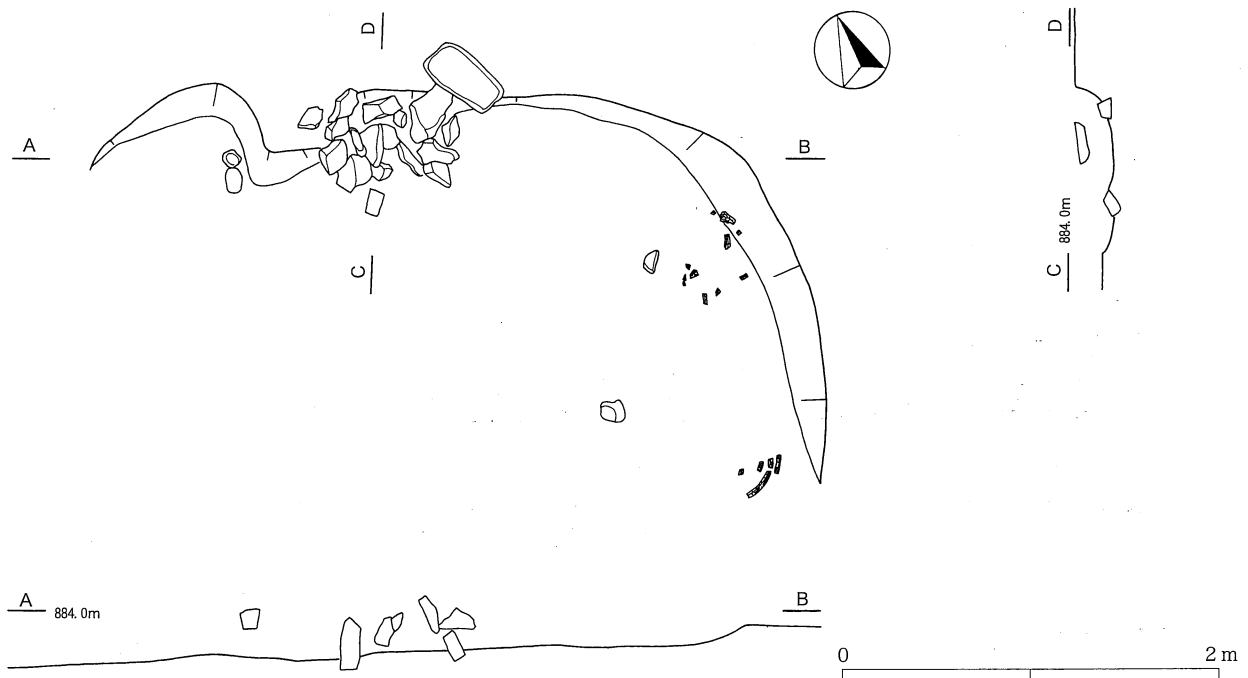
第1・第2号竪穴住居址の西方で検出した。ソフトロームにローム粒を僅かに含む褐色土が落ち込んでいたため検出は容易であった。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。色調の変化に乏しく、ローム粒の包含量で1層と2層に分けた状態であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

平面形は354（東西）×425（南北）cmの隅丸長方形を呈する。竪穴は、地形から考えると縦長方向であるが、カマドを中心に考えると横長方向であり、横長の竪穴としたほうが適切かもしれない。また、平面形を見ると、カマドの南にはコーナーが2ヶ所あり、一見重複する竪穴住居址のように見えるが、埋土に違いはみられなかったし、床は一面で両コーナーとも確実に本址のものである。このコーナーの形態はカマド構築に起原するものなのか、本址を拡張したために生じたものなのか不明である。壁は、ロームを掘り込んでいるが一般的なもので、傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、南東隅で8cm、北東隅で46cm、南西隅で7cm、北西隅で31cmを計る。

床面は、ロームで構築されているが総体的に軟弱である。周溝は、住居址の西半分位の壁直下に見られたが、幅10cm前後、深さ6cm前後である。住居中央ややカマド寄りで検出したP1は、住居址の埋土とはあきらかに異なり、焼土を多く含む土で埋められていた。大きさは45×34cm、深さ12cmで、性格を示す遺物の出土がなく判然としないが、地鎮にかかわる施設と思われる。

カマドは、東壁の南東コーナー寄りに構築されていた。ここは斜面の下方にあたり壁は低くなり、カマドの構造を考えると、わざわざ壁の低いこの位置にカマドを構築しなければならなかった理由は見当たらない。カマドはすでに壊され火床だけが残る状態であるが、火床に支脚石はなく、また、取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。壊されたカマド石は付近に散乱していたが、天井石や袖石に使用された大きなものはなく、本址からは持ち出されているようである。



第14図 第4号竪穴住居址実測図（1：40）

カマド周辺以外に礫はほとんど無く、第1・第2号住居址同様に整然としたものであった。

遺物は土師器と灰釉陶器がある。第11図5～9の5点は土師器坏、10と11は土師器碗、12は灰釉陶器碗、13は土師器小形甕の下胴部、14は土師器甕の底部である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片83点、灰釉陶器碗の破片2点がある。

第4号竪穴住居址（第14・17図、写真17・18）

第3号竪穴住居址の西方で検出したが、その多くは黒色土中に構築されていたこともあり、すでに南側の半分位は流出していた。残存した北側は、北壁の一部と北東コーナー付近、そこに構築されていたカマド、わずかに認められた床面だけで、その範囲は少ないものである。

埋土は、検出時点でそのほとんどがすでに流失しており、確りした観察はできなかったが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

平面形は、(400) × (200) cmの範囲が残存しただけで明確なプランは不明であるが、直線的な北壁と北東コーナーのあり方、本遺跡における住居址の形態等を考え合わせ、隅丸方形ないしは隅丸長方形であったものと思われる。壁は、北東隅それに続く北壁と東壁の一部が残存してはいるが、ただらだと落ち込む状態でよくない。壁高は北東隅で26cmを計るが、ここが斜面の高い位置にあたり、東壁は南に寄るほど低くなり、北壁も西に寄るほど低くなる。

床面は、黒色土中に構築され叩き締めたようにもみえるが、明確なものではなく、多くは微妙な硬さの違いをたよりに検出した状態である。周溝や柱穴を検出するまでに至らなかった。

カマドは、石組粘土カマドで北壁の中央東寄りに構築されていた。すでに天井石はなく、袖石は平板石を八の字状に埋め立ててあるが、焚口左側のは抜き取られているようである。火床の焼土は弱く確りしたものではなかったが、支脚石と思われる礫がみられた。しかし、やや外れた位置に倒れていたこともありいまひとつ判然としない。

遺物は北東隅に集中していたが、土師器・灰釉陶器・鉄製品がある。第17図1と2の2点は土師器坏、3と4の2点は破片から図示した土師器碗、5は灰釉陶器皿で、高台の内と外に墨の付着がみられ硯として使用されたようである。図示できなかったが土師器坏・碗の破片220点、土師器甕破片2点、灰釉陶器皿・碗の破片12点がある。鉄製品第17図6は紡錘車で軸がない。

第5号竪穴住居址（第15・17図、写真19～21）

第4号竪穴住居址のさらに西方で検出したが、黒色土にローム粒を含む黒褐色土の直径150cmほどの落ち込みを認め、当初はその規模から小竪穴と考えたが、検出作業を進める過程で、わずかな焼土とカマド石と思われる大きな石の出土に至り住居址であることが判った。

埋土は、傾斜方向で観察した。すでに南側半分位は流出していたうえに、色調の変化に乏しく、ローム粒の包含量で1層と2層に分けた状態であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

平面形は、220 × (160) cmの範囲が残存しただけであるが、本遺跡における住居址のありかたからみて、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈していたものと思われる。壁は、黒色土を掘り込んでいたこともあり不明瞭な箇所が多く、ややゆがんでいるが原形は整っていたものと思われる。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で23cm、北西隅で15cmを計るが、東壁・西壁とも南に寄るほど低くなり流失のために中ほどあたりでみられなくなる。

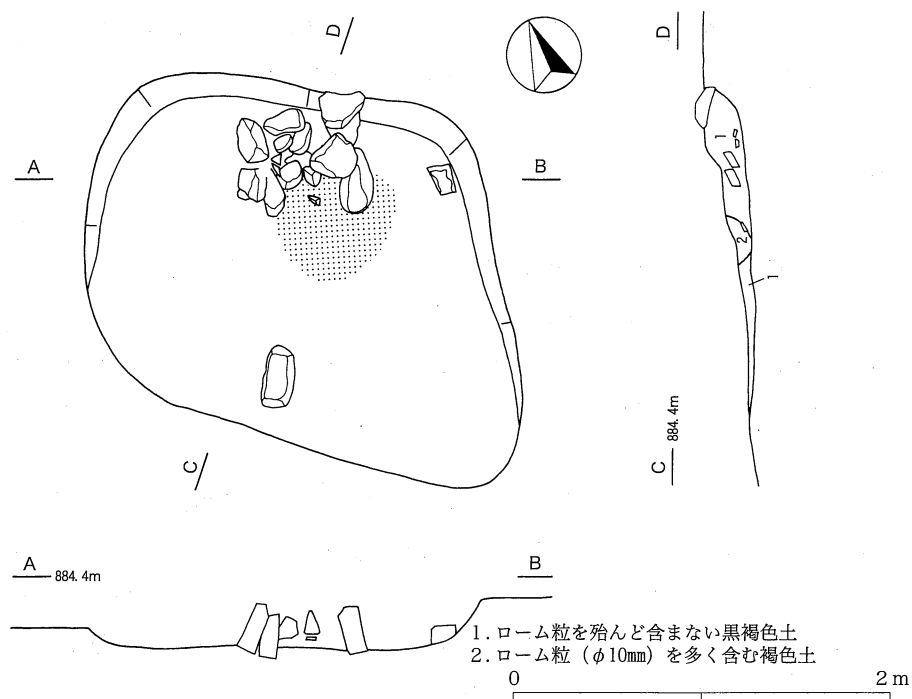
床面は、黒色土中に構築されていた。わずかな範囲であるがカマド付近で調整床もみられはしたが、

南側の多くは流失しているため不明瞭な点の方が多い。周溝や柱穴は検出するまでには至っていない。

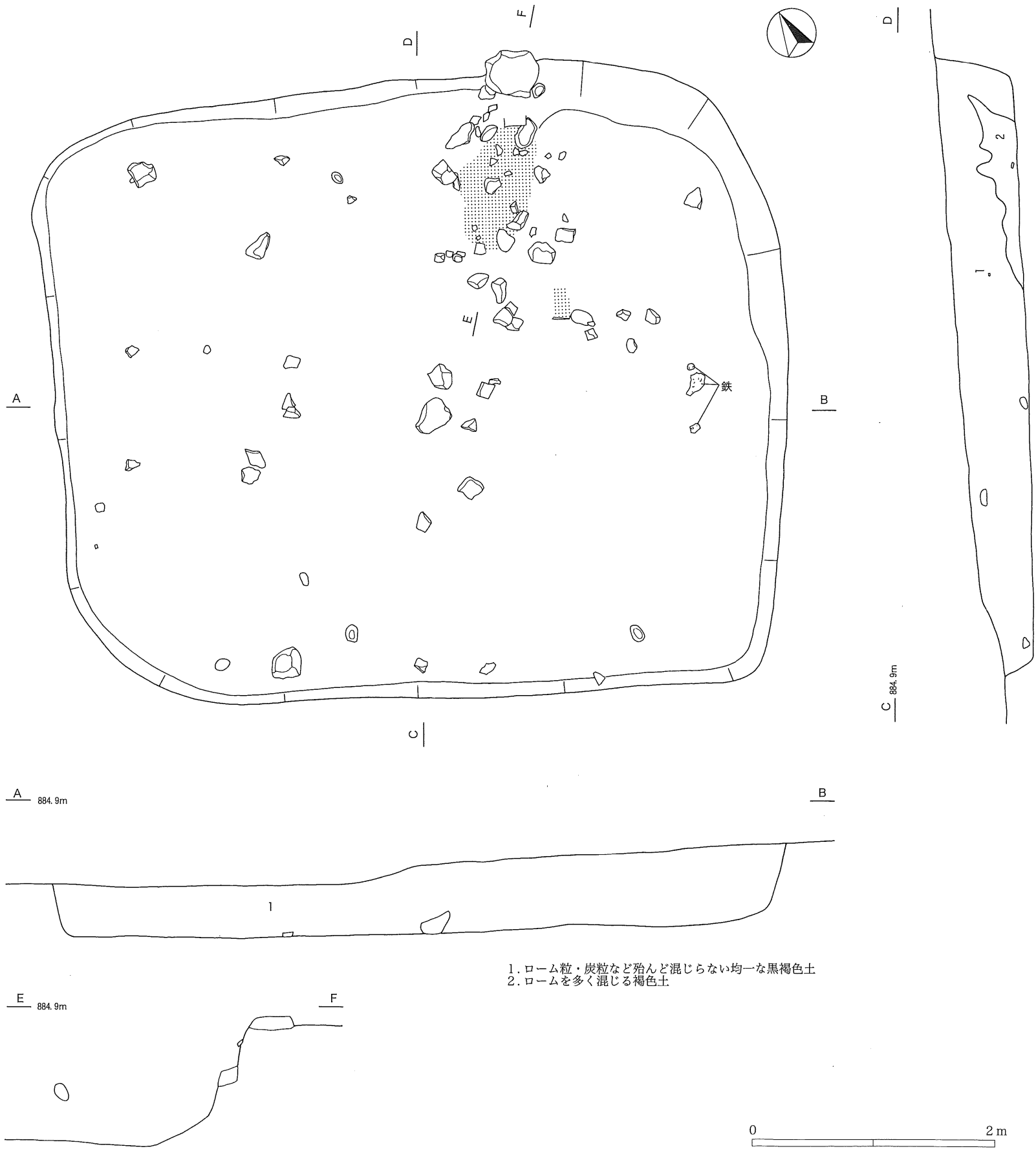
カマドは、石組み粘土カマドで北壁のほぼ中央に構築されていた。すでに天井石は取り除かれていたが、袖石はやや厚みのある石を埋め立ててある。カマド内に大小様々の石が入っていたが、ここ以外からは石の出土はほとんどなく、カマドを壊した時に入れられたようである。カマド内は焼けた痕跡が認められるような状態ではなかったが、支脚石は残存している。カマド内部から第11図8のナデとミガキだけで調整した甕が出土した。やや古い様相とも思われ、本遺跡内では古く位置付けられるかもしれない。

カマド前方に1点の石が据え付けられていた。大きさは32×16cmで、床から8cm高くなるが水平を保つ状態である。上面は、写真21でみるように潰れ痕と擦れ痕は著しく、中央には自然面がわずかに残りやや窪み傾向にあるがほぼ平らで、据え付けられた状態で使用されていたことは確実である。このように据え付けられた施設の発見は、一般的な住居でないことを示唆しているものであり、カマドとの位置関係から鍛冶施設の可能性を考えた。床面上の土を採取し篩いにかけ、さらに磁石で探ったが、残念なことに鍛冶施設にかかわる鍛造剥片等の発見はなく、得られたのは砂鉄だけである。また、カマドはまったく焼けていない状態であり、多くの鍛冶址のカマドに見られるように焼土の厚いものではなかった。ふいごの羽口、鉄滓など鍛冶址にかかわる遺物の発見はなく、鉄床石の可能性は低くなってしまいが、その状態は鉄床石そのものである。次に考えられるのは砧石となるが、あまりにもカマドに近いこともありやはり可能性は低いようである。いずれにしても確りと据え付けられた上面が平らな石で、顕著に潰れ痕が残る作業台であることは確かである。くどくなるが、その検出した位置と、石に残る使用痕跡は鉄床石そのものと思われたが、住居南半分位が流失してしまい解明の手掛かりの少ないことは返す返す残念である。

遺物は少ないが土師器・灰釉陶器・鉄製品がある。第17図8は土師器甕で前記したようにカマド内出土、7は破片から図示した灰釉陶器の甕と思われるものである。図示できなかったが土師器坏・碗の破片5点、土師器甕破片4点、灰釉陶器皿・碗の破片4点がある。鉄製品9は刀子で刃部を欠損している。



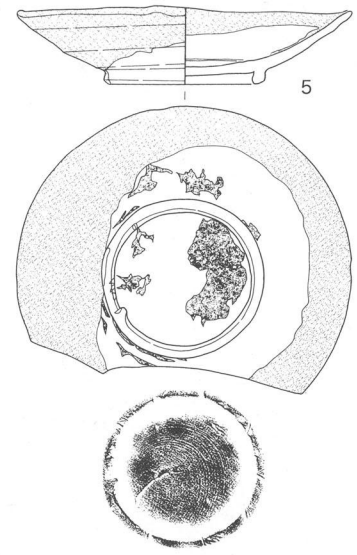
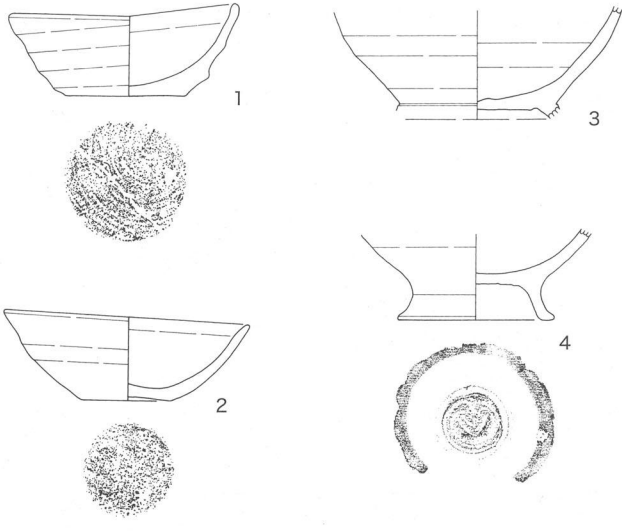
第15図 第5号竪穴住居址実測図 (1:40)



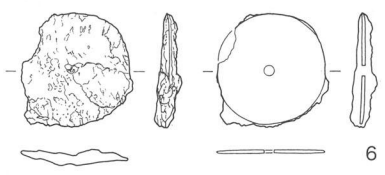
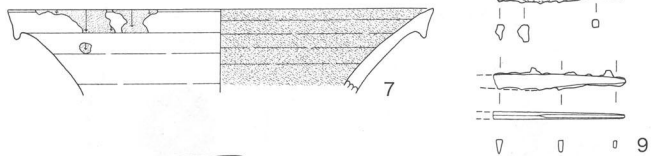
1. ローム粒・炭粒など殆んど混じらない均一な黒褐色土
2. ロームを多く混じる褐色土

第16図 第6号竪穴住居址実測図 (1:40)

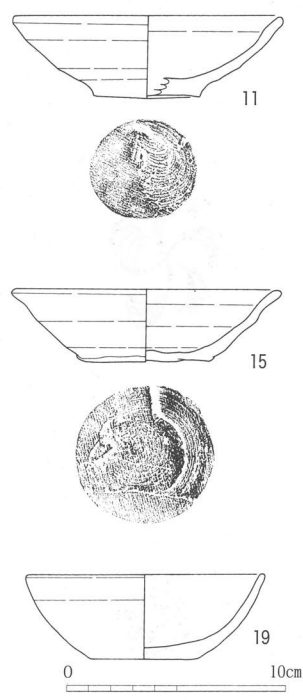
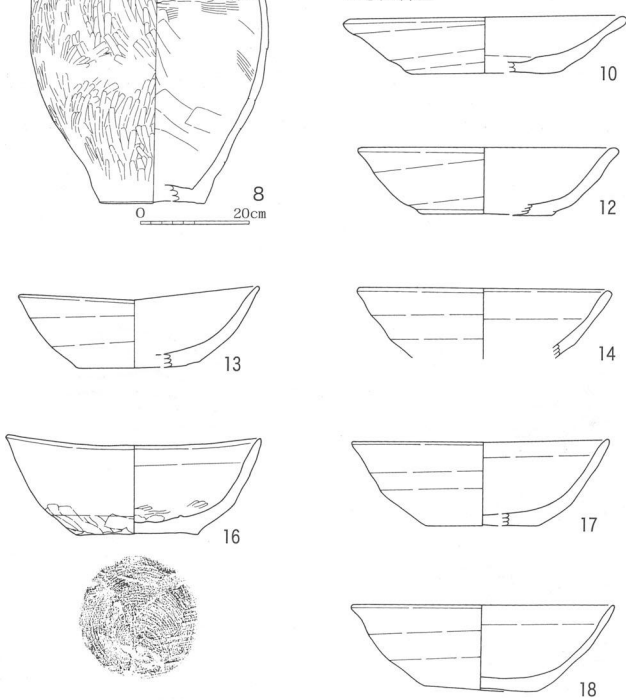
4号住居址



5号住居址

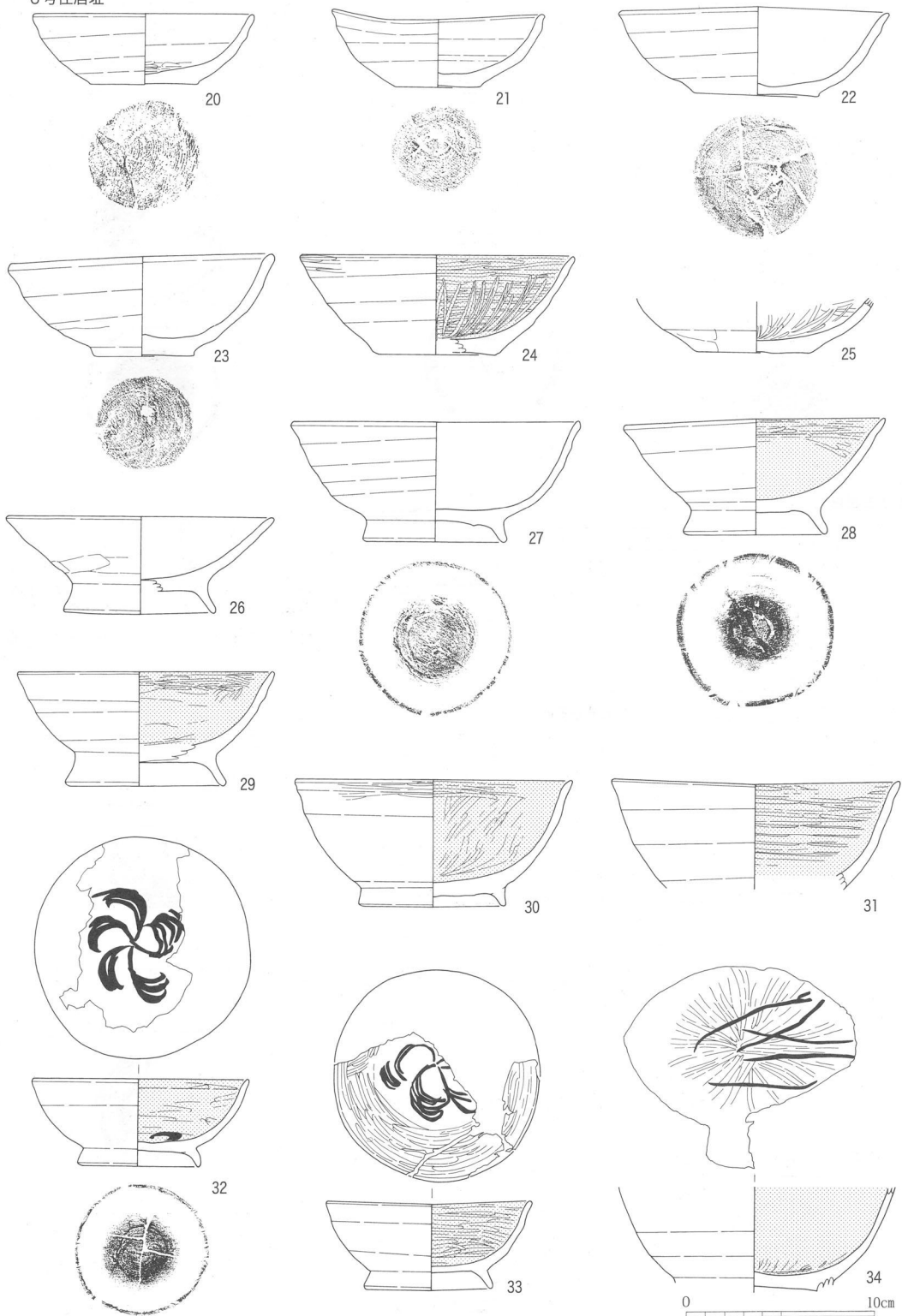


6号住居址



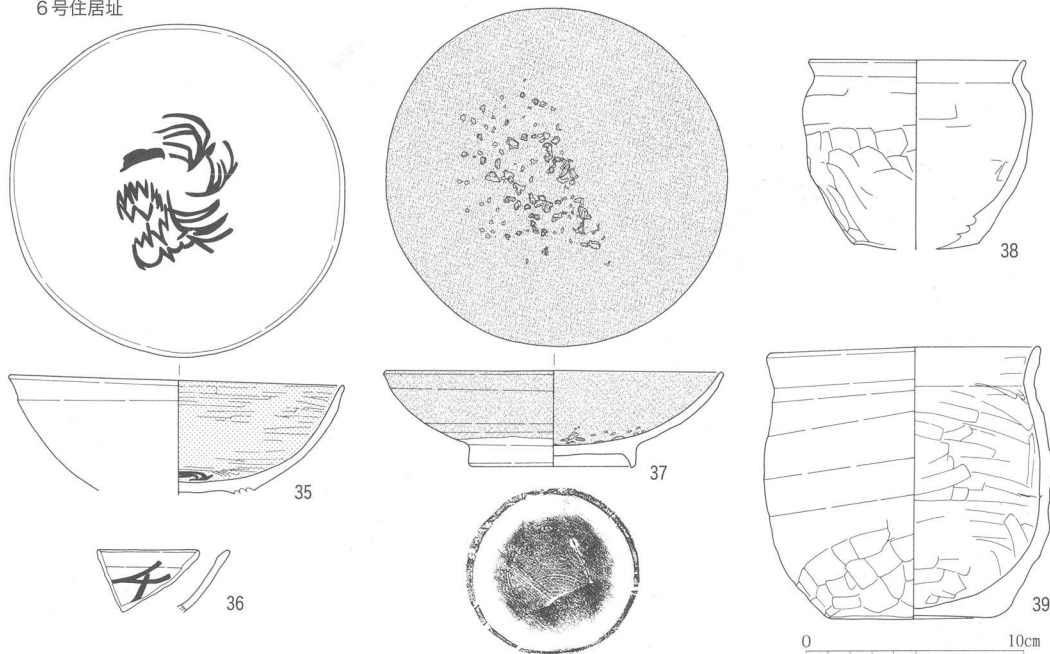
第17图 第4~6号竖穴住居址出土土器・鉄製品実測图 1~7・9~19 (1:3) 8 (1:6)

6号住居址



第18图 第6号竪穴住居址出土土器実測図(1:3)

6号住居址



第19図 第6号竪穴住居址出土土器実測図（1：3）

第6号竪穴住居址（第16～19図、写真22）

第5号竪穴住居址の北西方で検出した。黒褐色土にさらに黒色の強い落ち込みを認めたが、色調の差だけでは明確にできない点が多く、遺物の散布状況等から住居址の範囲を想定した。

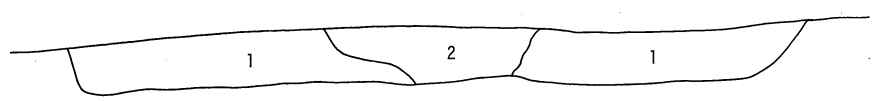
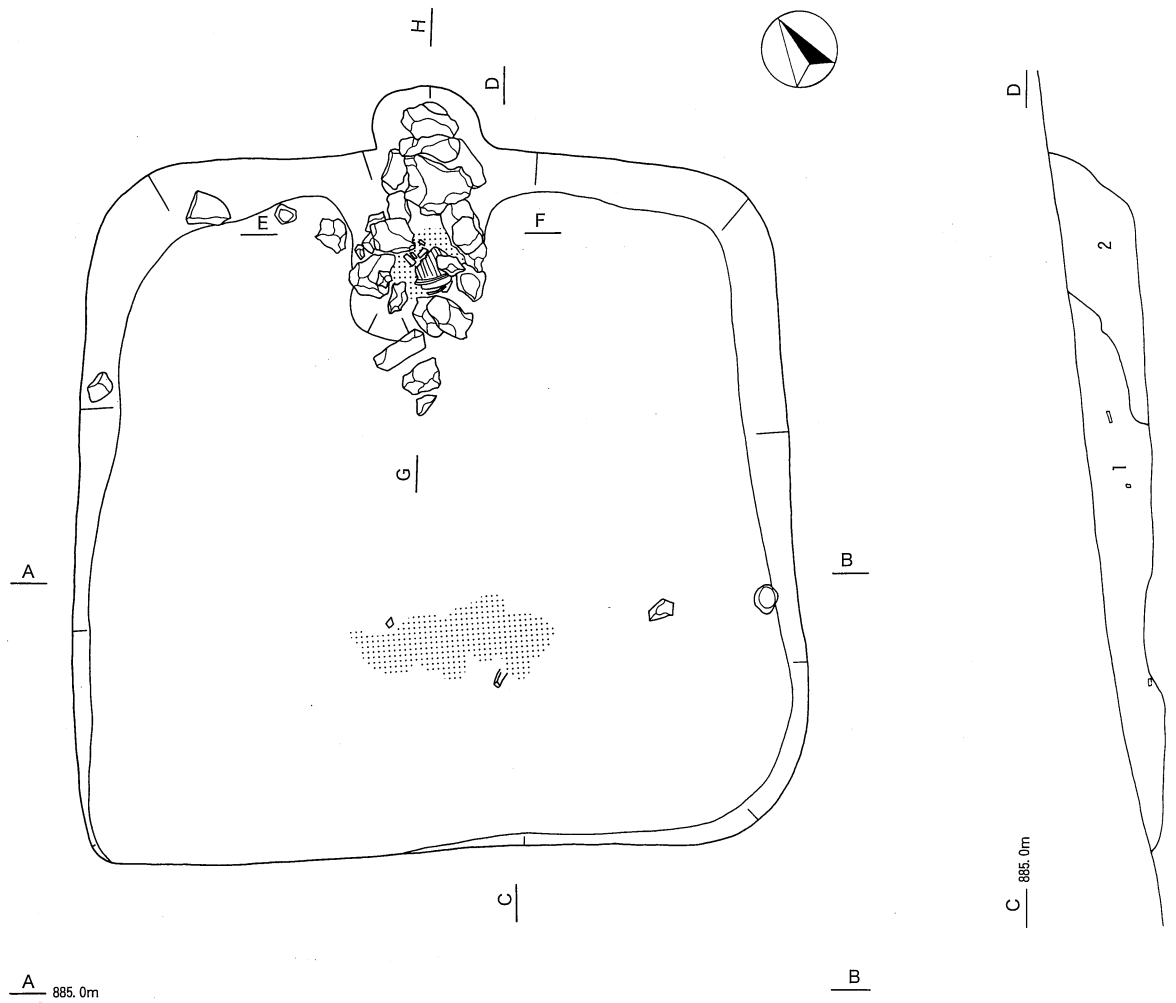
埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。色調の変化に乏しく、ローム粒の包含量で1層と2層に分けた状態であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

平面形は、602×506cmの横長の隅丸長方形を呈し、本調査においては最も大きな竪穴である。壁は、黒褐色土を掘り込んでいたこともありやや不明瞭な箇所があり良くない。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で81cm、北西隅で58cm、南東隅で36cm、南西隅で22cmを計る高いものである。

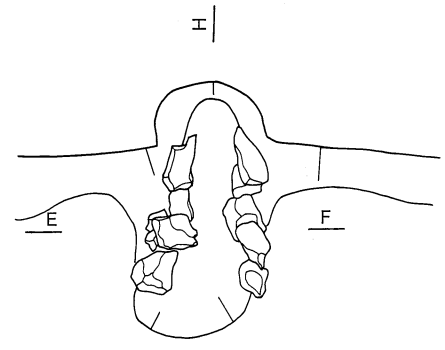
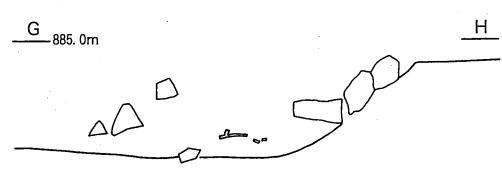
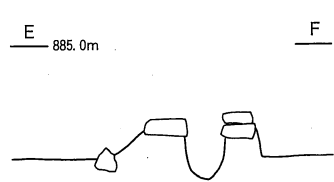
床面は、黒色土中に構築され、中央付近は固く叩き締められていた。周溝や柱穴等の検出にも努力したが、掘り込みが黒褐色土中にとどまっていたうえに、埋土と地山は色調の変化に乏しく発見するまでには至らなかった。数多い鉄滓が出土したうえに、南西隅の近くから粘土が崩れたような黄褐色の塊が発見されたこともあり、鍛冶炉の発見を期待する中で調査を進めたが、黄褐色の塊は床面から浮いたものでカマド構築材の廃棄物であると判断した。

カマドは、石組み粘土カマドで北壁の中央やや東寄りに構築されていたが、多くは壊され火床が残存していただけで詳細については不明であるが、カマド基部は地山を切り出すことで形作っている。カマド付近で石を発見しているが、天上石や袖石として使用したような大きなものはなく、すでに本址からは持ち出されているようである。カマドの壁上には、大きな平板石1点が遺存しているが、煙道にかかわるものと思われる。

遺物は多く土師器・灰釉陶器・鉄滓がある。第17図10～19と第18図20～25の16点は土師器坏で、24は内面黒色土器、12・21・25の3点は炭素の多くは抜けているが内面黒色土器のようである。14は7号住居址出土破片が接合している。第18図26～34・第19図35の10点は土師器碗で、28～35の8点は内面黒色



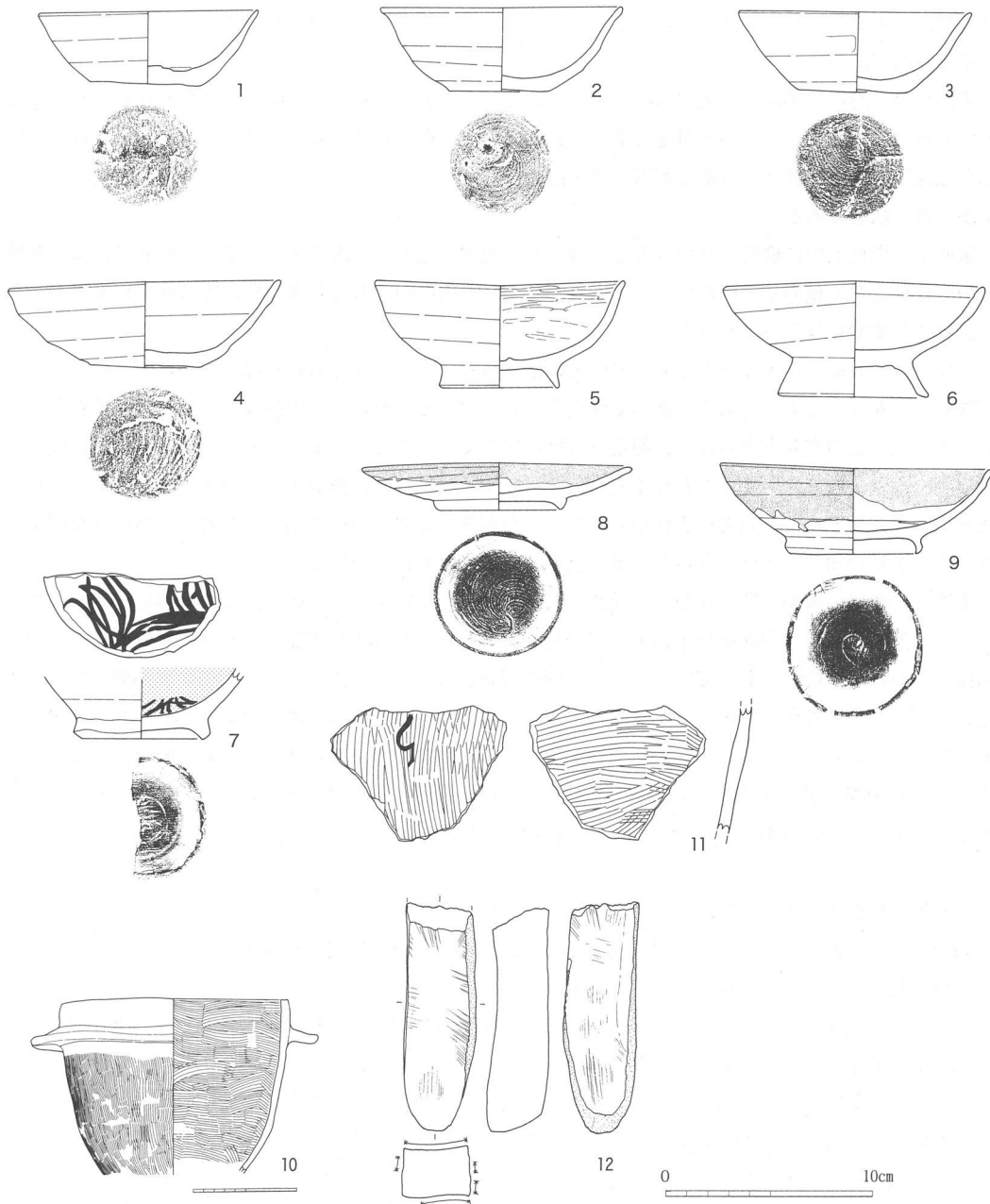
- 1. ローム粒・炭粒が殆んど混じらない均質な褐色土
- 2. 1層にローム粒 (φ 5mm) 炭化物など少量混じる



第20図 第7号竪穴住居址実測図 (1:40)

土器で32~35の4点に暗文が施されている。36は墨書土器破片で内面に「チ」ないしは「千」とみえるが、破片のため詳しいことはわからない。37は灰釉陶器碗、38と39の2点は土師器小形甕である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片1,726点、土師器甕破片71点、灰釉陶器皿・碗の破片33点がある。鉄滓は埋土中から床面で出土し、垂直分布・平面分布ともに広範囲にわたるが、21点を数え表※に示したようにその大きさはさまざまで総重量は1,518.7gである。

7号住居址



第21図 第7号竪穴住居址出土土器・石器実測図 1~9・11・12 (1:3) 10 (1:6)

第7号竪穴住居址（第20・21図、写真23～26）

第6号竪穴住居址の西に隣接している。カマド石と思われる石が出土したことにより、付近の精査を進めたところ微妙な違いではあるが、落ち込みが確認できたため住居址の埋没を想定した。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。色調の変化に乏しく、ローム粒の包含量で1層と2層に分けた状態であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。逆三角堆土の中央付近から焼土と、投棄されたと思われる第21図12の砥石が出土した。焼土は床面から浮いていたが投棄されたものではなく、確実にここで生じた火床であり、埋没過程で火が焚かれたことを示しているが性格は不明である。

平面形は、381×370cmの隅丸方形を呈する。壁は、黒色土を掘り込んでいたこともありやや不明瞭な箇所もあり良くない。きつい傾斜地に構築されていたため壁の高さに大きな違いがみられ、北東隅で52cm、北西隅で48cmを計り、東壁と西壁は北が高く南が低くなり、南壁の多くはすでに流失し東南隅がわずかに残る状態である。

床面は、黒色土中に構築されたもので、わずかな範囲に施された調整床をのぞけば軟弱で、埋土と地山の変化に乏しく極めて不明瞭で、掘り過ぎてしまった箇所がある。周溝や柱穴等の検出にも努力したが発見するまでには至らなかった。

カマドは、石組み粘土カマドで北壁の中央に構築されていた。天井石の一部は失われていたが、両袖が残るしっかりしたものである。基部は地山を切り出すことで形作り、両袖は石を並べ、天井石を乗せている。天井石の在り方からみて、煙道は壁外に伸びていたことが理解できる。火床に支脚石は残っていないが、取り除いたと思われる穴がある。カマドの燃焼部に第21図10の羽釜が残されていたが、底を抜いたものである。底を抜き使用できなくした羽釜をカマド内へ遺棄した行為は、祭祀的な要素が強いことを窺い知ることはできるが、その意義についてはわからないままである。

遺物は土師器・灰釉陶器・鉄製品・鉄滓・石器がある。第21図1～4の4点は土師器坏、5～7の3点は土師器碗で、7は内面黒色土器で暗文が施されている。8は灰釉陶器皿、9は灰釉陶器碗で、内面に漆と思われるものが付着している。10は土師器羽釜、11は土師器甕ないしは羽釜の胴部破片で、肉眼観察で「ら」？と書かれた墨書のようにみえるが、墨書される土器は供膳具であり、煮沸具への墨書は聞いたことがなく明確なことはわからない。図示できなかったが土師器坏・碗の破片62点、土師器甕破片11点、灰釉陶器皿・碗の破片4点がある。鉄製品は1点出土したが板状の破損品で器種のわからないものである。石器第21図12は砂岩製の砥石で破損している。

第8号竪穴住居址（第22・24図、写真27～30）

調査対象地の西側で、ロームに黒褐色土が落ち込んでいたため、周辺の住居址に比べると輪郭はかなり明確に見えたこともあり検出は容易であった。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。色調の変化とローム粒の包含量から1層と2層に分けた状態であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

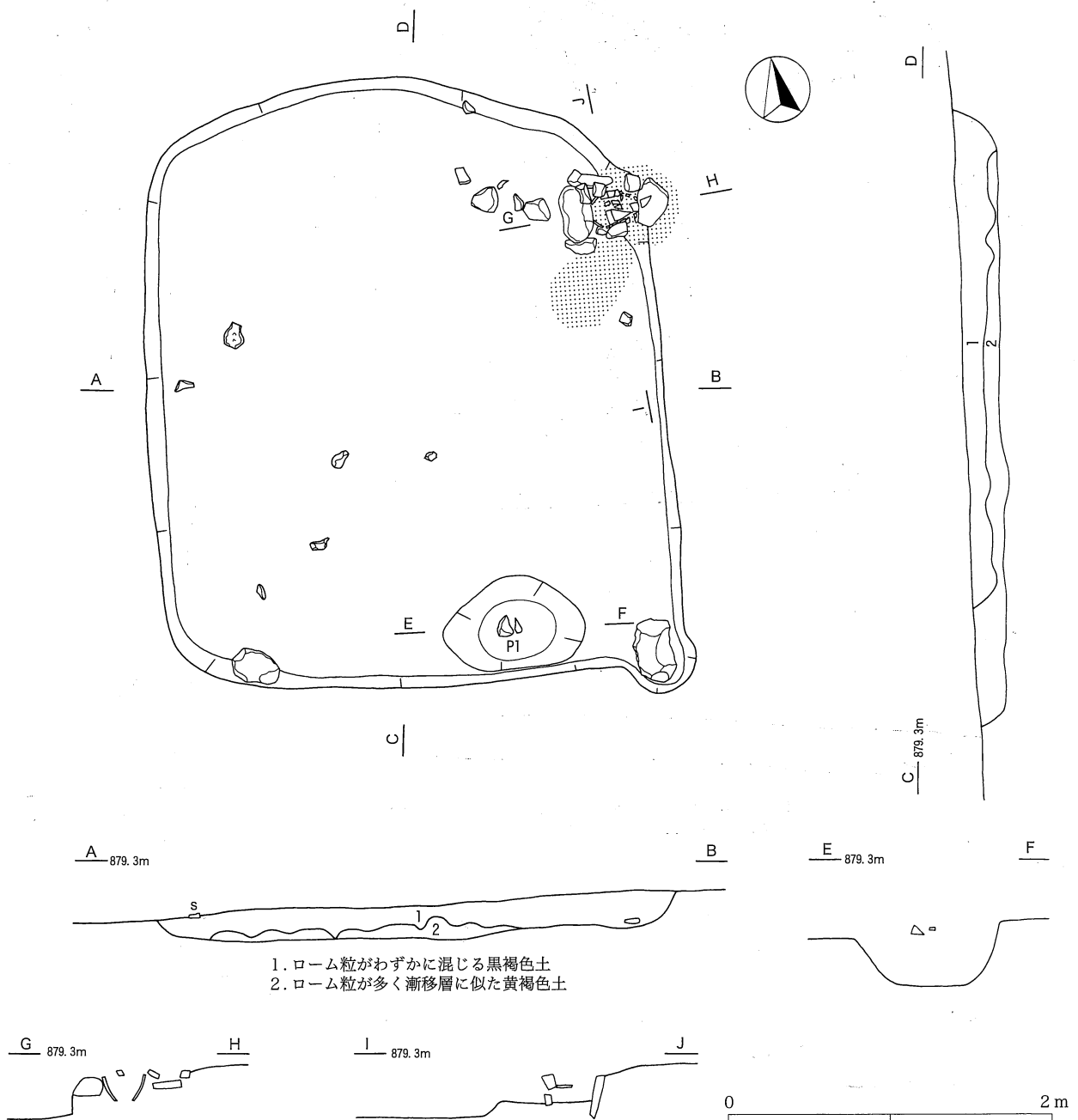
平面形は、第22図の実測図でみるように320×377cmを計り、北壁が張り出した隅丸方形を呈しているが、北壁は掘り過ぎた可能性が高く320×350cm程であったものと思われる。壁は、ロームを掘り込んでいたが北壁のように不明瞭な箇所もあるが一般的なものである。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で25cm、北西隅で20cm、南東隅で14cm、南西隅で10cmを計る。

床面は、ロームで構築されていたが軟弱なうえに不明確で、周溝や柱穴は検出するまでには至らなかった。

た。南壁の中央東寄りの壁直下に88×57cmの楕円形のP 1があり、深さは27cmを計り、埋土は攪乱土で埋め戻されたものと思われる。性格を示すような遺物の出土がなく性格は一切不明である。南東隅と南西隅にやや大きめの石が床面に食い込み、また据え置かれたような状態で存在し、礎石とも考えられるが本資料だけであり明確なことはわからない。

カマドは、石組み粘土カマドで東壁の北東隅近くに構築されていた。小形で低い作りであるが、天井石の一部と袖石は原位置を保ち、第24図4の甕が掛けられたままの状態であった。カマド基部は地山を切り出すことで形作り、両袖には石を並べている。火床に支脚石はなく、また、取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。

遺物は土師器と灰釉陶器があるが、発掘調査から整理作業における不手際で、9号住居址と遺物の混入が生じ、図示した土器は現状にもどすことができたと思っているが、破片については戻すことができ

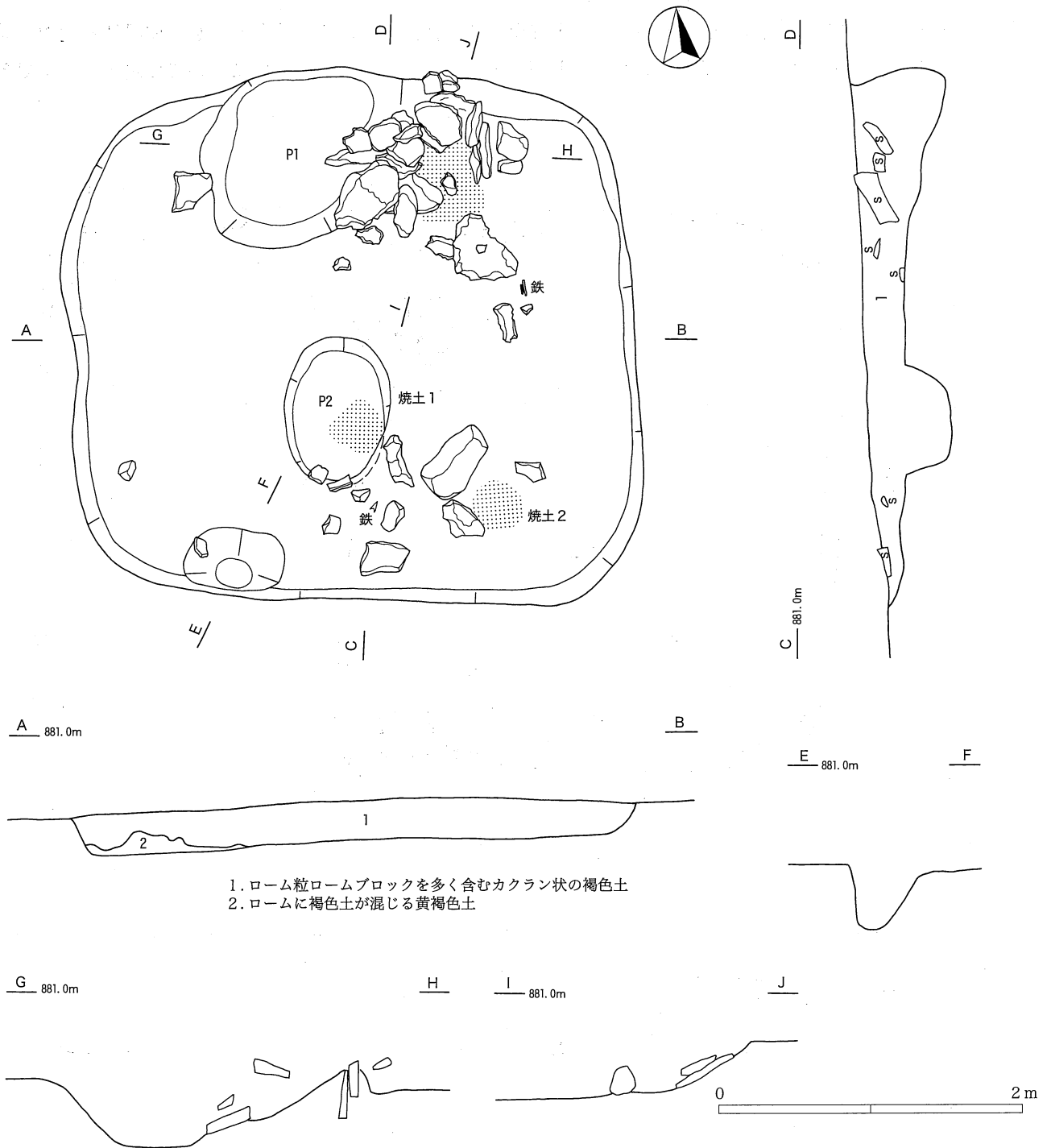


第22図 第8号竪穴住居址実測図 (1:40)

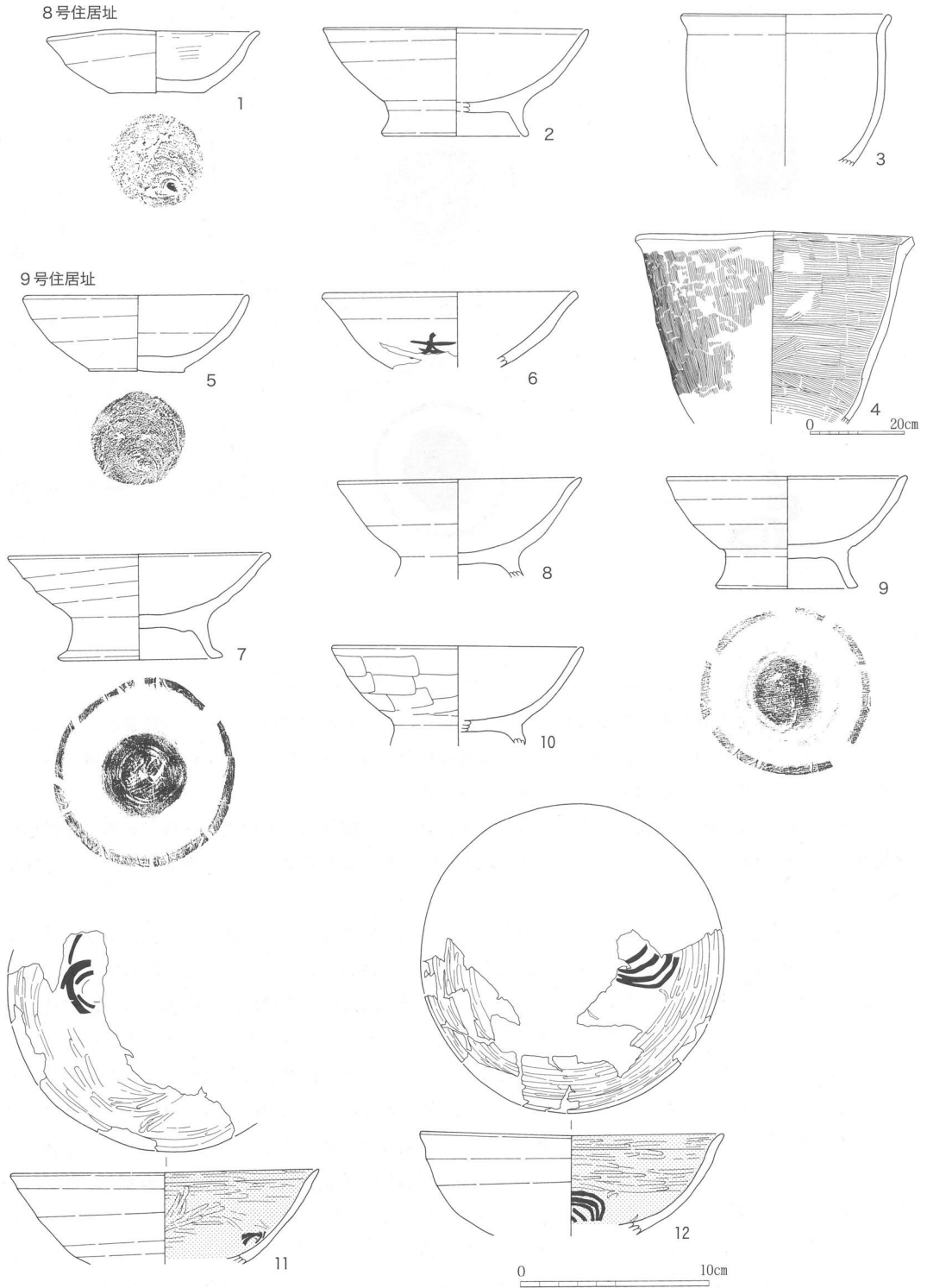
なかったものもある。第24図1は土師器坏、2は土師器碗、3は土師器小形甕、4は土師器甕である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片53点、土師器甕破片14点、灰釉陶器碗の破片1点がある。

第9号竪穴住居址（第23～25図、写真30・32）

調査対象地西側におけるトレンチ調査で、ロームブロックが混じる暗褐色の小規模な落ち込みを認めた。周囲の表土を剥ぎ遺構の検出作業を進めた結果、住居址の埋没を確認した。

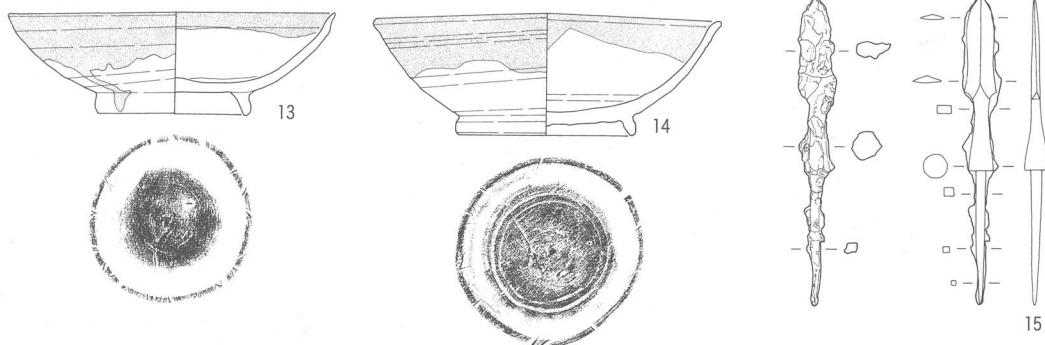


第23図 第9号竪穴住居址実測図（1：40）

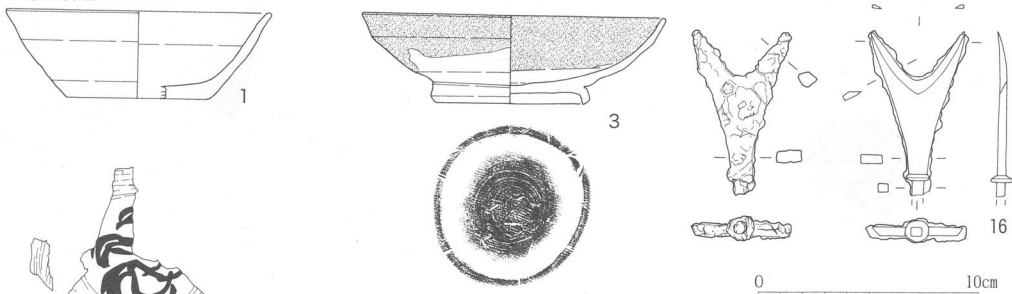


第24图 第8·9号竖穴住居址出土土器实测图 1~3·5~12 (1:3) 4 (1:6)

9号住居址



10号住居址



第25図 第9・10号竪穴住居址出土土器・鉄製品実測図(1:3)

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。詳しくは後記する北壁直下のP 1の影響か、ロームブロックが混じる攪乱状のもので、一部には焼土も見られた。ロームブロックは上層よりも下層に多く、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので、自然埋没と考えたい。

平面形は、368×345cmの隅丸方形を呈する。壁は、ロームを掘り込んでいたが普通である。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で34cm、北西隅で15cm、南東隅で4cm、南西隅で16cmを計る。

床面は、ロームで硬いが凸凹している。周溝や柱穴は検出できなかった。南壁の中央西寄りの壁直下に66×41cmの楕円形のP 3があり、深さは30cmを計り埋土は住居址と異なるもので、埋め戻されたものと思われる。遺物の出土はなく性格は不明であるが、第8号住居址のP 1は南壁の中央東寄り、本址は南壁の中央西寄りにあり、その位置関係は東と西の違いこそみられたが、平面形や規模は余りにも似かよっているうえに、両ピットとも埋め戻されたものであり、同様の性格を持ち合わせていたように思う。中央やや南に、97×73cmの楕円形のP 2があり貼床が施されていた。深さは77cmでロームが多量に混じる攪乱土で埋め戻されたものであり、地鎮等にかかわる施設とも思われるが、遺物の出土はなく判然としない。北壁際に134×95cmの楕円形のP 1があり、深さは37cmを計りカマドの左袖を破壊し、壁下は袋状に掘られ壁外に達している。住居廃絶時ないしはそれほど時間が経過しない時に掘られ、埋め戻されているようであるが、遺物の発見がなく性格は不明である。

カマドは、石組み粘土カマドで北壁の中央やや東寄りに構築されていた。ほとんどが破壊された状態で、右袖のカマド石の一部が原位置をとどめていただけである。左袖はP 1により破壊され、付近にカマド石と思われる平板石が散乱し、中にはP 1に落ち込んだものもある。なお、カマド基部は地山を切

り出すことで形作り、右袖は平板石を埋め立てている。火床に支脚石はなく、また、取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。

地床炉状の火床が2ヶ所で見られた、便宜的にP2の貼床上を焼土1、その東南寄りを焼土2と呼ぶが性格は不明である。埋土中とはいえこの付近に石が集中しているようで、これらの石が焼土と何らかなかわりを持っていたことも考えられるし、他の住居址のカマド石が投棄された可能性も捨てきれない。いずれにしても本遺跡の中であって、地床炉と石のあり方は他住居址と様相に違いがみられ、性格については考えていかなければならないようである。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品があるが、発掘調査から整理作業における不手際で、8号住居址とで遺物の混入が生じ、図示した資料は現状にもどすことができたと思っているが、土器破片については戻すことができなかつたものもある。第24図5と6の2点は土師器坏で、6は墨書土器で外面に「太」とみえるが破損部に書かれたもので明確なことはわからない。7～12の6点は土師器碗で、11と12の2点は内面黒色土器で暗文が施されている。第25図13と14の2点は灰釉陶器碗である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片102点、土師器甕破片1点、灰釉陶器碗の破片1点がある。鉄製品第24図15は尖根鍬の完形品、16は雁又鍬で莖を欠損している。

第10号竪穴住居址（第26・25図、写真34）

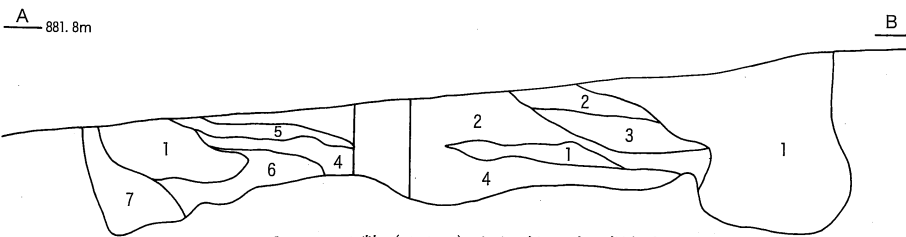
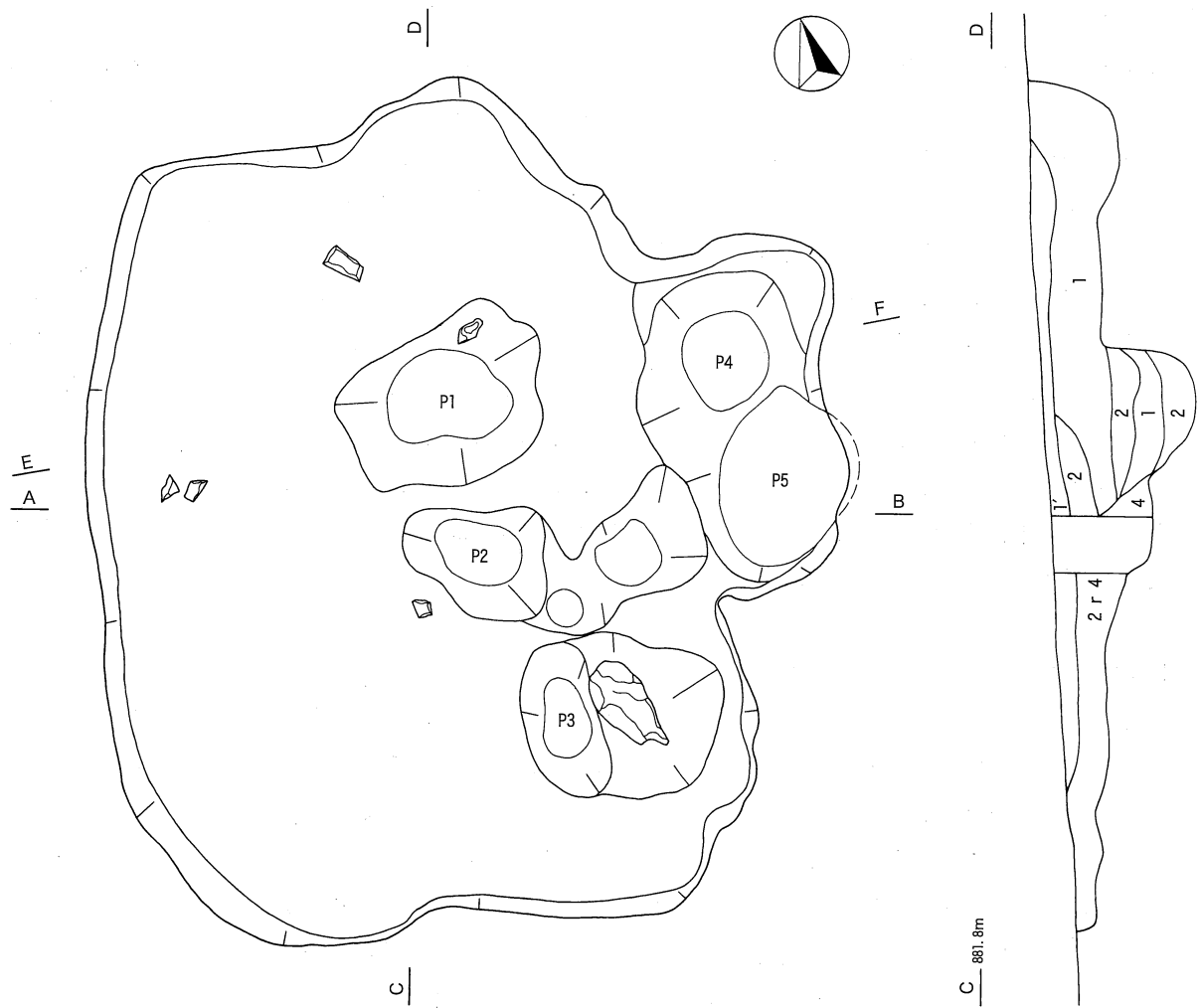
調査対象地の西側で、ロームにモヤモヤとした不定形の褐色土の落ち込みがみられ、攪乱穴と誤認してもおかしくない状態であったがサブトレンチを入れ、下層の調査を試みたところ灰釉陶器の破片が出土し、何らかの遺構であることが判明した。調査の進行とともに極めて凸凹の激しい竪穴住居状の掘り込みであるが、大きなピットを伴い、底面は凸凹だらけで住居の床面のような平坦な面はほとんどみられず、住居址とは程遠い状態であるが、火床の発見で住居址としたものである。

住居床面で検出したピットは、廃絶時点で開口していたもの、すでに埋め戻されていたもの、廃絶後に新たに掘られたものがあり極めて特異である。なお、本址が埋め戻された後に掘られた穴は、別遺構として捉えるべきかも知れないが、それらの穴は廃絶にかかわる一連の行為で掘られたものと考え、ここでは本址に伴う施設としておきたい。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。その結果、人為的に埋めたものであるが、埋め戻した後、再び掘り込んだり、火を焚いたりしている複雑な状況が見て取れた。

平面形は、第26図の実測図でみるように420×330cmの不整形の隅丸長方形で、埋め戻した後P4とP5の2基は掘られたことは確実で、住居址とは確実に時間差がみられるが、前記したように廃絶にかかわる一連の行為で掘られたものと考えている。壁はロームを掘り込んでいるが、不明確な箇所もみられた。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で54cm、北西隅で30cm、南東隅で16cm、南西隅で10cmを計る。

床面は、ロームで硬いが凸凹だらけで平坦な面はみられない状態であるが、その凸凹を実測図に表現することは困難なため一切を省き作図している。見方によれば北壁と西壁の直下に浅い周溝が巡っているようにもみえるが、凸凹だらけで明確なことはわからなかつた。P1～P3は住居東寄りに並ぶが、規模と主軸には違いがあるうえに、その深さも床面からP1は42cm、P2は15cm、P3は30cmでやはりまちまちで、共通点を持たないもので性格は不明である。P4とP5は新しく、P5の東側は袋状に掘られている。袋状に掘られる穴の多くは貯蔵穴と考えられているが、P5は廃絶時に掘られたもので貯蔵穴とは考えにくく、やはり性格については不明である。第9号住居址のP3も廃絶時に掘られた穴であり、袋状に掘られた箇所がみられ同様な性格を持ち合わせているのかもしれない。



1. ローム粒 (φ 1mm) をまばらに含む褐色土
2. ローム粒 (φ 1mm) を多く含む黄褐色土
3. ローム細粒 (φ 5mm) を少量含む褐色土
4. 2に近いがローム粒がやや少ない
5. 焼土を多く含む褐色土
6. ロームブロック
7. ローム粒を殆んど含まない均質な褐色土
- 1': 1層よりローム粒が少ない



第26図 第10号竪穴住居址実測図 (1:40)

火処である焼土は、南東隅にあり、それは散乱する石の下にかくれてしまう狭いもので、壁に近いことからカマドの残骸とも思われたが、石は1点だけでありカマドと断定することができなかった。

当地方において数多いピットが伴う住居址はそれほど多くないが、それらの中で茅野市判ノ木山西遺跡第12・13号住居址と岡谷市船霊社遺跡第3・6・7号住居址からは、羽口、鉄製品、鉄滓などが出土し鍛冶関連遺構と考えられている。本址と似かよった点も多く、わずかではあるが鉄製品と鉄滓が出土したこともあり、鍛冶施設との関連を予想する中で調査を進めた。しかし、羽口の発見や鍛冶炉址などを確認することはできなかった。さらに床面直上の土を採取し篩いにかけて、さらに磁石で探したが、残念なことに鍛冶施設にかかわる鍛造剥片等の発見はない。

本址の埋没過程は特異であり、遺構のあり方も他の住居址と異なる点が多く鍛冶施設を想定したが、ふいご羽口など関連遺物の発見はなくその可能性は低いものであり、他の機能を考えていかなければならない。祭祀的な機能を考えてみたがやはり関連を窺わせる遺物の発見はなく、現段階では特定できない状況である。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄滓がある。第25図1は破片から図示した土師器坏、2は土師器碗で、内面黒色土器で暗文が施されている。3は灰釉陶器碗である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片86点、須恵器は同個体と思われる壺破片6点、灰釉陶器碗の破片1点がある。鉄滓は1点で重さ136.4gである。

第11号竪穴住居址（第27・28図、写真35～38）

調査対象地の中央付近で検出した。この辺りは傾斜がきつく小規模な沢状の窪地が黒色土で埋没した地形であり、表土を剥いだ時点ですでに斜面上方ではハードロームが露出し、斜面中ほどから下方にかけては黒色土が堆積していたが、下方にさがるほど黒色土の堆積は厚くなる。そのうえ断層線とも考えられる明瞭なロームと黒色土との境界線が観察でき、当初はこれを住居址の掘り込みと誤認し遺構検出に時間を費やした。

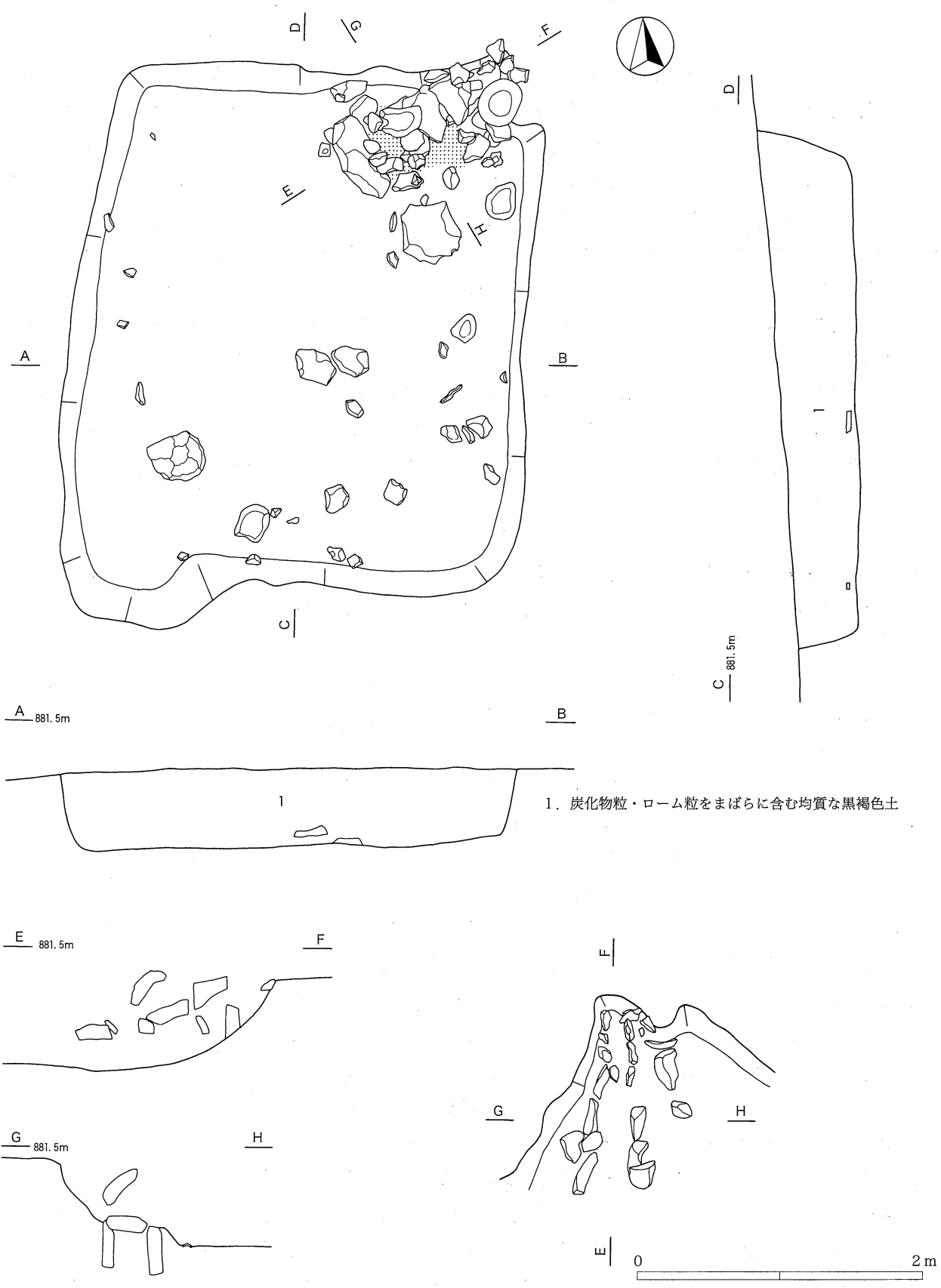
本住居址は、下方の黒褐色土の堆積域にあり数回におよぶ検出作業においては、色調・土質の変化を把握することができなかったうえに、遺物の集中もみられなかったこともあり、検出するまでには至らなかった。しかし、時間が経過する中で検出面の乾燥が進み、乾燥が遅い方形部分が見えてきたことにより、再度検出作業を行い住居址の埋没を確認した。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察したが、色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、ロームの細粒がわずかに混じる黒褐色土の単層であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

平面形は、317×361cmの隅丸長方形を呈している。壁は黒褐色土を掘り込んでいたが、埋土との違いは極めて微妙で不明確であり、判別に苦慮し手探り状態で調査を進めた結果、南西隅の張り出しは判別ができずに掘り過ぎたようである。壁高は、自然傾斜によりその高さに違いがはみられたが本遺跡のなかでは高く、北東隅で50cm、北西隅で71cm、南東隅で40cm、南西隅で48cmを計る。

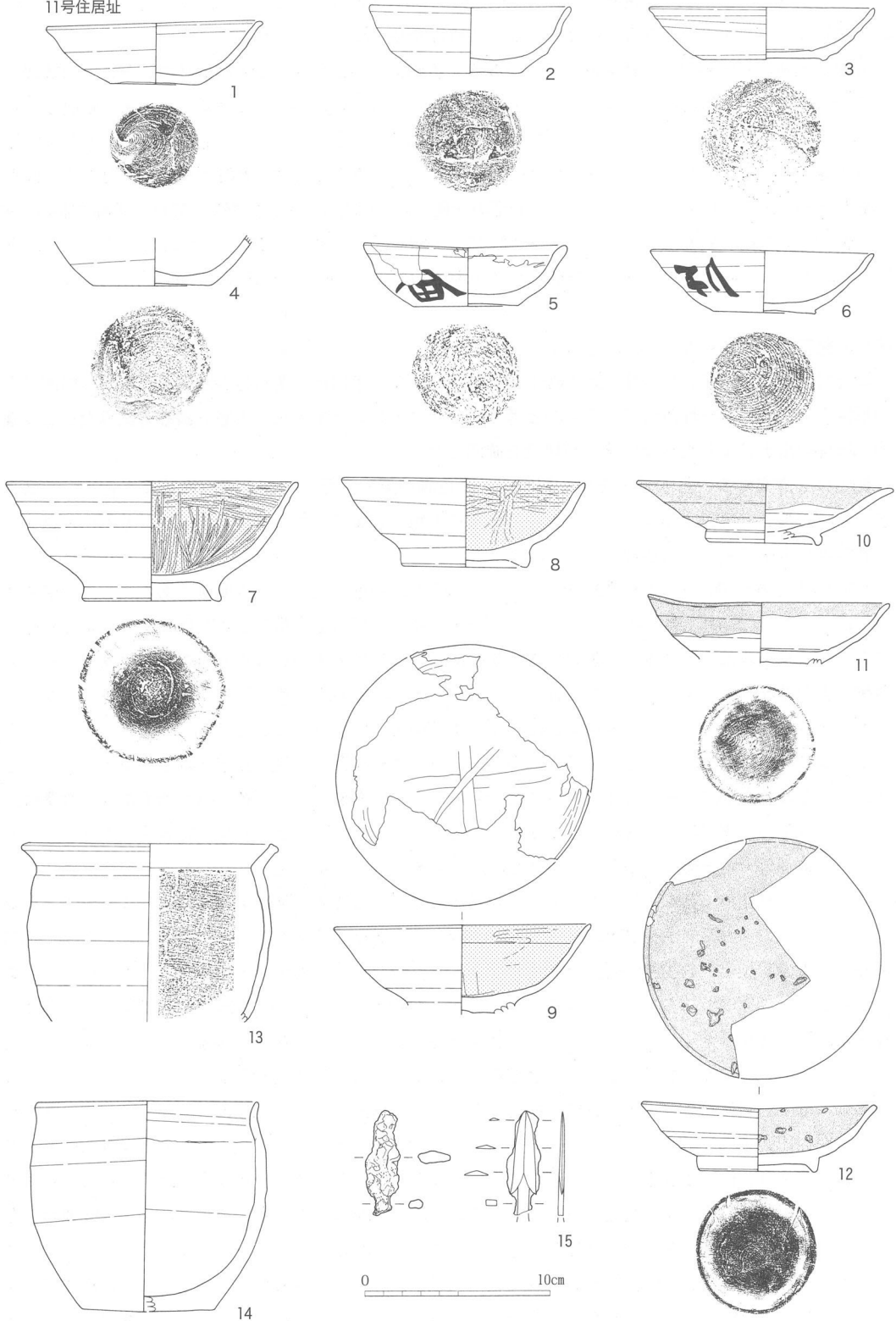
床面は、わずかに施された住居中央付近の調整床以外は、地山の黒褐色土を叩き締めているが軟弱で不明確な所が多い。床面にみられた地山の礫は、その頭が削られたものもあり、平坦な床を意識する気持ちは極めて大きかったようである。周溝や柱穴は検出できなかった。

カマドは、石組み粘土カマドで北東隅に構築されていたが、本遺跡の中では最も遺存状態が良い一つで、多数の石を組みその周囲を粘土で覆ってある。故意に壊す痕跡はみられず、天井石がわずかにずれていただけである。両袖は平板石を八の字状に埋め立て、煙道部も石を埋め立て構築しているが袖部の



第27図 第11号竪穴住居址実測図 (1:40)

11号住居址



第28图 第11号竖穴住居址出土土器・鉄製品実測図 (1 : 3)

石より小さいものばかりで、煙道は壁外に伸びていたことが理解できる。火床はよく焼けているが火床に支脚石はなく、また、取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。

遺物は土師器・灰釉陶器・鉄製品・鉄滓がある。第28図1～6の6点は土師器坏で、5と6は墨書土器で、5は「□」と解読不明であるが、屋号などにみる「やまだ」と読めるが文字の一部が破損しており詳しいことはわからない。6も「□」でやはり解読不明である。7～9は土師器碗で、3点とも内面黒色土器で9は暗文が施されている。10は灰釉陶器皿、11と12の2点は灰釉陶器碗、13と14の2点は土師器小形甕である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片623点、土師器甕破片67点、灰釉陶器皿・碗の破片22点がある。鉄製品は2点出土し第28図15は尖根鏃で莖を欠損している。図示できなかった1点は器種のないものである。鉄滓は3点あり重さ214.0g、24.8g、15.4gである。

第12号竪穴住居址（第29・30図、写真39・40）

調査対象地の西側で、10号住居址の西南に隣接している。半円形の落ち込みがみられたが、当初はその形態から沢状地形が埋没しているものと考えたがサブトレンチを入れ、下層の調査を試みたところ遺物と床面の出土により大きな住居址の埋没を確認した。

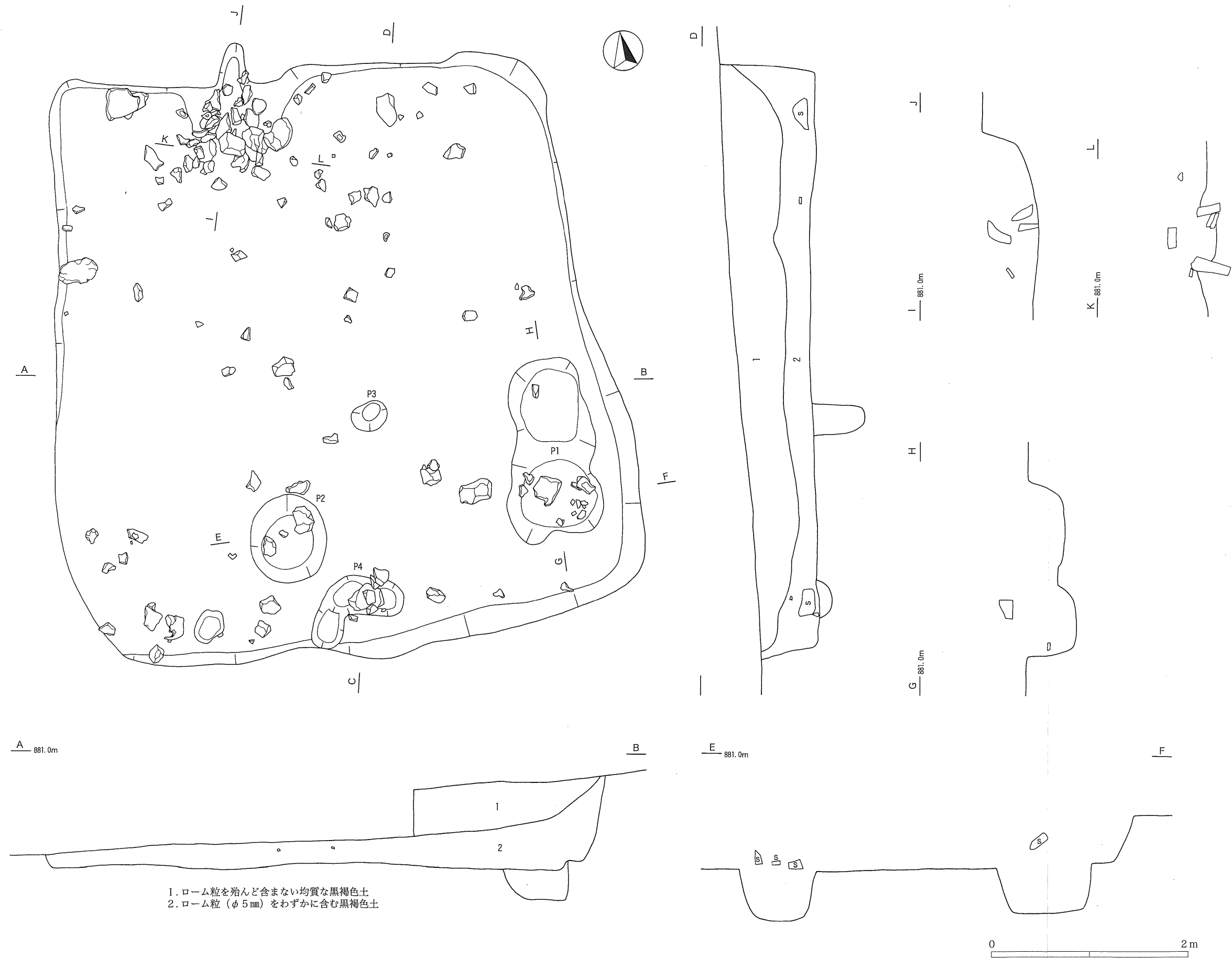
埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。色調の変化に乏しく、上層は均質な黒色土、下層はローム粒が混じる黒色土となり、ローム粒の有無で1層と2層に分けた状態であるが、基本的にはレンズ状の堆積を示すもので自然埋没と考えたい。

平面形は、560×600cmの不整隅丸方形を呈しているが、西壁の大部分が不明確であることを考慮すれば、原形は整った隅丸方形であったものと思われる。壁は、傾斜地に構築された関係でロームと黒色土になるが、ローム部分の東壁と南壁は明確で比較的よいが、黒色土の壁は不明確な箇所が多く、中でも西壁は不明確なうえに南寄りはずでに流失している。きつい傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で53cm、北西隅で25cm、南東隅で84cm、南西隅で6cmを計る。

床面は、地山のロームと黒色土を叩き締めてあるが、ローム部分は硬く良好である。黒色土部分はそれほど硬くなくなかには微妙な差で判別した所もあるし、不明確なままで終わった所もある。周溝は、東・南壁直下の一部にみられたが、ここは確りしたロームの床面範囲であり検出は容易であったが、黒色土の床面部分では検出できなかった可能性が高く、周溝は広範囲に巡っていたものと思われる。ピットは、P1～P4の4基を検出した。P1は東壁下にあり、攪乱土で埋め戻された1基のピットを想定したが、平面95×100cm、深さ37cmと、平面95×75cm、深さ48cmが隣接するものであった。P2は平面77×89cm、深さ54cmとその規模は柱穴そのものであるが、住居と同じ埋土であり廃棄時に開口していたことが観察できたものであり、柱穴とは違うようであるが遺物の出土はなく性格は不明である。P4は南壁下にあり、径40cm前後を計る3基がくの字状に隣接するが、深さは東から30cm、12cm、5cmで、廃棄時に開口していたことが観察できたが、遺物の出土がなくやはり性格は不明である。

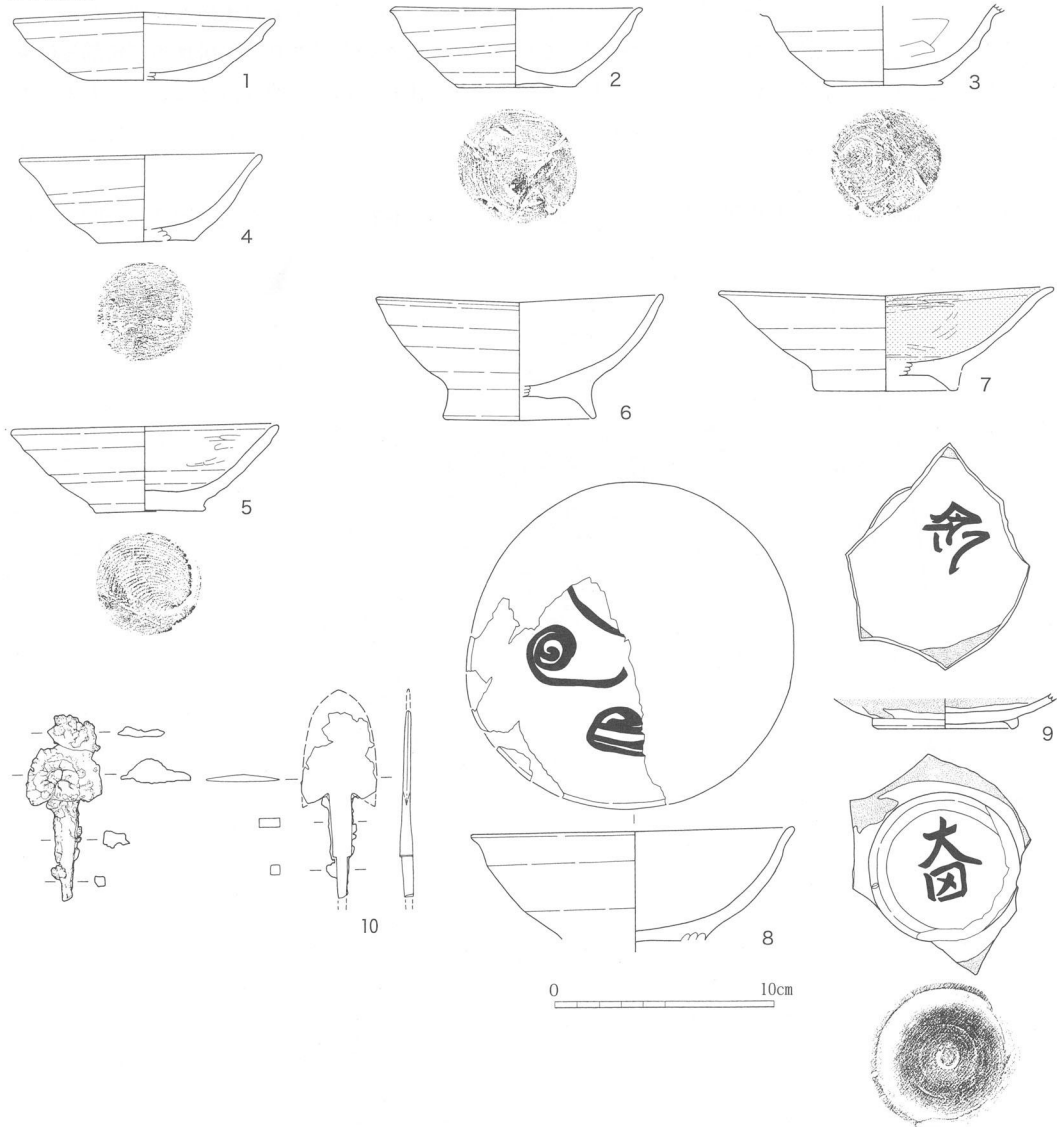
カマドは、石組み粘土カマドで北壁の中央やや西寄りに構築されていた。天井石はずでに取り除かれているが、住居址内に散乱していた平たい石がそれに当るものと思われる。カマド基部は地山を切り出すことで形作り、両袖と煙道部は平板石を八の字状に埋め立てたもので、その状態は良く右袖から煙道部はより良い状態で残され、煙道は壁外に伸びていたことが理解できるものである。火床に支脚石はなく、また、取り除いた痕跡もなく支脚石を持たないタイプである。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・鉄製品がある。第30図1～5の5点は土師器坏で、4は炭素の多くは抜けているが内面黒色土器のようである。6～8は土師器碗で、3点とも内面黒色土器であるが6と8は炭素の多くは抜けているようであり8は暗文が施されている。9は灰釉陶器皿底部で、



第29図 第12号竖穴住居址実測図 (1:40)

12号住居址



第30図 第12号竪穴住居址出土土器・鉄製品実測図（1：3）

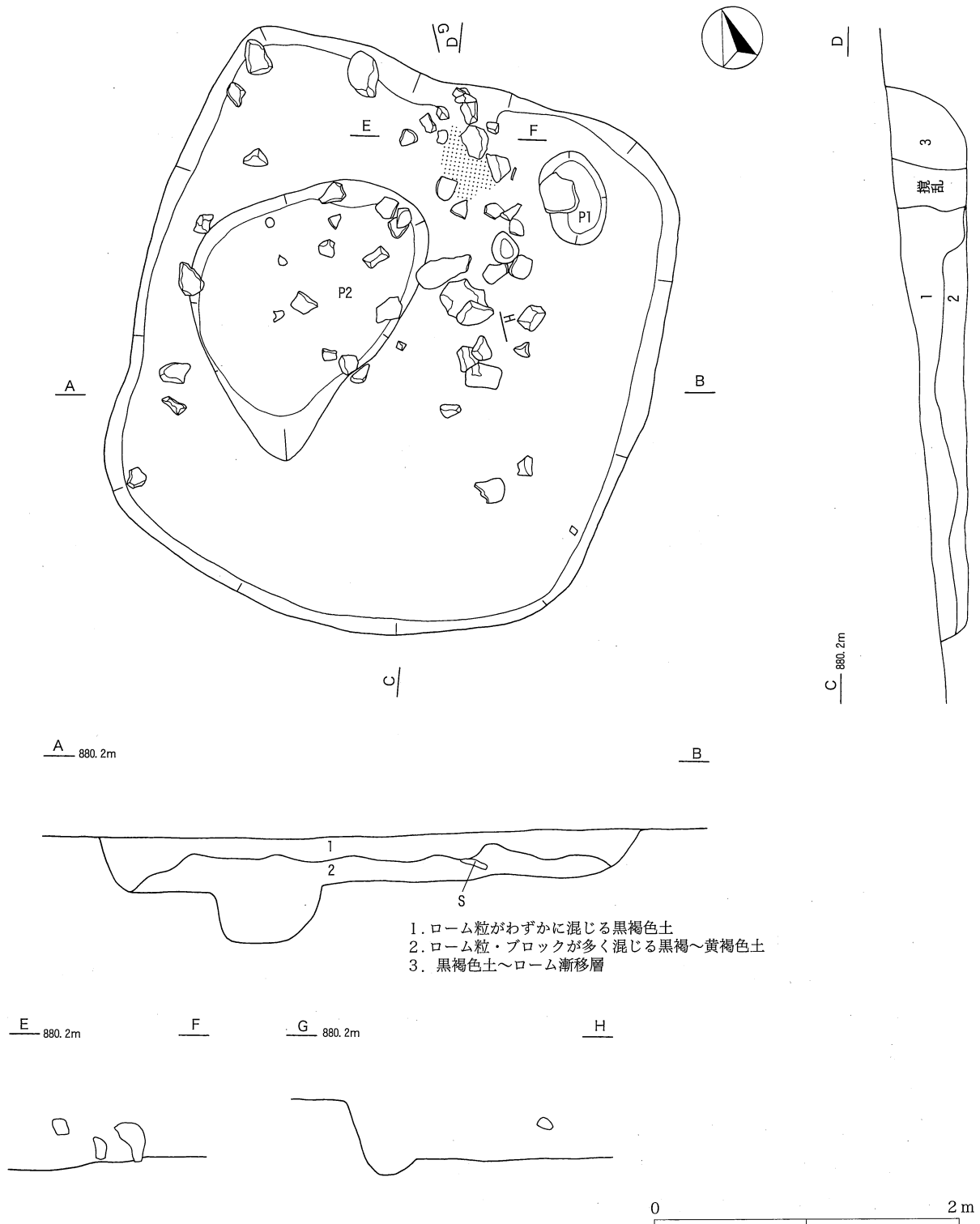
内外面に墨書がみられ、内面は「□」解読不明であるが梵字のようにもみえる。外面は2字で「大□」とみえ1字は解読不明であるが、「大田」と書かれているように思う。図示できなかったが土師器坏・碗の破片382点、土師器甕破片95点、須恵器大甕破片1点、灰釉陶器皿・碗の破片45点、緑釉陶器破片1点があり、緑釉陶器は小破片であるが想像を大きくすると壺の肩部と思われる。鉄製品第30図10は平根鋸で莖を欠損している。

第13号竪穴住居址（第31・32図、写真41）

第9号住居址の南方で検出した。黒色土に帯状の黒褐色土の落ち込みを認めたが、明確なプランを把握するまでには至らなかった。遺物が出土していたこともありサブトレンチを入れ、下層の調査を試みたところ、カマド石と土師器の発見があり住居址の埋没を確認した。

埋土は、直交する土層ベルトを残し観察した。上層はローム粒がわずかに混じる黒褐色土、下層はローム粒・ロームブロックが多く混じる黒褐色土から黄褐色土であるが、下層は床面と誤認したように多くのロームが混じる状態である。これは後記するがP2によるものと思われ、住居址の下層部分は廃絶後に埋め戻された可能性は高い。しかし、上層はレンズ状の堆積を示し自然埋没と考えたいものである。また、埋土中に拳大から人頭大の石も多くみられたが、カマド石と思われる大きなものは少なかった。

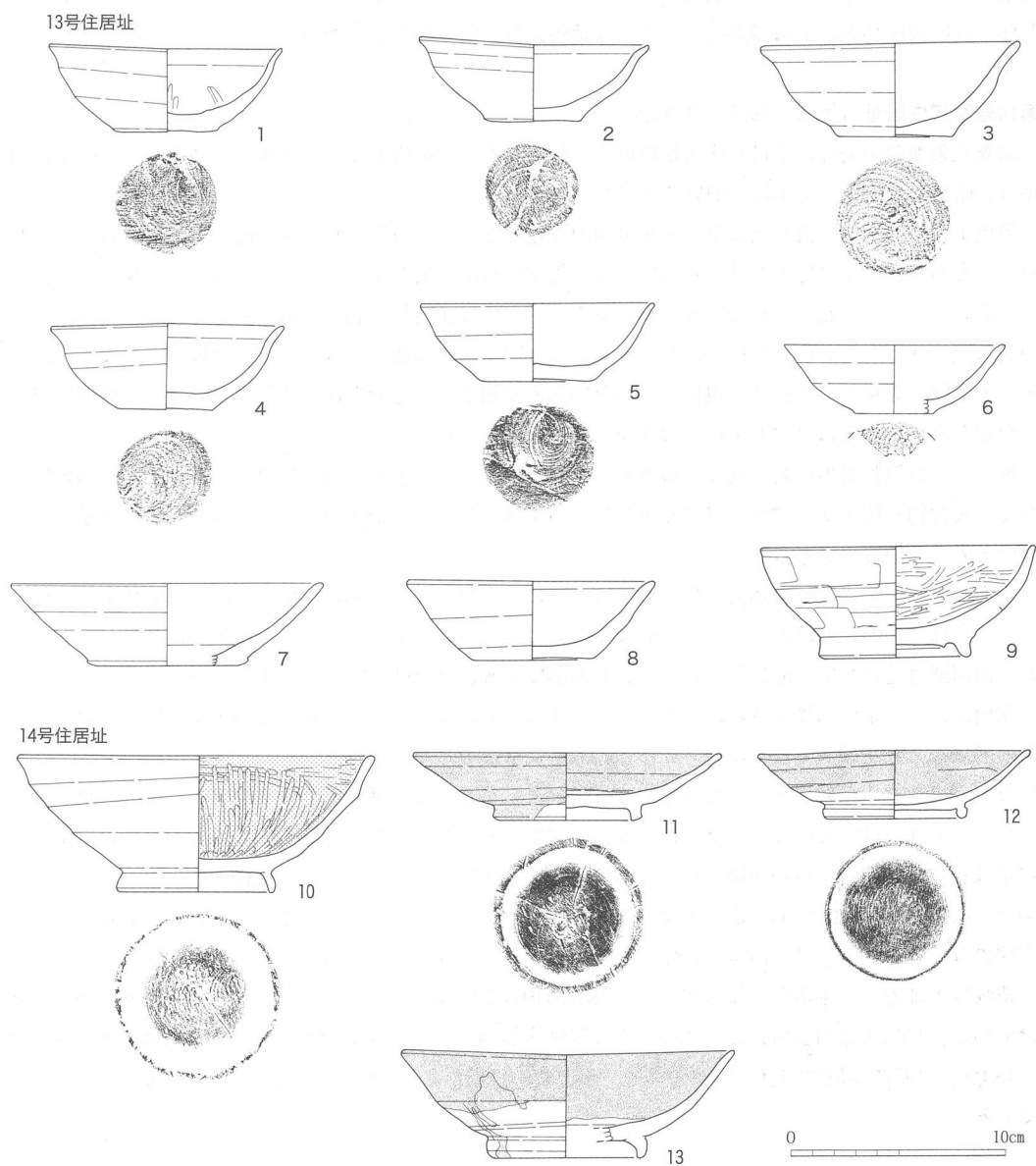
平面形は、341×365cmの不整隅丸方形を呈しているが、プラン検出に苦慮したこと同様に不明瞭な箇



第31図 第13号竪穴住居址実測図 (1:40)

所が多く、手さぐりによる調査であり確信がもてるものではなく、竪穴の原形はもっと整った隅丸方形であったように思われる。壁は、前記したように黒色土を掘り込んだもので不明瞭な箇所が多く良くない。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、北東隅で47cm、北西隅で58cm、南東隅で17cm、南西隅で24cmを計る。

床面は、ロームまで掘り込まれているが、東壁付近は硬く確りしており遺物も出土したが、北西隅、西壁、南壁付近は不明確で、周溝を検出するまでには至らなかった。カマド脇のP1は、平面62×40cm、深さ16cmと浅く遺物の出土はない。埋土は住居址と同じで廃絶時には開口していたことが理解できる。カマドとの位置関係からいわゆる灰溜めと呼ばれるものであろう。中ほど西方のP2は、平面185×155cm、深さ32cmを計る大きなもので、攪乱土で埋まるが、P2を掘る際に上げたと思われるロームが床面



第32図 第13・14号竪穴住居址出土土器実測図（1：3）

上でみられた。これは住居廃絶時もしくはそれほど時間が経過しない時に掘られ、埋め戻されたことが理解できるものである。

カマドは、石組み粘土カマドで北壁のほぼ中央に構築されていた。ほとんどが破壊され、右袖の一部と火床が残るだけである。袖石は埋め立てたもので、基部は粘土状のロームを貼り付け構築したようであるが、原形をとどめるものではなく詳しいことはわからない。火床に支脚石はなかったが、抜いたと思われる穴がある。

隣接する第9号住居址と本址の規模はほぼ同様に、廃棄パターンも極めて類似しており、強い関連がうかがわれる。しかし、この2軒だけがこのような様相を呈する理由は不明である。

遺物は土師器と灰釉陶器がある。第32図1～8の8点は土師器坏で、6と7は破片から図示し、3は炭素の多くは抜けているが内面黒色土器のようである。9は土師器碗である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片43点、土師器甕破片1点、灰釉陶器皿・碗の破片4点がある。

第14号竪穴住居址（第33・32図、写真42）

調査対象地の中央部、第11号住居址の東方に位置する。暗渠排水2本と重複していたが、この重複関係は、暗渠排水が新しく本址が古いことになる。

黒色土に黒褐色土が落ち込んでいるが色調の変化に乏しく、当初、わずかな焼土とカマド石が出土したこともあり、カマド付近だけが残る住居址を想定し検出作業をすすめたが、一向にそのプランが把握できない。カマドは北壁に構築された例が多く、カマドは住居址の北壁、斜面上部に作られている。との先入観。サブトレンチの役目をはたすと思われた暗渠排水の側壁でも住居床面は観察できなかったこと、本遺跡で発見した住居址の規模などの思い込みが相重なり把握を遅らせたように思う。時間を費やしたがどうにか西壁にカマドを持つ大きな住居址を検出した。

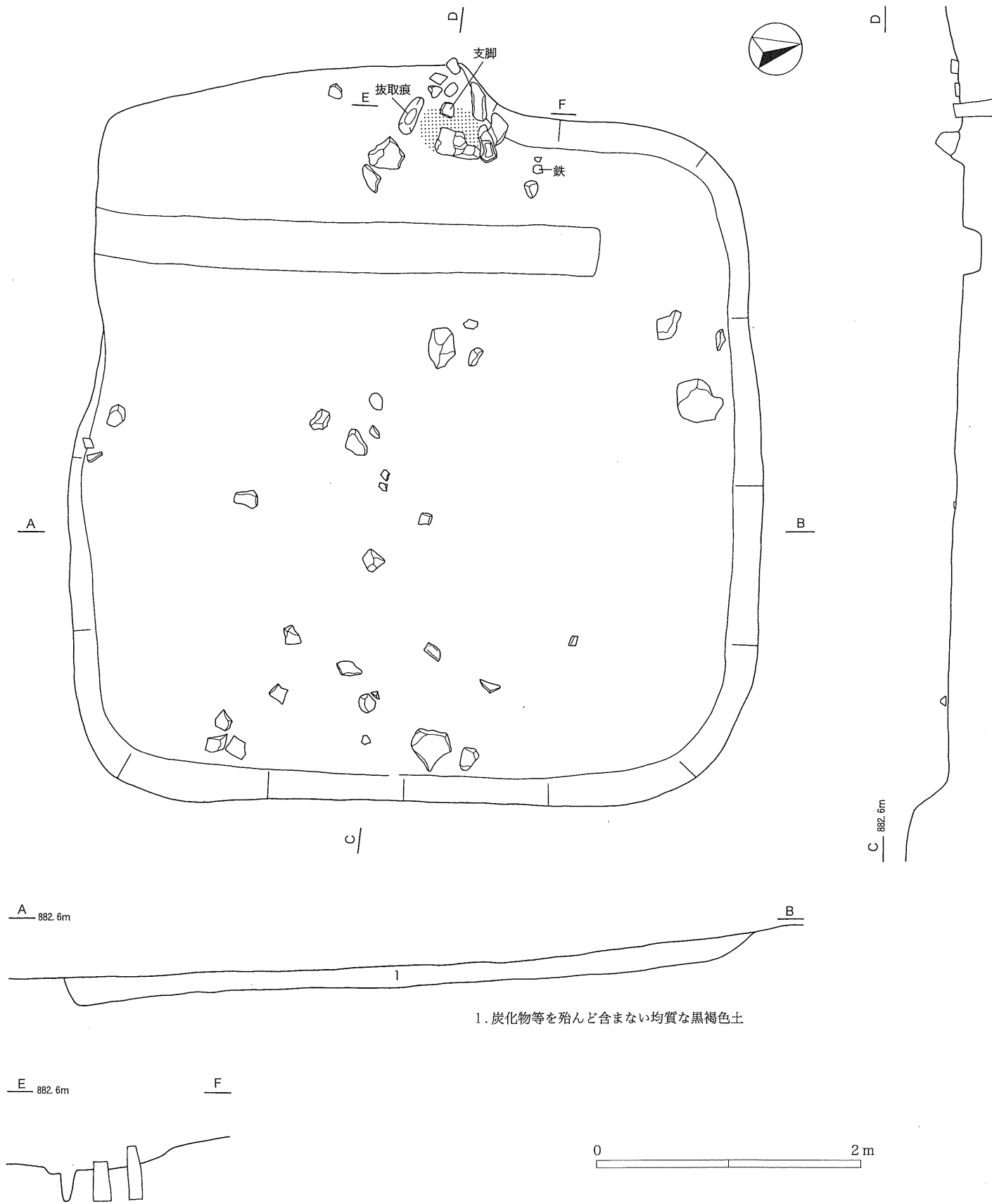
埋土は、自然傾斜の南北方向に土層ベルトを残し観察した。色調の変化に乏しく細分できる状態ではなく、炭化物と焼土がわずかに混じる黒褐色土の単層としたが、基本的にはレンズ状の堆積を示し自然埋没と考えたいものである。

平面形は、520×520cmの隅丸方形を呈する。壁は、黒色土を掘り込んでいたが、プラン検出に苦慮したこと同様で不明瞭な箇所が多くあまりよくない。傾斜地に構築されていたため壁の高さに違いがみられ、南西隅付近はすでに流失していたが、北西隅で33cm、北東隅で33cm、南東隅で58cmを計る。

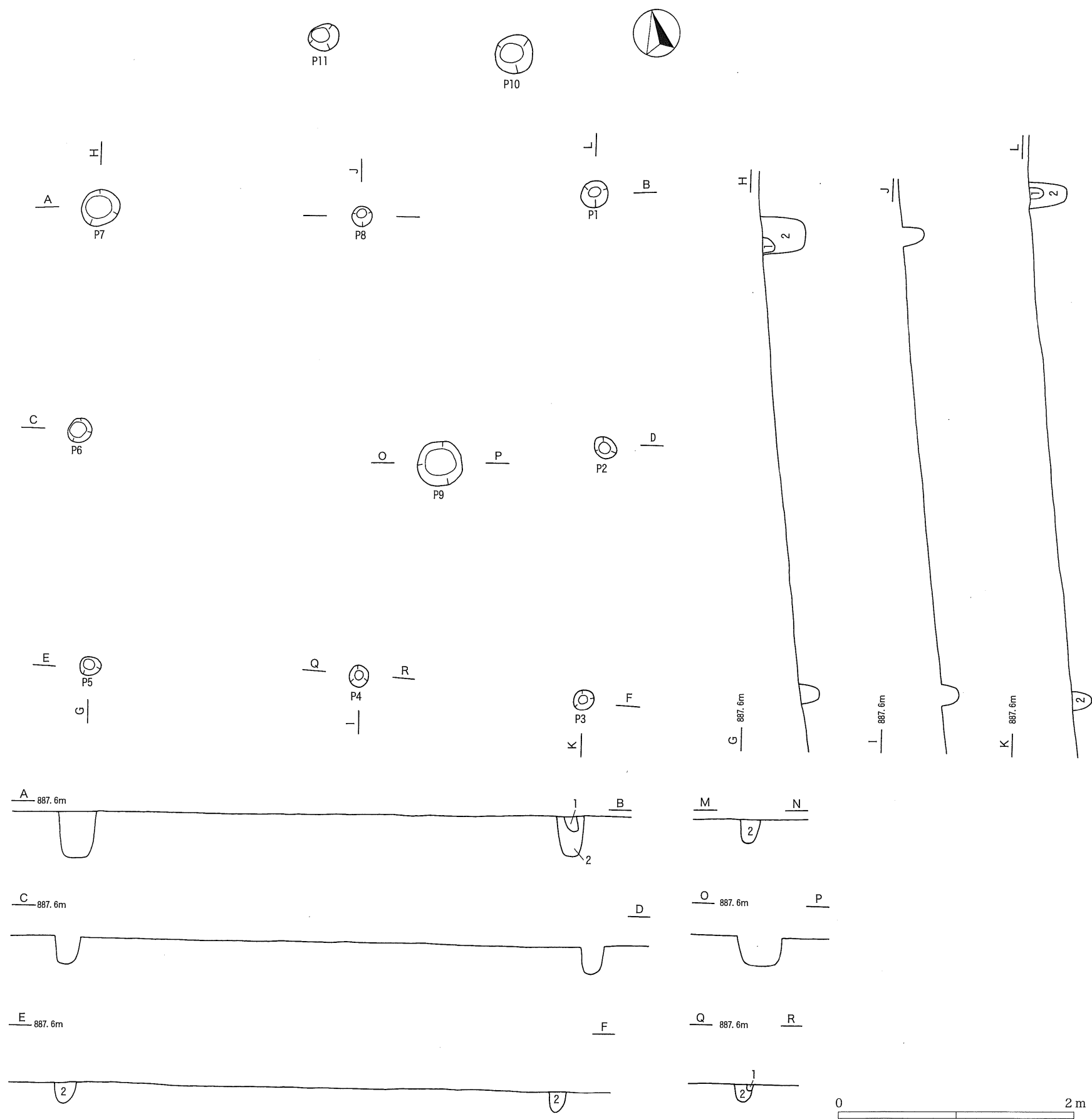
床面は、黒色土中に構築されたもので、わずかな調整床は認められるが、その多くは叩きしめたような痕跡はみられず軟弱で良くない。周溝や柱穴等は検出できなかった。

カマドは、石組み粘土カマドで西壁のほぼ中央に構築されているが、カマド自体やや壁外に出る構造である。天井石はすでになく、そのほとんどが破壊され右袖の一部と支脚石が残っただけである。左袖は石を抜き取った痕が明確に残っており、住居廃絶時点で破壊された可能性が高いようである。右袖は平板石を埋め立ててあるが、カマド基部は地山を切り出したものではなく、第13号住居址同様に粘土状のロームを貼り付けてあるが、原形をとどめておらず詳しいことはわからない。

遺物は土師器・灰釉陶器・鉄滓がある。第32図10は土師器碗の内面黒色土器であるが炭素の多くは抜けている。11は灰釉陶器皿、12と13の2点は灰釉陶器碗である。図示できなかったが土師器坏・碗の破片183点、土師器甕破片96点、灰釉陶器皿・碗の破片11点がある。鉄滓は2点あり重さ93.9g、155.9gである。



第33図 第14号竪穴住居址実測図 (1:40)



第34图 第1号掘建柱建物址实测图 (1:40)

(2)掘建柱建物址

第1号掘建柱建物址（第34図、写真43）

調査対象地東側の尾根肩部で検出した。第1号住居址の北東に位置し、住居址より高い所からの発見である。

平面は2間×2間（450×450cm）の側柱で方形を呈しているが、柱穴はP1が径23cm深さ40cm、P2が径19cm深さ24cm、P3が径17cm深さ16cm、P4が径17cm深さ31cm、P5が径19cm深さ18cm、P6が径20cm深さ23cm、P7が径32cm深さ39cm、P8が径17cm深さ20cmを計るが、規模が小さいものばかりである。

P9は径38cm深さ25cmを計り、側柱穴よりやや大きくなり性格は不明である。P10は径32cm深さ40cmと深くなるが側柱穴と同じ土で埋まっており、埋土のあり方から本址に付属するものと考えたいが性格は不明である。P11は径25cm深さ14cmと浅いものでやはり性格は不明である。

遺物の発見はない。

(3)小竪穴

小竪穴3（第35・36図、写真44・45）

調査対象地東側で第2号住居址の西方、第3号住居址の南東方で検出した。埋土は黒褐色土の単層で、近・現代に掘られた穴と誤認したほど検出は容易であった。

埋土は、短軸方向で観察したが、色調の変化に乏しく、ローム粒の大きさと含量で1層と2層に分けた。1層は小さなローム粒がわずかに混じる黒褐色土、2層はローム粒が混じる黒褐色土である。

平面形は、204×85cmの楕円形を呈する。壁は、ロームのしっかりしたものである。高さは東壁が高く37cm、北壁が35cm、南壁が29cm、西壁が26cmを計り、底面は平らである。

遺物の出土状態からみて墓壙であるが、骨は残っていなかった。副葬品は土師器坏2点、灰釉陶器碗と皿がそれぞれ1点、鉄製品1点がある。

第35図1・第36図1の土師器坏が、北壁下で小竪穴の底面にほぼ密着した状態で出土した。墨書土器で「有」とみえるが逆位であり、伏せた状態で書かれたものと思われる。残る3点と出土位置に違いがみられ、この1点だけが棺に納められていた可能性が高い。第35図2・第36図2の土師器坏、第35図3・第36図3の灰釉陶器碗、第35図4・第36図4の灰釉陶器皿の3点は、東壁から南壁下の壁際に並べられていたような状態で出土した。第35図2土師器坏の下層から刀子と思われる鉄製品が出土したが、欠損があるうえに腐食は著しい。これら4点は出土した高さがまちまちであり、棺外に置かれていたように思われる。

棺外と思われる土師器と灰釉陶器は、棺内の土師器よりも一回り大きく、置かれた位置も異なっていたが、どのような意味が隠されているのだろうか。棺内と考えた土師器は墨書土器であり、葬られた故人が生前使用していたものと考えると興味深い問題であるが、棺そのものの存在を立証することができないこともあり想像の域を出ない。他遺跡に目をむけると墓壙の発見はそれほど多くないが、確実に棺内への副葬が明らかにされたものはなく、その出土位置は埋土上位から中位に多いようである。

(4)遺構外出土遺物

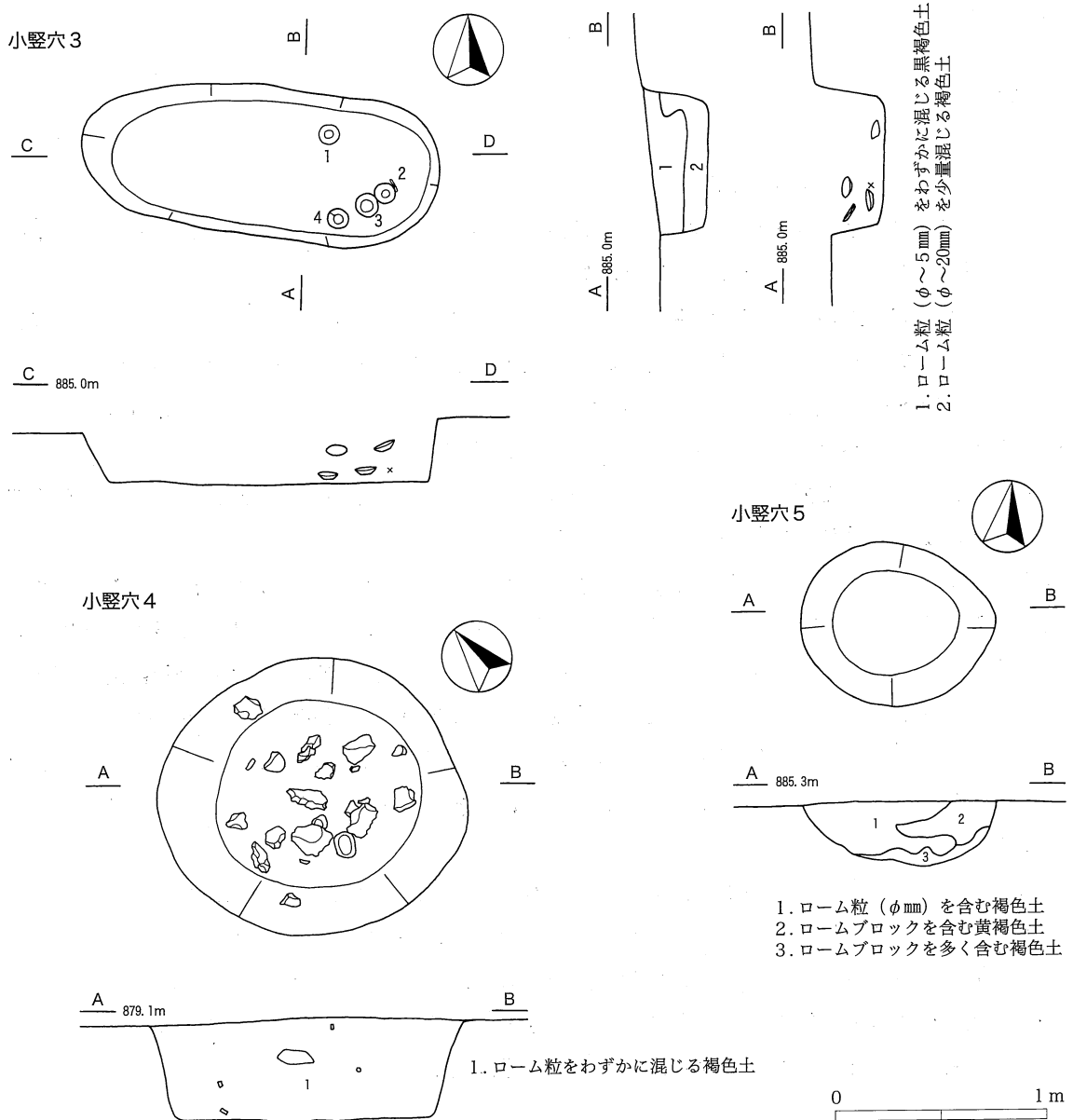
遺構外から土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器の出土があり、第36図6の土師器坏、7の土師器墨書土器破片、8の灰釉陶器皿、9～11の灰釉陶器碗の6点を図示した。7の墨書土器は現存部に「□□」と2字書かれているようであるが、その文字の多くは欠損しており解読不明である。図示できなかった破片は一覧表に出土地と出土数を出土遺物一覧表に示した。緑釉陶器は碗の口縁部破片である。

3 近現代・時代不詳

(1)小竪穴

小竪穴4 (第35・5図、写真46)

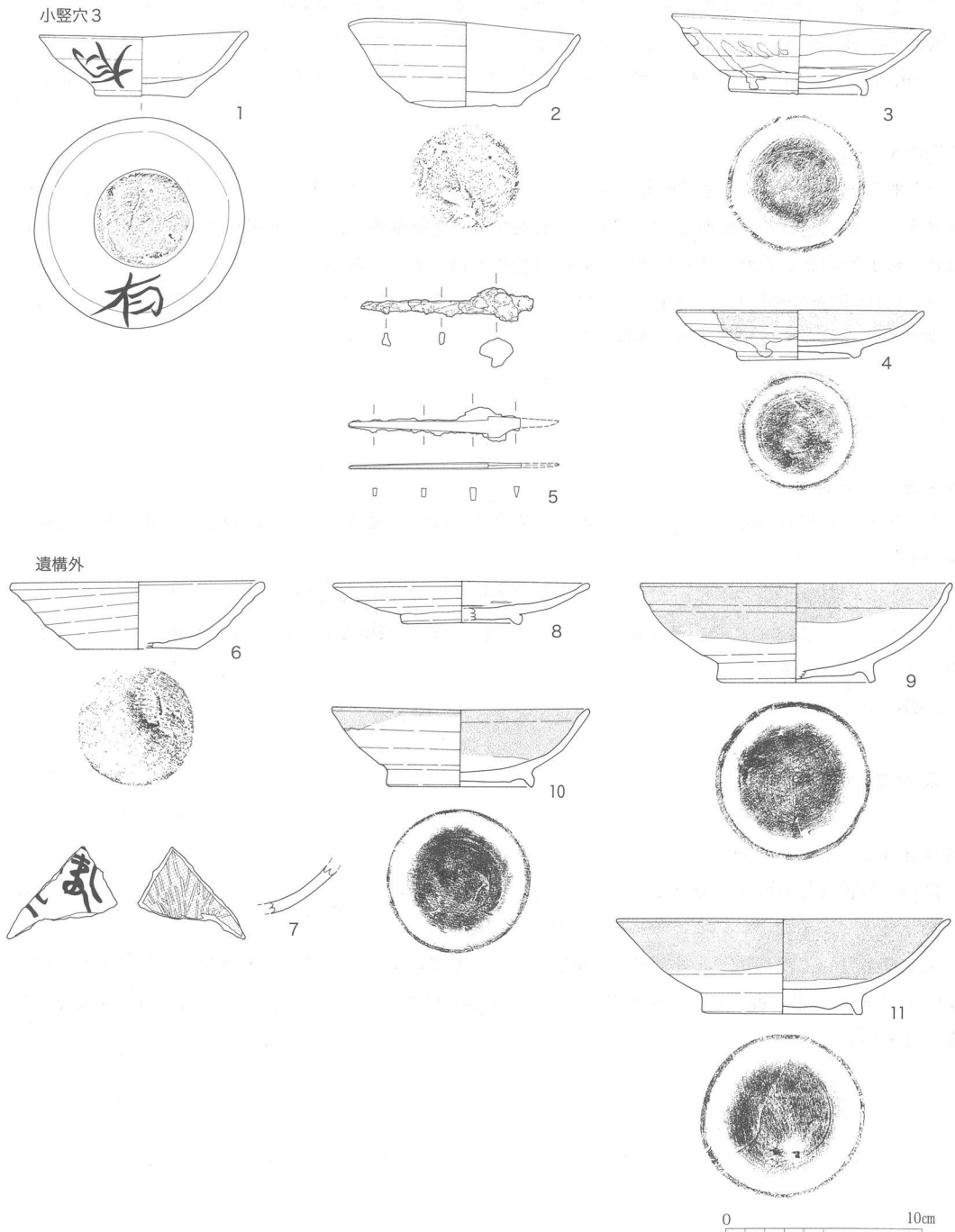
調査対象地西側におけるトレンチ調査南端部で、ロームに茶褐色土の落ち込みを認めた。周囲の精査



第35図 小竪穴3・4・5実測図 (1:40)

を進め、平面222×198cmを計る円形に近い楕円形の小竪穴を検出した。

埋土は、長軸方向で観察したが、色調の変化に乏しくローム粒がわずかに混じる茶褐色土の単層であるが、住居址よりは明るいもので帰属時期の違いを示しているものと思われる。埋土上層からは数多い人頭大の礫が出土したが、下層から底にかけてはなかった。壁はなだらかに落ち込み、底面はほぼ平らで、深い北側で57cmを計る。



第36図 小竪穴3・遺構外出土土器・鉄製品実測図（1：3）

遺物は、縄文時代早期土器破片6点、黒曜石の剥片44点、平安時代土師器坏等破片7点、土師器甕破片9点が出土し、時期を決定することはできなかった。

第5図1は比較的厚手の山形文土器で、小破片のため単位は明確でないが、縦位密接施文と思われる。胎土に金雲母・石英を含み、焼成は比較的良い。2・3は表裏縄文の口縁部破片で胎土に白砂粒がみられ焼成は普通である。4は少しだけ繊維を含んでいるようだが、硬くしまっている。表面の80%が剥落しているため、文様があるのか定かでない。図示していないが山形文土器の小破片2点が出土している。

黒曜石の剥片が多い点に注目できるが性格は不明である。隣接する比丘尼原遺跡においても、上層から礫が出土した小竪穴がみられ、時期は縄文時代中期であるがやはり性格は不明なものばかりである。

小竪穴5（第35図）

調査地の北西外れの新設道路部分で検出した。ここは尾根上の平坦部で、ロームにローム粒混じりの黒褐色土が落ち込むが不鮮明なものである。長軸方向の土層観察で、やや不明確であったが落ち込みが認められ小竪穴としたが、ロームマウンドの可能性が高いようである。

平面110×92cmの楕円形で、壁はだらだらと落ち込み、底面は船底状で、深さはで37cmを計る。遺物の出土はなく、帰属時期は不明である。

(2)タメ址

タメ址1（第12図）

第2号竪穴住居址の北寄りにすっぽりと掘り込まれた状態で重複するが、住居址の床面を掘り込み本址が新しい。

平面155×155cmを計る不整円形で、住居址検出時点では攪乱穴と誤認したように、埋土は攪乱土で埋め戻されていたようである。その多くはすでに後世の耕作で破壊され、住居址の床面から5～7cmが残っていただけである。

遺物の出土はない。

(3)暗渠排水

暗渠排水1・2（写真48）

第14号住居址と重複する暗渠排水2本と発見した。水位の高い所でしばしばみられるもので、帰属時期は近現代であるためその全長を確認する作業はしていない。

暗渠排水1・2はほぼ平行する状態で確認したが、暗渠排水1はその一部を断割り、暗渠排水2は第14号住居址の壁面で観察した。暗渠排水1・2とも写真でみるように、平板状の石と小石で構築されたものである。

V ま と め

本調査では、縄文時代・平安時代および近現代の遺物と遺構を発見したが、主体となる時期は平安時代で、竪穴住居址14軒、掘建柱建物址1棟、墓墳1基を数える集落址が露呈した。

当地方における良好な集落址の調査であり、検討しなければならない課題は多いが、報告書作成にあたって事実記載することもおぼつかない状況であり、現場で感じた一二を記しまとめとしたい。

集落址は尾根南斜面の東西方向に広がり、東端についてはトレンチ調査の結果、その全貌を把握できたものと思っている。西端については調査対象範囲の関係で明確にすることはできなかったが、遺跡は対象地区西に続いているようである。

発見した住居址の分布は、大きく2つのグループに分けることができそうである。それは、調査地区の東部から中央部に位置する第1号から第7号・第11号・第14号住居址の9軒から成る1群と、西端部に位置する第8号から第10号・第12号・第13号住居址の5軒の1群である。大きくみると、前者は尾根筋の東西方向に展開していたが、後者は尾根筋と交差する南北方向に並ぶもので、住居の占有地に大きな違いがみられた。当地方における平安時代の典型的な集落址は、尾根南斜面の日溜りに展開するうえに、住居址はほぼ等高線上に並ぶ傾向を示している。後者のように住居址が並ぶ集落址の発見は聞いていない。

集落内における道の在り方など検討課題を多く残しているが、掘建柱建物址1棟と墓墳1基の発見もあり、それらの配置状況からみて、14軒が同時に存在していたとは考えられないもので、数時期にわたって営まれた集落址で、集落の復原が可能な遺跡であることは確実のようである。

個々の住居址はその規模、カマドが構築された位置、支脚石の有無など様々な違いがみられたが、それらは単に形態差だけにとどまるものではないようである。

住居址は南向き斜面を占有地としていたことで北壁が高くなるが、カマドは機能面を含め構築が容易であったのか、それとも使い勝手によるところが大きかったのか、北壁に構築されている家が多くみられた。しかし、2例と少ないとはいえ壁の低い南東隅（第3号住居址）と西壁中央（第14号住居址）に構築された家があり、この事実は、カマド構築に際して掘り込んだ壁の高さはそれほど重要な要件ではなかったことを示しているようでもあり考えさせられた。また同時に、上屋構造も大きな問題となるが、柱穴と考えられる穴の発見はなく一層問題を複雑にしている。かろうじて第1号住居址で壁柱穴と思われるピットを発見したが、如何にせんこれだけでは上屋構造を考えることはできない。第8号住居址の南東隅と南西隅から出土した石を礎石と考えてみたがこれも類例はない。

カマドの構造もいくつかのタイプに分かれるが、大きな違いは支脚石の有無であろうか。平安時代後期には羽釜やそれに類似した甕が出現するが、これらの煮沸具は支脚石を必要とはしなかったように思われ、これら新器種の出現はカマドの変化を促したことは容易に考えることはできるが、その変化は一律に起こることではなく、本遺跡でも支脚石を伴うカマドが構築されていた住居址は古い傾向にあるといえる程度であった。

検出の折り住居の輪郭が明確なものほど確りした床であり、不明確なものは例外なく床は軟弱であった。この事実がどのような理由によるか考えてみた。輪郭が不明確な住居址は、言い換えるならば地山の土と埋まっていた土との違いが少ないためであり、輪郭が明確な住居址よりその使用期間が短かったことが考えられそうである。黒色土の床が多く、ロームなどを持ち込んだ調整床は少なく、床面を叩き

締め硬くする必用がなかったように思われるものばかりで、第11号住居址のように地山の礫の頭を削り、平坦な床面を作りだす気持ちは大きいですが、床は軟弱なままであった。硬い床を有する住居址は、長期間の使用によって生じた結果である可能性は高く、生活をしていくうえにおいて直接床面に接する機会が少なかったことも考えられ、敷物の存在も考慮しなければいけないようである。第11号住居址は、地山の礫の頭を削り、平坦な床面を作りだす気持ちは大きかったようであるが、床は軟弱のままで硬い床を必要としなかったことを物語っているようである。

安易ではあるが、床の硬い家は長期にわたり使用された家で、結果的には床は硬く締まり、埋没段階には地山と異なる土で埋まったことになる。

まとめることはできなかったが、遺跡はすでに工事で消滅し、失ったものは大きいがこの調査成果は平安時代研究における貴重な資料となろう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

参考文献

- 1974. 7 諏訪清陵高等学校地歴部考古班『土8 原村の考古学的調査 上』
- 1980. 3 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1985. 7 原村役場『原村誌 上巻』
- 1997. 3 長野県教育委員会「農業基盤整備事業に係る茅野市、原村内の分布調査 八ヶ岳西南麓縄文時代遺跡群分布調査」『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』
- 2000. 3 長野県教育委員会「農業基盤整備事業に係る分布調査 茅野市・原村 八ヶ岳西南麓縄文時代遺跡群分布調査」『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書 2』
- 2004. 3 富士見町教育委員会『坂平 八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』

表2 遺構一覧表

() 付け数値は現存値

図版番号	遺構名	時期	平面形	竈位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	備考
第10図	1号住居址	平安後期	隅丸方形	北壁	476.0	470.0	49.0	
第12図	2号住居址	平安後期	隅丸方形	北壁	391.0	356.0	15.0	
第13図	3号住居址	平安後期	隅丸長方形	東壁	425.0	354.0	46.0	
第14図	4号住居址	平安後期	隅丸方形	北壁	(400.0)	(200.0)	26.0	紡錘車
第15図	5号住居址	平安後期	隅丸方形	北壁	220.0	(160.0)	23.0	刀子
第16図	6号住居址	平安後期	隅丸長方形	北壁	602.0	506.0	81.0	鉄滓1, 518.7g
第20図	7号住居址	平安後期	隅丸方形	北壁	381.0	370.0	52.0	不明鉄製品
第22図	8号住居址	平安後期	隅丸方形	東壁	350.0	320.0	25.0	
第23図	9号住居址	平安後期	隅丸方形	北壁	368.0	345.0	34.0	鉄鏃2点
第26図	10号住居址	平安後期	隅丸長方形	北壁	420.0	330.0	54.0	
第27図	11号住居址	平安後期	隅丸長方形	北東隅	361.0	317.0	71.0	鉄鏃、不明鉄製品
第29図	12号住居址	平安後期	隅丸長方形	北壁	600.0	560.0	84.0	鉄鏃、緑釉陶器破片
第31図	13号住居址	平安後期	隅丸長方形	北壁	365.0	341.0	58.0	
第33図	14号住居址	平安後期	隅丸長方形	西壁	520.0	520.0	33.0	
第34図	1号掘建柱址	平安後期			450.0	450.0		
第35図	小竪穴3	平安後期	楕円形		204.0	85.0	37.0	墓塚 刀子
第35図	小竪穴4	時代不詳	円形		222.0	198.0	57.0	
第35図	小竪穴5	時代不詳	楕円形		110.0	92.0	26.0	ロームマウンド
	小竪穴6	縄文前期						掘り込み未確認
第12図	タメ址1	近～現代	不整円形		115.0	155.0	(7.0)	
	暗渠排水1	近～現代	溝状			30.0		一部調査
	暗渠排水2	近～現代	溝状			32.0		確認

表3 遺物一覧表

土器

() 付け数値は現存値、土師器破片=土師器坏・碗破片、灰釉陶器破片=灰釉陶器皿・碗破片

図版番号	出土地点	土器名・状態	時期	口径cm	底径cm	器高cm	備考
第5図1	小竪穴4	深鉢 破片	縄文早期				
第5図2	小竪穴4	深鉢 破片	縄文早期				
第5図3	小竪穴4	深鉢 破片	縄文早期				
第5図4	小竪穴4	深鉢 破片	縄文早期				
	小竪穴4	土師器破片 7点	平安後期				
	小竪穴4	土師器甕破片 9点	平安後期				
	小竪穴4	深鉢 破片 2点	縄文				

第5図5	小竪穴6	深鉢 破片	縄文前期				破片総数55点
第6図1	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図2	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図3	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図4	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図5	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図6	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図7	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図8	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				G-15
第6図9	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図10	遺構外	深鉢 破片	縄文早期				ZZZ
第6図11	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				8号住居址 混入
第6図12	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				F-18
第6図13	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図14	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図15	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図16	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図17	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図18	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図19	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図20	遺構外	深鉢 破片	縄文前期				ZZZ
第6図21	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図22	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				E-14
第7図23	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				E-14
第7図24	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図25	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図26	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				E-18
第7図27	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				F-15
第7図28	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図29	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図30	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図31	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				F-16
第7図32	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図33	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図34	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				G-15
第7図35	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				G-14
第7図36	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ

第7図37	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図38	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図39	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図40	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				7号住居址 混入
第7図41	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図42	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				ZZZ
第7図43	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				6号住居址 混入
第7図44	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				8号住居址 混入
第7図45	遺構外	深鉢 破片	縄文中期				8号住居址 混入
第7図46	遺構外	深鉢 破片	縄文後期				5号住居址 混入
第7図47	遺構外	深鉢 破片	縄文後期				6号住居址 混入
第7図48	遺構外	深鉢 破片	縄文後期				ZZZ
第7図49	遺構外	深鉢 破片	縄文晩期				ZZZ
	遺構外	深鉢 破片 39点	縄文				
第11図1	1号住居址	土師器坏	平安後期	(4.3)	(5.7)	(1.7)	
第11図2	1号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	13.5	7.0	4.4	
	1号住居址	土師器破片 86点	平安後期				
	1号住居址	灰釉陶器破片 9点	平安後期				
第11図3	2号住居址	土師器坏	平安後期	(5.6)	(5.5)	(3.2)	図上復原
第11図4	2号住居址	土師器坏	平安後期	6.1		(3.5)	図上復原
	2号住居址	土師器破片 9点	平安後期				
	2号住居址	灰釉陶器破片 1点	平安後期				
第11図5	3号住居址	土師器坏	平安後期	(11.0)	5.8	4.3	
第11図6	3号住居址	土師器坏	平安後期	10.7	5.8	4.0	
第11図7	3号住居址	土師器坏	平安後期	(11.0)	5.7	4.0	
第11図8	3号住居址	土師器坏	平安後期	11.4	5.0	3.9	
第11図9	3号住居址	土師器坏	平安後期	10.3	4.6	4.2	
第11図10	3号住居址	土師器碗	平安後期	14.0	7.0	7.8	内面黒色土器
第11図11	3号住居址	土師器碗	平安後期	(13.5)	7.3	(5.4)	
第11図12	3号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	12.5	6.8	4.4	
第11図13	3号住居址	土師器小形甕	平安後期	(11.9)	5.7	8.1	
第11図14	3号住居址	土師器甕	平安後期	(6.8)	(7.8)	(3.5)	図上復原
	3号住居址	土師器破片 83点	平安後期				
	3号住居址	灰釉陶器破片 2点	平安後期				
第17図1	4号住居址	土師器坏	平安後期	10.5	5.5	3.9	
第17図2	4号住居址	土師器坏	平安後期	(11.1)	4.1	3.8	
第17図3	4号住居址	土師器碗	平安後期	(6.6)	(6.6)	(4.9)	図上復原

第17図5	4号住居址	灰釉陶器皿	平安後期	15.3	7.4	3.3	硯転用
	4号住居址	土師器破片 220点	平安後期				
	4号住居址	土師器甕破片 2点	平安後期				
	4号住居址	灰釉陶器破片 12点	平安後期				
第17図7	5号住居址	灰釉陶器甕	平安後期	9.7		(3.9)	図上復原
第17図8	5号住居址	土師器甕	平安後期	20.6	9.6	26.0	輪積痕あり
	5号住居址	土師器破片 5点	平安後期				
	5号住居址	土師器甕破片 4点	平安後期				
	5号住居址	灰釉陶器破片 4点	平安後期				
第17図10	6号住居址	土師器坏	平安後期	(12.4)	(6.7)	2.5	
第17図11	6号住居址	土師器坏	平安後期	(12.3)	(4.8)	3.6	
第17図12	6号住居址	土師器坏	平安後期	(12.3)	(6.2)	3.2	内面黒色土器?
第17図13	6号住居址	土師器坏	平安後期	11.3	5.0	3.7	
第17図14	6号住居址	土師器坏	平安後期	(11.6)	(5.5)	(3.6)	7号住居址と接合
第17図15	6号住居址	土師器坏	平安後期	(12.4)	(6.0)	3.3	
第17図16	6号住居址	土師器坏	平安後期	11.4	5.6	4.5	
第17図17	6号住居址	土師器坏	平安後期	11.3	5.1	3.9	
第17図18	6号住居址	土師器坏	平安後期	11.7	5.0	4.0	
第17図19	6号住居址	土師器坏	平安後期	(11.4)	5.0	3.9	
第18図20	6号住居址	土師器坏	平安後期	(11.2)	5.8	3.7	
第18図21	6号住居址	土師器坏	平安後期	10.2	4.6	4.2	内面黒色土器?
第18図22	6号住居址	土師器坏	平安後期	14.4	6.6	4.9	
第18図23	6号住居址	土師器坏	平安後期	14.3	5.3	5.5	
第18図24	6号住居址	土師器坏	平安後期	(15.1)	6.5	5.4	内面黒色土器
第18図25	6号住居址	土師器坏	平安後期	(12.1)	6.2	(2.9)	内面黒色土器?
第18図26	6号住居址	土師器碗	平安後期	(13.9)	8.2	5.1	
第18図27	6号住居址	土師器碗	平安後期	(14.5)	7.7	6.4	
第18図28	6号住居址	土師器碗	平安後期	(14.2)	(7.7)	(6.3)	内面黒色土器
第18図29	6号住居址	土師器碗	平安後期	(14.2)	(8.7)	6.1	内面黒色土器
第18図30	6号住居址	土師器碗	平安後期	(14.6)	(7.9)	7.0	内面黒色土器
第18図31	6号住居址	土師器碗	平安後期	15.4	(7.7)	(7.8)	内面黒色土器
第18図32	6号住居址	土師器碗	平安後期	(11.7)	(6.7)	4.7	内面黒色土器 暗文
第18図33	6号住居址	土師器碗	平安後期	10.9	7.0	4.7	内面黒色土器 暗文
第18図34	6号住居址	土師器碗	平安後期	15.3	(8.5)	7.6	内面黒色土器 暗文
第19図35	6号住居址	土師器碗	平安後期	15.3	(7.0)	(6.6)	内面黒色土器 暗文
第19図36	6号住居址	土師器坏 破片	平安後期				墨書「千」?
第19図37	6号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	(15.6)	(7.8)	4.4	

第19図38	6号住居址	土師器小形甕	平安後期	(9.9)	(5.8)	8.4	
第19図39	6号住居址	土師器小形甕	平安後期	12.3	7.6	12.6	
	6号住居址	土師器破片 1,726点	平安後期				
	6号住居址	土師器甕破片 71点	平安後期				
	6号住居址	灰釉陶器破片 33点	平安後期				
第21図1	7号住居址	土師器坏	平安後期	(10.7)	5.4	3.6	
第21図2	7号住居址	土師器坏	平安後期	11.7	4.9	4.1	
第21図3	7号住居址	土師器坏	平安後期	(10.9)	5.3	4.8	
第21図4	7号住居址	土師器坏	平安後期	(13.1)	5.5	4.4	
第21図5	7号住居址	土師器碗	平安後期	(12.4)	5.8	5.3	
第21図6	7号住居址	土師器碗	平安後期	(12.8)	(7.3)	5.5	
第21図7	7号住居址	土師器碗	平安後期		(6.6)	(3.3)	内面黒色土器 暗文
第21図8	7号住居址	灰釉陶器皿	平安後期	12.9	6.0	2.3	
第21図9	7号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	13.1	6.1	4.4	
第21図10	7号住居址	土師器羽釜	平安後期	22.2		(17.8)	
第21図11	7号住居址	土師器甕 破片	平安後期				墨書「ら」?
	7号住居址	土師器破片 62点	平安後期				
	7号住居址	土師器甕破片 11点	平安後期				
	7号住居址	灰釉陶器破片 4点	平安後期				
第24図1	8号住居址	土師器坏	平安後期	(11.3)	5.0	3.3	
第24図2	8号住居址	土師器碗	平安後期	(14.0)	(8.0)	5.7	
第24図3	8号住居址	土師器小形甕	平安後期	5.6		(8.1)	図上復原
第24図4	8号住居址	土師器甕	平安後期	29.6		(20.4)	
	8号住居址	土師器破片 53点	平安後期				
	8号住居址	土師器甕破片 14点	平安後期				
	8号住居址	灰釉陶器破片 1点	平安後期				
第24図5	9号住居址	土師器坏	平安後期	(12.0)	(5.2)	4.2	
第24図6	9号住居址	土師器坏	平安後期	(13.6)		(4.0)	墨書「太」?
第24図7	9号住居址	土師器碗	平安後期	(13.7)	(8.8)	(5.8)	
第24図8	9号住居址	土師器碗	平安後期	(6.3)	(7.0)	(5.1)	
第24図9	9号住居址	土師器碗	平安後期	(13.5)	(7.6)	6.0	
第24図10	9号住居址	土師器碗	平安後期	13.3	(7.3)	(5.4)	
第24図11	9号住居址	土師器碗	平安後期	(16.2)	(7.0)	(6.4)	内面黒色土器 暗文
第24図12	9号住居址	土師器碗	平安後期	(16.2)	(7.7)	(6.7)	内面黒色土器 暗文
第25図13	9号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	15.0	7.2	5.1	
第25図14	9号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	(16.6)	(8.3)	5.4	11号住居址と接合
	9号住居址	土師器破片 102点	平安後期				

	9号住居址	土師器甕破片 1点	平安後期				
	9号住居址	灰釉陶器破片 1点	平安後期				
第25図1	10号住居址	土師器坏	平安後期	12.4	6.7	4.0	図上復原
第25図2	10号住居址	土師器碗	平安後期		(6.2)	(2.7)	内面黑色土器 暗文
第25図3	10号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	(14.0)	7.2	4.2	
	10号住居址	土師器破片 86点	平安後期				
	10号住居址	須恵器壺破片 6点	平安後期				同個体
	10号住居址	灰釉陶器破片 1点	平安後期				
第28図1	11号住居址	土師器坏	平安後期	11.5	4.8	3.4	
第28図2	11号住居址	土師器坏	平安後期	(11.3)	(5.6)	3.6	
第28図3	11号住居址	土師器坏	平安後期	(12.1)	(6.7)	(2.9)	
第28図4	11号住居址	土師器坏	平安後期	(10.9)	(6.5)	(3.1)	
第28図5	11号住居址	土師器坏	平安後期	11.0	3.5	5.7	墨書「□」
第28図6	11号住居址	土師器坏	平安後期	12.1	3.4	5.5	墨書「□」
第28図7	11号住居址	土師器碗	平安後期	(15.0)	7.6	6.4	内面黑色土器
第28図8	11号住居址	土師器碗	平安後期	13.2	(5.1)	(6.8)	内面黑色土器
第28図9	11号住居址	土師器碗	平安後期	(13.9)	(6.2)	(5.7)	内面黑色土器
第28図10	11号住居址	灰釉陶器皿	平安後期	(14.4)	(6.4)	2.9	
第28図11	11号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	13.2	(6.5)	(4.1)	
第28図12	11号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	(13.1)	(6.2)	3.7	
第28図13	11号住居址	土師器小形甕	平安後期	6.9		9.6	図上復原
第28図14	11号住居址	土師器小形甕	平安後期	(12.1)	(7.2)	(11.8)	
	11号住居址	土師器破片 623点	平安後期				
	11号住居址	土師器甕破片 67点	平安後期				
	11号住居址	灰釉陶器破片 22点	平安後期				
第30図1	12号住居址	土師器坏	平安後期	(11.5)	(5.2)	3.1	
第30図2	12号住居址	土師器坏	平安後期	(11.2)	5.4	3.6	
第30図3	12号住居址	土師器坏	平安後期	11.3	(5.4)	4.0	
第30図4	12号住居址	土師器坏	平安後期	11.2	4.4	4.0	内面黑色土器？
第30図5	12号住居址	土師器坏	平安後期	(11.6)	(5.1)	3.7	
第30図6	12号住居址	土師器碗	平安後期	(13.6)	(7.2)	5.7	内面黑色土器？
第30図7	12号住居址	土師器碗	平安後期	(15.4)	(6.7)	(5.0)	内面黑色土器
第30図8	12号住居址	土師器碗	平安後期	(15.2)	(6.2)	(5.8)	内面黑色土器？ 暗文
第30図9	12号住居址	灰釉陶器皿破片	平安後期		7.0	(1.1)	墨書 内「□」、 外「大田」？
	12号住居址	土師器破片 382点	平安後期				

	12号住居址	土師器甕破片 95点	平安後期				
	12号住居址	須惠器破片 1点	平安後期				
	12号住居址	灰釉陶器破片 45点	平安後期				
	12号住居址	緑釉陶器破片 1点	平安後期				
第32図1	13号住居址	土師器坏	平安後期	10.7	4.8	4.2	
第32図2	13号住居址	土師器坏	平安後期	10.7	4.6	3.9	
第32図3	13号住居址	土師器坏	平安後期	12.0	5.4	4.4	内面黒色土器？
第32図4	13号住居址	土師器坏	平安後期	(10.6)	4.5	4.1	
第32図5	13号住居址	土師器坏	平安後期	(11.0)	(5.3)	3.9	
第32図6	13号住居址	土師器坏	平安後期	10.4	(3.7)	(3.2)	図上復原
第32図7	13号住居址	土師器坏	平安後期	14.6	(7.5)	3.8	図上復原
第32図8	13号住居址	土師器坏	平安後期	(11.3)	(5.7)	(3.7)	
第32図9	13号住居址	土師器碗	平安後期	(12.8)	(7.1)	(5.3)	
	13号住居址	土師器破片 43点	平安後期				
	13号住居址	土師器甕破片 1点	平安後期				
	13号住居址	灰釉陶器破片 4点	平安後期				
第32図10	14号住居址	土師器碗	平安後期	(16.7)	7.4	6.4	内面黒色土器
第32図11	14号住居址	灰釉陶器皿	平安後期	(14.0)	(7.0)	3.1	
第32図12	14号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	(12.6)	6.7	3.1	
第32図13	14号住居址	灰釉陶器碗	平安後期	(15.8)	(7.5)	5.3	
	14号住居址	土師器破片 183点	平安後期				
	14号住居址	土師器甕破片 96点	平安後期				
	14号住居址	灰釉陶器破片 11点	平安後期				
第36図1	小豎穴3	土師器坏	平安後期	10.8	4.8	3.5	墨書「有」
第36図2	小豎穴3	土師器坏	平安後期	12.0	5.0	4.6	
第36図3	小豎穴3	灰釉陶器碗	平安後期	13.2	7.0	3.9	
第36図4	小豎穴3	灰釉陶器皿	平安後期	12.7	6.4	2.6	
	小豎穴4	土師器破片 7点	平安後期				
	小豎穴4	土師器甕破片 9点	平安後期				
第36図6	遺構外	土師器坏	平安後期	(12.7)	(6.1)	3.5	G-16
第36図7	遺構外	土師器坏破片	平安後期				内面黒色土器 墨書「□□」、G-14
第36図8	遺構外	灰釉陶器皿	平安後期	(13.0)	(6.2)	2.1	Z Z Z
第36図9	遺構外	灰釉陶器碗	平安後期	(15.6)	(8.1)	5.1	G-14
第36図10	遺構外	灰釉陶器碗	平安後期	(13.2)	(7.5)	3.9	F-12
第36図11	遺構外	灰釉陶器碗	平安後期	(16.4)	(8.2)	4.8	F-12
	遺構外	土師器甕破片 1点	平安後期				D-16

	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			E-13
	遺構外	灰釉陶器破片	1点	平安後期			E-13
	遺構外	土師器破片	3点	平安後期			E-15
	遺構外	土師器破片	6点	平安後期			E-16
	遺構外	土師器甕破片	2点	平安後期			E-16
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			E-17
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			E-18
	遺構外	土師器破片	3点	平安後期			F-12
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			F-12
	遺構外	灰釉陶器破片	1点	平安後期			F-12
	遺構外	土師器破片	4点	平安後期			F-13
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			F-13
	遺構外	灰釉陶器破片	1点	平安後期			F-13
	遺構外	土師器破片	1点	平安後期			F-14
	遺構外	土師器破片	20点	平安後期			F-15
	遺構外	土師器甕破片	12点	平安後期			F-15
	遺構外	灰釉陶器破片	3点	平安後期			F-15
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			F-17
	遺構外	土師器破片	8点	平安後期			F-18
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			F-18
	遺構外	土師器破片	28点	平安後期			G-13
	遺構外	土師器甕破片	4点	平安後期			G-13
	遺構外	土師器破片	64点	平安後期			G-14
	遺構外	土師器甕破片	9点	平安後期			G-14
	遺構外	灰釉陶器破片	9点	平安後期			G-14
	遺構外	土師器破片	5点	平安後期			G-15
	遺構外	土師器甕破片	2点	平安後期			G-15
	遺構外	土師器破片	17点	平安後期			G-17
	遺構外	土師器甕破片	1点	平安後期			G-17
	遺構外	灰釉陶器破片	1点	平安後期			G-17
	遺構外	土師器破片	1点	平安後期			G-18
	遺構外	土師器破片	298点	平安後期			ZZZ
	遺構外	土師器甕破片	16点	平安後期			ZZZ
	遺構外	須惠器破片	1点	平安後期			ZZZ
	遺構外	灰釉陶器破片	21点	平安後期			ZZZ
	遺構外	緑釉陶器碗破片	1点	平安後期			ZZZ
	遺構外	陶器破片	1点				9号住居址 混入

	遺構外	陶器破片	1点					11号住居址 混入
	遺構外	陶器破片	1点					12号住居址 混入

石器

() 付け数値は現存値

図版番号	出土地点	石器名	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	石 材	備 考
	小竪穴 4	剥片 44点					黒曜石	
第 8 図 1	遺構外	石鏃	1.3	(1.2)	0.3	(0.2)	黒曜石	
第 8 図 2	遺構外	石鏃	(1.5)	1.6	0.3	0.7	黒曜石	4号住居址 混入
第 8 図 3	遺構外	石鏃	(2.8)	1.8	0.4	(1.3)	黒曜石	
第 8 図 4	遺構外	石鏃?	(2.4)	(1.9)	0.6	(1.4)	黒曜石	11号住居址 混入
第 8 図 5	遺構外	スクレーパー	2.2	1.6	0.8	1.4	黒曜石	
第 8 図 6	遺構外	石匙	3.9	5.8	0.7	15.4	チャート	
第 8 図 7	遺構外	石匙	(4.6)	(3.2)	0.7	(12.0)	輝緑凝灰岩	縦形刃部欠
第 8 図 8	遺構外	打製石斧	(8.1)	3.6	1.9	50.0	結晶片岩	刃部欠
第 8 図 9	遺構外	打製石斧	(6.5)	(3.5)	(1.2)	(22.2)	結晶片岩	刃部欠
第 8 図10	遺構外	打製石斧	(6.4)	(2.8)	1.1	(22.1)	結晶片岩	刃部欠、6号住居址混入
第 8 図11	遺構外	打製石斧	(8.1)	3.7	3.1	97.2	輝緑凝灰岩	刃部欠
第 8 図12	遺構外	打製石斧	(8.7)	4.3	1.6	(61.4)	硬砂岩	刃部欠
第 8 図13	遺構外	打製石斧	(9.8)	5.8	2.1	(142.2)	結晶片岩	基部欠11号住居址混入
第 8 図14	遺構外	打製石斧	(8.5)	5.0	(1.1)	(55.3)	硬砂岩	基部欠
第 8 図15	遺構外	打製石斧	(7.2)	4.9	(1.9)	(93.2)	結晶片岩	基部欠14号住居址混入
第 8 図16	遺構外	横刃形石器	6.1	7.8	2.0	101.0	硬砂岩	
第 8 図17	遺構外	横刃形石器	7.1	10.4	1.6	110.9	硬砂岩	
第 9 図18	遺構外	磨石	(8.5)	(7.5)	(3.0)	(189.3)	砂岩	乳棒状石斧破損?
第 9 図19	遺構外	凹石	9.2	7.3	4.7	306.1	安山岩	
第 9 図20	遺構外	磨石	(11.3)	8.3	4.3	530.0	安山岩	
	遺構外	原石 1点						
	遺構外	剥片 111点					黒曜石	
	遺構外	剥片 26点						
第21図20	7号住居址	砥石	(11.1)	3.6	2.6	157.5	砂岩	

鉄製品

() 付け数値は現存値

図版番号	出土地点	鉄製品名	時 期	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	備 考
第17図 6	4号住居址	紡錘車	平安後期		5.2	1.1	(27.6)	
第17図 9	5号住居址	刀子	平安後期	(6.1)	1.0	0.5	(3.4)	刃部欠損

	7号住居址	不明	平安後期	3.2	2.3	0.8	6.3	板状 破損品
第25図15	9号住居址	鉄鏃	平安後期	14.2	1.8	1.1	20.0	尖根鏃
第25図16	9号住居址	鉄鏃	平安後期	(7.5)	4.6	0.4	(23.8)	雁又鏃莖欠損
第28図15	11号住居址	鉄鏃	平安後期	(5.7)	1.8	0.3	(7.2)	尖根鏃莖欠損
	11号住居址	不明	平安後期	6.2	2.1	1.9	14.1	
第30図10	12号住居址	鉄鏃	平安後期	(8.5)	3.4	1.1	(17.9)	平根鏃莖欠損
第36図5	小竪穴3	刀子	平安後期	(8.7)	1.8	1.5	(7.5)	欠損有

鉄滓

図版番号	出土地点	鉄製品名	時 期	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	備 考
	6号住居址	鉄滓	平安後期	3.4	1.5	1.0	4.7	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	7.2	6.2	3.6	101.3	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	7.4	5.8	4.0	179.6	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	7.3	6.7	3.5	206.5	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	6.5	3.7	1.9	44.4	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	5.6	3.5	2.0	20.5	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	4.9	3.2	1.7	15.3	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	3.5	3.2	2.8	19.9	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	3.7	2.8	2.2	14.2	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	3.0	1.8	1.1	3.9	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	2.0	1.6	1.4	3.2	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	2.3	1.9	1.9	5.3	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	1.4	0.8	0.8	1.1	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	8.2	6.2	4.2	155.0	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	2.8	2.4	1.8	10.0	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	10.2	7.1	4.0	382.9	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	9.5	7.0	2.3	163.8	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	6.7	4.3	3.8	140.5	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	7.0	4.5	3.0	39.3	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	3.5	2.2	1.2	4.5	
	6号住居址	鉄滓	平安後期	2.0	1.9	1.5	2.8	
	10号住居址	鉄滓	平安後期	6.5	5.6	2.8	136.4	
	11号住居址	鉄滓	平安後期	9.0	7.0	4.0	214.0	
	11号住居址	鉄滓	平安後期	3.2	2.8	2.4	24.8	
	11号住居址	鉄滓	平安後期	3.3	2.8	2.0	15.4	
	14号住居址	鉄滓	平安後期	5.5	5.2	2.6	93.9	
	14号住居址	鉄滓	平安後期	7.5	7.4	3.1	155.9	

写真1
遺跡遠景
南から



写真2
遺跡遠景
平成13年度トレンチ調査
南から



写真3
遺跡遠景
表土剥ぎ後
東南から



写真4
遺跡遠景
表土剥ぎ後
東南から



写真5
遺跡遠景
表土剥ぎ後
西から

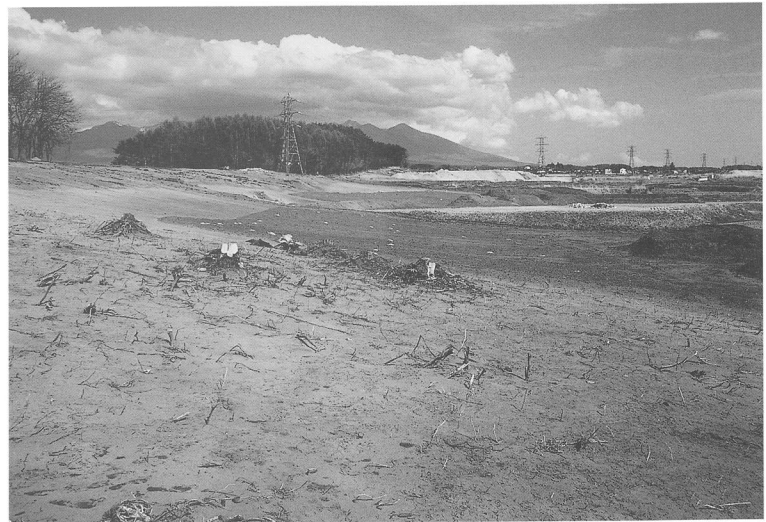


写真6
発掘風景
平成13年度
北から



写真7
遺跡全景
東上空から



写真8
遺跡全景
西上空から



写真9
遺跡全景
南上空から



写真10
第1号住居址全景
南から



写真11
第1号住居址カマド
正面



写真12
第1号住居址カマド
側面



写真13
第2号住居址全景
南から



写真14
第2号住居址カマド
正面



写真15
第3号住居址全景
南から



写真16
第3号住居址カマドと遺物
出土状態



写真17
第4号住居址全景
南から



写真18
第4号住居址カマド
正面



写真19
第5号住居址全景
南から



写真20
第5号住居址カマド
正面



写真21
第5号住居址鉄床石



写真22
第6号住居址全景
南から



写真23
第7号住居址全景
南から



写真24
第7号住居址カマド
正面



写真25

第7号住居址カマド
天井石取り除き後 正面



写真26

第7号住居址カマド
天井石取り除き後 側面



写真27

第8号住居址全景
南から

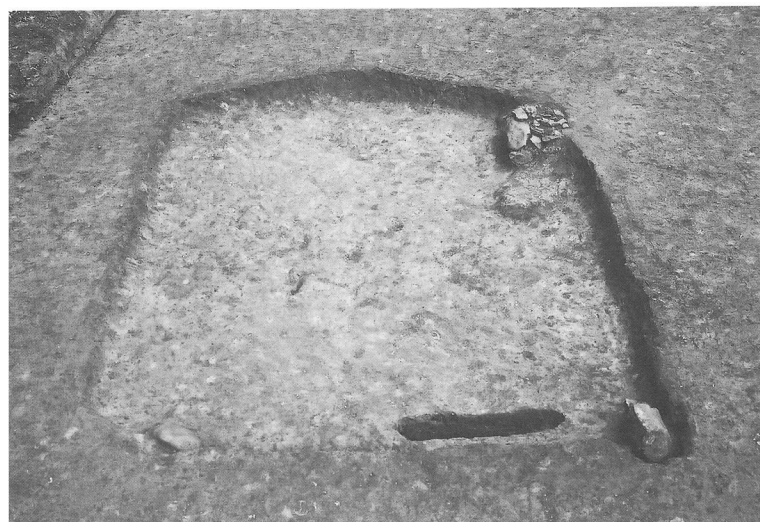


写真28

第8号住居址カマドと遺物
出土状態 正面

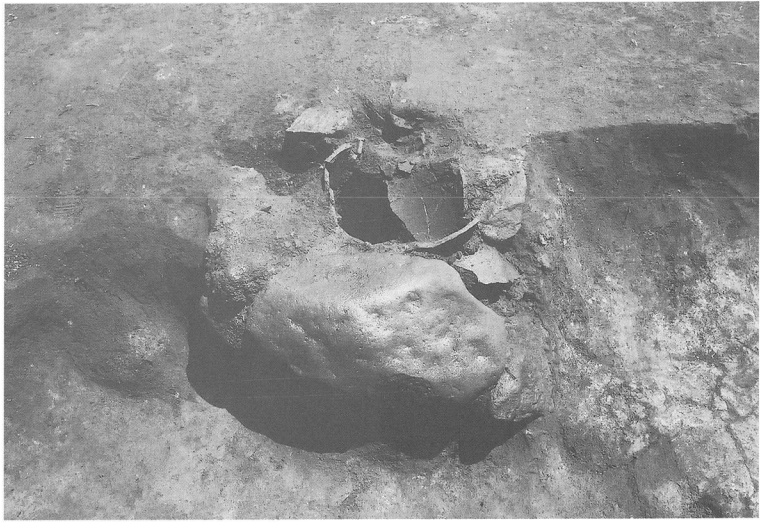


写真29

第8号住居址カマド
正面



写真30

第8号住居址カマド
側面



写真31

第9号住居址礫出土状態
南から



写真32

第9号住居址全景
南から



写真33

第9号住居址カマド
正面

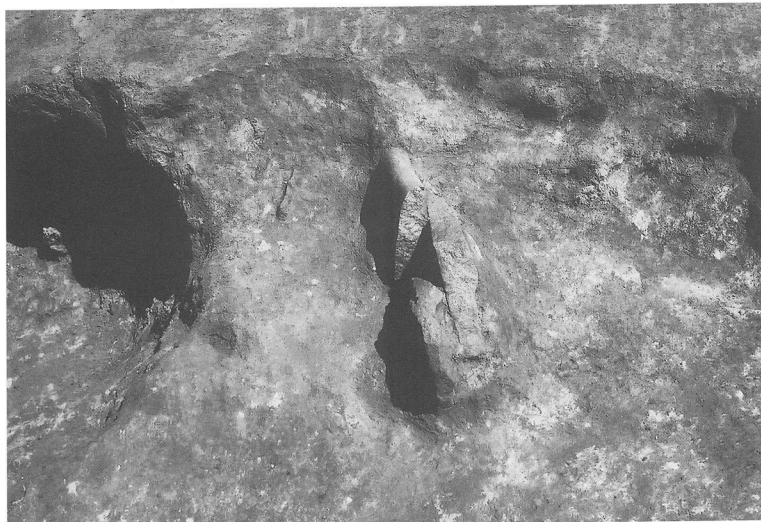


写真34
第10号住居址全景
南から

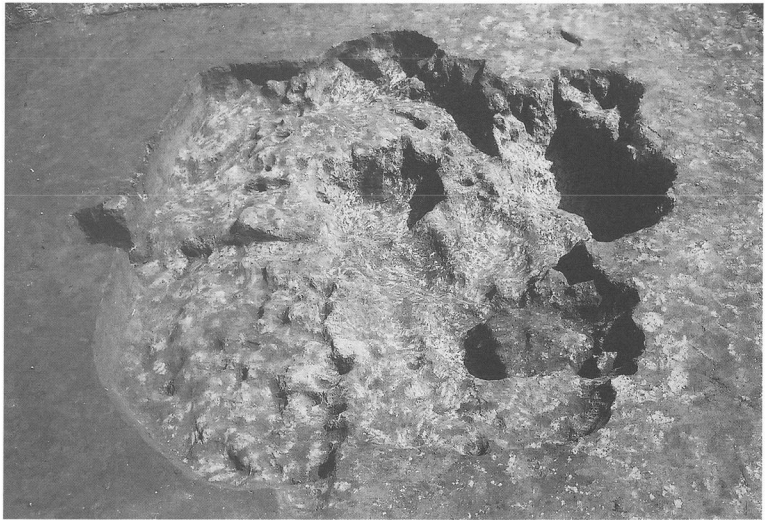


写真35
第11号住居址全景
南から



写真36
第11号住居址カマド
正面①



写真37

第11号住居址カマド

粘土取り外し後 正面②



写真38

第11号住居址カマド

天井石取り外し後 正面③



写真39

第12号住居址全景

南から



写真40
第12号住居址カマド
正面



写真41
第13号住居址全景
南から



写真42
第14号住居址全景
南から

